
僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣

【Zコード】

Z2653Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

バカテスと東方のコラボです。

明久魔改造、咲夜はPADじゃない（ここ重要）、文才皆無なんですが頑張ります

あと更新ですが思いつきで書くんでいきなり5話進んだりとかまばらです。

ストック?何それおいしいの?

15指定は残酷描写等あるためつけています。

キャラ紹介は話が進むたびたまに修正します

挨拶兼補足

初めまして影月です。

このsssはバカとテストと召喚獣と東方とちょっとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。

東方キャラ登場（頑張ります）

お話のメインはバカテス本編

過度のブレイク&キャラ崩壊

メルブラ要素あり

等ございます。お気をつけて下さい。

あとキャラ設定ですが、

明久、咲夜は同じ歳、靈夢、魔理沙は2、早苗は明久の一つ下となつております。

そして最後に…咲夜はPADではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト用の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「ンンンン...」

「...ひ...る。...久...てば...」

「つ...ん?」

「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」

「ふ...うあああ...なんだ...妹紅か...どうしたの?」

朝、なにせり呼ばれたので起きてみると、田の前に妹紅がいた...

彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まあホントはまだ色々とあるんだけど、それはのちほど。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう?

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思つてな。幽香もいるし早く着替えてこいや」

「え、あ...うん、わかつたよ」

「...一度寝すんなよ?」

「しないよ!?」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替へよう、幽香も来るらしいし早く行かないとやばい!!

制服に着替えて(間違えても女子の制服じゃないからねー?)リビングに行くと、

「あー、明久おはよー。今日は起きるの遅かったわね

「幽香おはよー」

声を掛けってきた少女（作者「え？少女（ピチュー）」）なんか電波が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。

実際は「う」と、彼女達は「幻想郷」と「ここ」とは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけないらしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより・・・

「なんで今日は遅いってわかったの？」

「そこの花から聞いたのよ」

「あ～なるほど」

花から聞いた…聞き様によつてはおかしな発言だけど事実である。彼女達は「～程度の能力」というものを持っており（人間でも持つている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」その名前の通り、花を操つたり、会話したりできる。

「よし、じゃあ～」飯作るけど、何か～要望とかはある？」

「～お任せする（するわ）～」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こつしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかつた…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ1（後書き）

うん… ああ ああだ… オー

読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？

1つけてほしい

2いらないかな

期限は4日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね～ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行っておりオリジナルで
東方儂月抄と似たような事件も起こっているということになつてま
す。

なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

s.i.d.e 明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書けてないだけです。（私を見ないでえええ、てかメタるなあああb y作者）また電波が…ま、まあテストに集中しよう…

ガタツ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん…？大丈夫…？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生…？体調を崩してるのでその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します……」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言つて、教卓に戻らつとする教師。ちよつ、まさかこの教師倒れた人間に自分で保健室に行かつて言つのかー?

「…………しつれい……しま……あ……！」

「……？」

教室を出よつとしたところで、姫路さんがこけそうになつたのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫? 姫路さん? ほら、掴まつて、保健室まで連れて行くから

「吉井くん……でも……」

「気にしないで」

さすがに、ほつとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている……早く席につけ……！」

「こんな状態の人を放つておくなんて出来ません……」

「貴様も、無得点にするぞ！」

「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になつたほうがましです」

「待て、吉井貴様！」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちょっと」と「めんね?」「え?……／＼／＼／＼／＼!？」

ちょっとあれだけ抱えて（俗に書く、お姫様だつこ）行ひへ。

s i d e 明久 e n d

s i d e 妹紅

やっぱ、明久だよな。
自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたらし
な…。

(さへてどうしようかな…)

明久は無得点だし、あいつがいないと…行つてもつまらないしな…
幽香もそうみたいだし…
いつその事名前無記入で出すかな?

「チツ、肩が…」

そつ考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まったく、あのバカの考えてる」とはわからん。ましてやあの肩
“ときが私を侮辱して…」

…「ふ、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタツー……』』

あらへ、音が一つ? 気になつてそつちを見てみると、すつゞく笑顔の幽香が…なるほど考へてることは同じことだな…

「?.何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか!?.」

なんか言つてゐけどまあいい…

「とりあえず…」

「ええ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち!?.」

「「最低な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『『アーヴン……』』』

「げふ!?.」

「じゃあ、私も退席しますね」

「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハア…

s i d e 妹紅 e n d

s i d e 明久

なんか教室からすゞい音がした気が…気のせいだな…

よし着いた。

「失礼します」

「あら？ 明久君、どうしたの？」

「永…八意先生いたんですね。すいません急患です」

「そう、じゃあそこのベットに寝かせて」

彼女は八意 永琳。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みみたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」「そうですか」

「でも、明久君？テスト中じやないの？」

「実は……」

とりあえず、さつきあつたことを永林に話した…

「ふうん…その先生って何て名前？」

「え？ 髪先生です」

「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」

「もうテストは受けれないし妹紅と幽香を待とうかと」

「あり、それならお話しましょつか。今暇なのよね」

「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聴いたところ、永琳が一層笑っていない笑顔になつたことだけはここに記そう。
帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（一人は+2時間）説教を食らつた…

プロローグ2（後書き）

おまけ
「でもさ慧音、その教師明久のこと悔聴したんだよ。」「?どうことだ?」「あ～それはね（幽香説明中）……つとこいつ」と「…………」
「もう、でその教師の名前は?」「～先生（慧音切れてるな…）」「（切れてるわね…）」「『フルフルガチャツ』
「ああ、永琳か?ちよづじよかつた…実は…とこいつことだから頼む」「～（い）愁傷さま」「」

後日、この教師は首になつたそつだ…（妹紅談

第1話 朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話 朝の会合

4月…

今日は文翔学園の始業式である
その頃明久は…

「ンンンン…」

「…ハ…ん…ン…ン…」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなわ…」

「うん?ふあ…あ、幽香おはよっ」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう?

「…ねはよう。といひでそれ、何? (ニイシ)

「え? (隣を見る)…うんまあ、理由言いたいから聞いてくれる?」

「まあ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠つていて、遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃつたんだろう…

「実は昨日モソン ン3して…」

「…何時までしてたの?」

「えつと3時くらいまでは記憶がある」

「…」

「…」

「はあ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって嘱つて

るでしょ…」

「あははは…」めぐ…」

「まあいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えつ・・・・・」

「それと…ねとは話は別よ (ニイシ)

「ハイ、ワカリマシタ。」

「うして僕は死亡フラグを立てた…

「明久」めんな。寝くなつちやつてそのまま寝ちやつた…

「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけ
ましだよ…」

朝ご飯を作つてゐる途中、起きてきた妹紅が謝つてきた。でもみんな抱き癖があるのでどうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてくるし

「あはは、まあ明久なら大丈夫でしょ」

「ひどいな～僕は普通の人間だよ？」

「…普通の人間が砲撃とかを切つたりしねえよ…まあかつこいけどせ…／＼（ボソッ）

「へ～どうかした？」

いきなり顔赤くしてびついたんだが…

「いや／＼何でもない／＼」

「そう？…といろでわ…」

やつぱりこれは言わなきゃだよね…

「妹紅…やつぱり男子制服で行く気？」

「そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…
「ん？あ～、うんだつてスカートって慣れなくて…それに似合わないし」

「そうか…僕は似合うと思つけどな～」

「あははは／＼まあその、ありがとう」

「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ～

「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝つて」

「わかった」

さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

「おはよう、吉井、藤原、風見」

校門前でスーツを着た先生に出くわした。

「おはようございます、て…西村先生」

「おはようございます、鉄人」

「おはようございます、西村先生」

「ああ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかつたか？あと藤原、西村先生と呼べと言つてるだろう」

「気のせいですよ、先生」

「え？ かつこいいと思うけどな…鉄人つて」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」

結果が書かれた封筒を鉄人が僕と一人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。

「吉井、先生はお前の行動は立派だと思つ。結果は残念だつたが…」「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、Fクラスだつた。まあ仕方ないよね、途中退席だし

「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」

「あいつが明久のことをバカの肩呼ばわりしたからだ（したからよ）」

「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかろう…」

「うつ…それはたしかに…」

「言いごたえ出来ないわね…」

「まあ今日は罰も受けているから処分はなしだ… 吉井と上白沢先生たちに礼を言つとけよ?」

「…はい」

「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」

「んつ、そうか。」

あまり話しこんどると遅刻しちゃうしね

第1話 朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。あと生活ですが、ゲームは買つけど日常に余裕があるくらいには節約しています。

暮らとして

幽香 明久 慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

第2話 AクラスとFクラスの「コラ（前書き）

え？ P V 2 0 0 0 超え…？ 頑張らないとだな…

第2話 AクラスとFクラスの「コラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていいこうぜ」

始まりは妹紅のこの一言だった。

「確かに時間あるし、見ていいこうか」

「そうね」

少年少女達移動中…

「……」

「アハハハ…」

「何よこれ…」

目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…

「無駄にお金のかかった教室だね…」

「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！」

「格差社会つてやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、やっぱりあの先生が担任なんだ…」

「私の先生苦手だな…」

「私、間違つてもAクラスじゃなくてよかつたかも、って今実感したわ…」

これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」「

「？？？？？？はい。」

名前を呼ばれ立つたのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者か……」

「え？」

霧島翔子は一年生の頃からその姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断つてきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「いや、霧島さんには同性愛者じやないかつて噂があるじやない？」「あ～確かにそうだな」

「それがどうかしたの？」

「いや……僕にはそう思えなくてね……もしかしたらずっと一人の男子を想い続けているのかもしれないと思ってね」

「そう……なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）……（ボソッ）」

「？」

「そろそろ教室行こうか」

僕たちはFクラスの教室に歩き出した。

この時僕は、僕たちを見ていた銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねえ……僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」

「明久、現実を見てくれ……私だって逃避したいの我慢してるんだから……」

「これは……ひどいわね……」

今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だつた。

「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ。」

「そうだな……」

「そうね」

そつ言つて、僕は教室のドアを開いた。

『ガラツ』

「おはよ」「さつさと席つきやがれ、蛆虫やろう」「う~

なんだらう~、この教室。入つた第一声罵倒だつた~

「つて雄一なんで教卓に立つてるの?」

「そりゃ担任が「蛆虫やろうとは言い根性してゐるな(わね)……」「え?」

罵声を浴びせた少年、坂本雄一はその方に目を向けた。

そこにはもこたつ…妹紅とこり…幽香がすごい笑顔で立つていた…

「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」

「また、それはお前たちじゃなくて明久のこと…」

「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」

「覚悟出来てるんだろうな(わよね)?」「

「ち、ちょっと待つてくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから? ? ? ? ? ?あ、明久!。助けてくれ!。」

雄一が助けを求めてくる…仕方ない…

「一人とも…」

「「なに?明久」

「あとでやつてもかまわないから、今は席に着こり~」

「「そうだな(そうね)」「

「ち、ちょっと待て明久! ? 見捨てる気か? !」

雄一は必死に助けを求めるが、

「だつて原因雄一じやん」

僕は切り捨てるにした。

第2話 AクラスとFクラスの「コラ（後書き）

次回のお話は？

とうとう始まつた本編、雄一のおとしめようとする策略に明久はどう対抗するのか？

お楽しみに（大ウソです

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（前書き）

明久の紹介じゅうじょうかん…あと最初の担任変更b

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」

「あ、すいませ…つて慧・上白沢先生…」

後ろから声がかけられたので振り返つてみると、そこには慧音が立っていた。

彼女は上白沢 慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている

「あ、慧音おはよう」

「藤原さん、学校では上白沢先生です」

敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）
…上白沢慧音です」

「なあ、明久慧音どうしたんだ？」

「さつき黒板見たときチョークがなかつた…」

「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」

ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチョークを取りに行つた。

「うおおおお…！…すげえ美人だ…！」

「不思議な帽子をかぶつてるが、逆に美人度が増してる…！」

戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いてるよつにも見えたけど気のせいのはずだ…）

「えつと、何がありますか？」

「付き合つてください…！」

「…異端者には、死を…」「…」

「すいませんでした…！」

「「ばかばつかね」」

「…ハア」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

「あと言つておくが、わしは男じゃ」

「「「な、なんだと！？」」「」」

みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持つていてるがまあいいだろつ。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、
「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが
苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニー・テールで勝ち気な印象を与える少女—島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です 」

『シユツ…』（幽香がペンを投げた音）

『ガツン…』（慧音がチョークで相手…はじいた音）

「え…？」

呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げなによつて」

「考えとくわ」

「幽香…」

「…わかつたわよ…」

僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に
関しては投げる前に止めた）

「島田さんもそのよつな発言は控えるよつてしてくださいね（二口
ツ」

「は、ハイ…（あの一人…吉井どじうこう関係かしら…）」

島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだり…

「あいつには氣をつけなきやだよな」

「そうね…」

「どうしたの？一人とも」

「「氣にするな（気にしないで）」」

2人はそれぞれ笑顔で言った。

「・・・・・です、よろしく」

次は妹紅だな

「藤原妹紅です、男子制服を着てているが女なんであしからず」

「なるほど木下みたいなものか」

「じゃから、わしは男じや…！」

うん…もう突っ込むまい…

「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」

「「「異端者には、死…」」」

「明久に手出したら…」」

『バギヤンツツツ…』（ちやぶ台が碎け散る音）

「 いじめるからよしへ」

「 「 「 「 イエス ヴェー 」 」 」

「 も、妹紅……」

「 だつて明久に……」

「 それもだけどちやぶ台……」

僕らの前には碎け散つた妹紅のちやぶ台……

「 …」

「 明久、ちやぶ台一緒に使わせて……」

「 別にいいけど……」

おつと次は僕が……うんこの微妙な空氣どひょひょひ……仕方ない……

「 一「ホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

…ボケよう

次の瞬間、

「 「 「 ダアア――リイーーン――。」 」 」

野太い男の大合唱。

「 (言えるわけないだろう／＼／＼)」

「 (明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら?)」

「 (何言つてるんだ、あいつは／＼／＼)」

やばい、吐き気が…空氣を変えるためとはいへるんじゃなかつた
…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう?

「 ??????失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願ひします。」

さあ気を取り直して次は幽香だね
「 風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」

ふう、普通だ…

「あと、明久の幼馴染でもあるわ
すつごい笑顔で言い放った…やつぱりこの人だ…僕が困るところ

をそんなに見たいのか…？」

「くそ、なんで吉井ばかり…？」

「あんな不細工が…」

うわ～みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…

「あと、明久に手を出したら…」

?やばつ…?

『「ウツ！…！」（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）

『「バシッ！…！」（幽香の手をあわてて明久が止めた音）

「どうしたの？」

「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…で
も手加減してたみたいだね…）」

「…仕方ないわね…「あの、遅れて、すいま、せん。」…」

「…え？。」「…

全員がその声の方に目を向けるとそこには一人の女子生徒がいた。

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（後書き）

さて机が一つ犠牲になるところでした。
慧音の頬の血は氣のせいさ…（ハハハ
ちなみにチョークとペンは相殺で粉碎しました。

第4話 理由と試験戦争（前書き）

PV20000ついでいたいわにせも「うわー000行きましただ…

第4話 理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそつだらつ。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。

走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちよつどよかつたです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はいーあの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持つ少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっー質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によつては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしない

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだらう。

「そ、その？？？？？？振り分け試験の時に高熱を出してしまってして？？？？？」

やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…（アローラ2参照）

「明久…」

「大丈夫だよ妹紅ちょっとね…」

いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…

すると先ほどの姫路さんの発言に

「そりいえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あればむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「「「異端者には…」昨日私は明久の家に泊まつてたからあり得ないな」「ちよつ、妹紅！？」…チクシヨオオオオオオオオ…！！！」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願ひします！」

そう言つうと瑞樹は明久と雄一付近の空いてる席に着いた。
「き、緊張しました～」

そう言つて瑞希が卓袱台に突つ伏した。

「あのさ姫「姫路」…」

体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやがつた…

「は、はい。何ですか？え～と…」

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで体調もう大丈夫なの？」

「よ、吉井君！？」

声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだか…ちょっと悲しい…

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ…」

「そうね、女性に向かつて蛆虫つていう奴よりははるかにかつこいいわね」

「うん、ゴリラよりは絶対かつこいいな」

「うぐつ・・・・ま、まあ確かに見てくれば悪くないな。そういうば俺の知り合いにも明久に興味を持つてる奴がいたな。」

「それって誰ですか！？」

「雄二」が言つと嫌な予感しかしないな…

「確か久保ーー」

「久保？」

「利光だつたかなあ。」

久保利光一（性別 オス）

「うん、だらうと思つたよ…

「…（ホツ）

「ゴリラ…」

「え…」

「覚悟はできてるか（わよね）？」

「ちょつ…？」

「ほりせー、静かにしなさい」

「あ、すこませ…」

『バキッ、パラパラ…』（教卓が残骸となつた）

「……ちよつと、替え持つてきますね（あの学園長じつシメテくれようか…）」

「あ、手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待つてください」
さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…

「……雄一、ちよつといい？」

「ん?なんだ?」

暇になつたからか欠伸をしている雄一に声をかける。

「ここじゃ話しくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」

「雄一この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない?」

「…………何が目的だ。」

「雄一が警戒するように田を細めてこちらを見る

「何がつて、姫路さんと妹紅達のためだよ」

「……」

「あの教室じや体調崩すのは田に見えてるからね」

「お前：本当に明久か？」

「それどういう意味や!?」

「まあいい明久と言つてゐる

הַנְּבָאָה בְּעֵד הַמִּזְבֵּחַ וְעַל־יְדֵי־מֶלֶךְ־יִשְׂרָאֵל

ମୁଦ୍ରାକାର?

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

- ? ? ?

先生も房へてきだし教室に入らそ
まあいしたぞ

「ではクラス代表の坂本君、最後にお願いします」

「雄一の番になり、雄一は教卓に上がった。目立たがりだね」雄一
「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに

「じゃあゴリラで

妹紅

一所で壁に一つ置きたい。

ハグ異ハ故室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が・・・・不満はないか?」

「 「 「 「 大ありじやあつ ! ! ! ! 」

Fクラス魂の叫びである。ちょっと耳が痛い…

「だろう?俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・」
スはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つ。」

いつして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう...すこく不安に感じる...

第4話 理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ?」

「うん?あ~試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」

「――――――――」

「?」

第5話 戦力と観察処分者（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・
（「ふふふふふふ）・・・・・・・・
P V 5 0 0 0 超え・・・だ・・・と・・・?
・・・・・・・・・・・・・・

第5話 戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思つ……」

壇上で自己紹介をしていた雄一のいきなりの提案。だが、いきなり言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない。」

「もこたん付き合つて」

「断る」

「ゆうかりん罵つてください」

「……シニタイノカシラ？」

「うおおおおおおおおおおおおお……！」

何だろう、力オスだ…

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思つてくれてい。

しかし雄一の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。片や2学年の成績が悪かつた人たちが集まつたFクラス。片や2学年の成績上位の人たちが集まつたAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる！」

しかし雄一は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放つた。提案した僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか？

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃つていいからな。今からそれを説明してやる！」

そうゆうと雄一は少し間をおいて、ある一力所を見た。

「土屋。畠に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

で「じつちに来い」

「.....！」（ブンブン）

「は、はわつ！？」

「あらあら……」

「ゆ、幽香？……」

「?どうしたの明久？覗かれてないわよ？」

「.....くつ」

「いや、よく手を出さなかつたな～って……」

「…すぐに切れてると迷惑かけるもの…」

「そつか…」

まあ話は戻してつと、土屋は畳の跡を隠しながら雄一の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者だ」

「.....！」

雄一の発言に、クラスのどよめきが走る。

彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムツツリーーとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。

「ム、ムツツリーーだと！？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」

「だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ…」

「.....」

まあ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思つよ
友人として

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだつて、その力は
知つてゐるはずだ」

「えつ？ わつ、私ですかつ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだつた！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらない」

「あと風見幽香もAクラス並みの点数点数保持者だ」

「そうだ！！幽香様がいた！！」

「ゆうかりいいいいいいん！！！」

「明久…ねえあれヤツティイ？」

「…ダメだからね？」

「藤原妹紅に關しても、古典、歴史関係はAクラス並みだ」

「…「もこたくーん！…」「…」

「幽香の気持ちわかるかも…」

「アハハハ…」

「木下秀吉だつているし、俺も当然全力を尽くす」

Aクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄一は…？

「坂本つて、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人もいるつて事かよ？」

「もしかしたら、やれるんじやないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

やっぱ雄一は人をまとめるのがうまいな…。いつこうといは悪友として認めてるんだけど…

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言があるね…。

静まりかえる教室。なんで僕の名前を言つかなあ。

「誰だ？ 吉井明久つて？」

「知らねえよ。」

雄一の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。

「そりゃ、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」

雄一は僕を指さして言わなくともいい」とまで言った。雄一の奴・

・

「…………それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ?」

まあ、普通そういう評価だよね……

「ああ、学年1のバカの屑だ」

そこまで言つたかこの「ゴリラ」…

「ほう……ゴリラ……そんなに燃やされたいのか?」

「そうね……肉片にして花の肥やしにしようかしら……でも花がかわいそうね……」

「し、しかし明久は教師の許可をもひつて俺たちより召喚獣扱つてる分操作技術だけなら学年1だ」

「それつてすごいのか?」

「ああ、盾くらにはできる」

妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言ひ方つだな……

「これだけの有名人が揃つてているんだ。お前ら、勝つて当然だろ?」

「そうだ! これだけの人物がいるんだ! 絶対勝てる!」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じやない!」

「そうだ! 僕たちに必要なのは座布団じやない! リクライニングシートだ!」

まずは俺たちの力の証明としてロクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ!?

「「当然だ!」」

「ならば全員筆を執れ! 出陣の準備だ!…」

「「おおおおおおつ!…」」

「俺たちに必要なのは、卓袱台じやない! Aクラスのシステムでスクだ!…」

「「うおおおおおおおおおおおつ!…」」

「お、おー・・・・・・・」

雰囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。

何だろ？…僕には不安しかないよ…

第5話 戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…

ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは20%くらい
とします。

思いつき次第次話を投稿します。

第6話 宣戦布告といつこ（前書き）

幽香様降臨

第6話 宣戦布告といひ

「明久にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもうづ。無事大役を果たせ！」

「待つた雄一。下位勢力の宣戦布告の使者つて、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」

予想的中か…

「大丈夫だ、騙されたと思って行つてみる。俺は友人を騙すような事はしない。」

「いや、よく騙すでしょ？」

「…じゃあ私が行こうか？」

「まで藤原、お前が行つたら…」

「だつて危険はないんだろう？それなら問題ないじゃないか」

「そ、それは…」

はあ、いくら嘘だつてわかつても妹紅をそんなどこに行かせたくないしな…

「わかつたよ…じゃあ僕が行つてくるよ」

僕は宣戦布告の為に教室を出た。むつむつませよう。

s i d e 妹紅

「さすが明久だな。簡単に騙されやがるゴリラがクククと笑つてやがる…やつぱり…

「やはりそんな魂胆じやつたのか、雄一…よ

「それ以外何があるんだ、秀吉」

ため息をはきながら木下はゴリラに言つた。やつぱりこいつ燃やす

べきかな…でも

「だつたら残念だったな、ゴリラ

「？ 何がだ。あとその呼び方はやめろ」「だつて幽香がついていつたからな」

「?.どういう意味だ？」

まあ、明久もいるしそこまでしないだろ?。

s i d e 明久

さてDクラス前に到着した…

「待ちなさい、明久」

「あれ？ 幽香どうしたの？」

「私も行くわ」

本当は断りたいところだけど、まあ危険になつたら庇えばいいか…

「失礼します」

「？誰、君」

ちょうどいいや

「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」

「いいわよ、平賀君」

「？なんだい」

「あ、えつとDクラスの代表ですか？」

「そうだけど…」

代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さつさと書いて帰る…

「えつとFクラスはDクラスに対する宣戦布告します」

「え？」

そりや驚くよね…

「おいお前ふざけてんのか？」

Dクラスの男子だらう…いきなりこちらを睨んできた。

それに従つて複数人立ち上がつてるし…ハア…

「てかさ、こいつって確かに観察処分者じゃね？」

『ピクツ』

「あ～あのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』

「そうそう、人間の肩の代表」

ブチツ

あ
一
二

「じゃあかたづけても問題な「ねえ、貴方達…」なんだ?」「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの?」

ダメだ……笑顔なんだけど目が笑ってない……

まして世間から聞いてれば明久の侮辱は少かり……」

お前何言つて和む。自分のものが何處にいるに我慢ならぬの」「えつ、撲つて毛のなの?」「えつ、え?」

「ところで……いい声で鳴いてね」

ପ୍ରକାଶକ

ପ୍ରକାଶ କରିବାକୁ ମୁହଁରାର ନାମରେ ଏହାର ପରିଚୟ... - - -

— ۲۰ —

ものかし懸嘆

لـ ۚ ایـ ۖ نـ ۖ اـ ۖ اـ ۖ

「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけ

۱۷۰

「おまけに?」

「HSCT（アルティメットサテイスククリーチャー）、あい

「え？ だが、

「え？ だが学園ではそんな…」

「基本明久が押さえてたからな……だが堪忍袋も切れたんだろ？、おもにお前が原因で」

「…」

「雄二としてはやつさの悲鳴は明久のものであつてほし」と思つたんだろう…

するとドアが開いて…

「お、下ろしなさい／＼／＼／＼」

「下ろしたらまた暴れるでしょ？」

明久が幽香をお姫様だつこして現れた…いいな…

side 明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…

「大丈夫か？明久」

「うん、まあ幽香が暴れたので助かつたよ…止めるのに時間がかかつたけど」

「吉井」

島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！！
「ちょっとさつきのどういうことか聞きた」「それより前に放せ（放しなさい）」「わ、わかつたから首掴まないで…」

「大丈夫か？明久よ」

「秀吉…うん大丈夫だよ」

なんか向こうで「ざ」ざが起つてゐるけど無視だ…

「それより坂本君、貴方…」

「よーし…ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋上に行くぞ…」

あ、逃げた。まあ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…
はあ、先が思いやられる…

第6話 宣戦布告とつら（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほつ…忘れるとはい一度胸だな…」

え？慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ！！！」

いやあああああああああああああああ…！…！…！

第7話 ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。

あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね～あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

第7話 ハーティング

「…………（サスサス）」「ムツツリー」。覗いてた時の畠の跡なひもが消えてるよ。」「…………（ブンブン）」「いや、今から畠走れてもムツツリーが止なのは皆知ってるから」「…………（ブンブン）」「…………（ブンブン）」「いやそこまでバレてるのに否定し続けるなんてある意味凄いと思つ」「？私がどうしたの？」「…………（一ノナ）」「何色だった？」
姫路が水色、風見が見えなかつた（クツ）
いやそこまですらすら言えてる時点で……」「次こそは……」「明久じやないと無理よ」「え？」
ナーライイダンダ」「ヒトハ」「だつて明久、お風呂一緒に入ったことあるじやない（一ノヤ一ノヤ）うん……ひじですねわかります〇」「何だと？」「いやち「吉井、どうい「はいはい話は最後まで聞いひね」ちょっとはな……」「まあ小さこ頃の話だし、それ言つたら私だつてあるしな。露天街あるし」「妹紅……それ底えてない……」「皆の衆ここはどこだ？」「「「「審判の法廷」「」「」「男とは……」

「「「「...『愛』を捨て『哀』に生きる者成りッ...」」」

「これより審判を行フ」

「ハイ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に...」

「簡潔にのべたまえ」

「実にうらやましいであります...!」

『『『我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をツー！死をツー！』』』

「うわ...変な黒い集団が...」キ を思に浮かべてしまつた...

「とりあえず、しになさい」

「とりあえず消える」

「「「「『あや ああああああああ...』」」」

屋上に出ると、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる...
ムジツリー...努力はいいけど...スカートの中を覗こうと頑張るの
はどうかと...

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな?」

雄一がフォンスの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各自その辺に座る。

「うん、一応今日の午後に開戦予定と告げてきた」

「それじゃ、先にお昼ご飯つて事ね?」

「そうなるな。だからしつかりと腹ごしらえしちゃよ」

「明久、はいこれ」

幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ?なんで...

「台の上に忘れてたわよ?」

「あ、そうかありがとう。危うく飯抜きになるところだつたよ」

「あの……」

「どうかしたか？」

「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど……」

「「そりゃ、明久が作ったからね（からゆ）」」「

「まあ、たまに作つてもうつたりしてるしね」

「そうですか……」

あれ……何だろ？ 気のせいかな？ 今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じたんだけど……。

「で、どーも一事なのよ吉井？」

「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」

「いいからせつと質問に 待つて藤原さん、ウチの首は一度曲がつたりしないから勘弁して欲しいんですけど……」

「だったら、とつとつその殺氣を引っ込めて腕を放してもうつか？」

「つーか明久お前料理なんてできたのか？」

「それってどういう意味さ」

「お前去年、飯食つてなかつたじゃねえか」

「一時期、毎飯を水と塩で乗りきつてた事もあつたしのう」

「…………舌が肥えてるとは思えない」

「やうね。絶対にあり得ないわね」

「うわ……ひどい言われようだ……まあ事実そんな時期もあつたけど……とりあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そつ……（

ガクガク

「すご~くおこしいわよ？」

「そうだな、私達もよく味見たのんじる」

なんか褒められると、少し恥ずかしいな……

「あの、吉井君」

「ん？」

そんな中、やつさまで考え方をしてた姫路さんが口を開く

「宜しければ私の弁当も食べててくれませんか？」

「え、どうして？」

「是非吉井君に味見をしてもらいたいんです」

「いつ？」

「明日のお皿で良ければ

「つーん、まあいいけど」

問題はないかな？

「…………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、監さんにも…」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じやなかつたら」

「ああ、それは楽しみじゃの！」

「…………（口ク「ク）」

「…………お手並み拝見ね」

僕は小物系作つてくるかな…

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そつか

あ、そーいえば試合戦争のミーティングやつてたんだつた。すっかり忘れてた。

「雄二ーよ。一つ氣になつていたんじゃが、何故Dクラスなんじゃ？
段階を踏んでいくならEクラスじやらうし、勝負に出るならAクラ
スじやらうし…」

「そういうえば、確かにそうですね」

「坂本君の事だから、何か考えがあつての事だと思つけど」

「まあな。理由は色々あるんだが、とりあえずEクラスを攻めない
理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かつたかもしれない。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみろ」えーっと……

「うん。幼馴染みが一人と美少女が一人、親友が一人にバカが一人にムツツリが一人いるね」

「どれが誰かは言わなくてもわかるだろ？」

「誰が美 s ゲフツ」『ドゴツ』

「で、それがどうしたのかしら（ニコツ）」

何か言おうとした雄一を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いつて事だ」

「？、それじゃ A クラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

一応ちゃんと考えてたのか…

「まあこれも打倒 A クラスへの必要なプロセスだからな問題ない」内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね。ま、その時が来たら解るか。

「あ、あの！」

？どうしたのかな？

「ん？どうした姫路」

「えつと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合つてたんですか？」

「ああ、それか。それはつつき明久に相談されて「それはそつとー」

「雄一は何言つたかわからんから発言させよか！！」

「さつきの話、D クラスに勝てなかつたら意味が無いよ？」

「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろ？と必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは 最強だ」

聞いた限りかつこいいんだけど、心配」としかないのはなんでだろう

第7話 ミーティング（後書き）

閻魔さまこと映姫に関してですが外見案で

- 1 幼女
- 2 明久と同じくらいの少女
- 3 お姉さま

結果は決まり次第お伝えします

第8話 Dクラス戦1（前書き）

PV1万突破…突破記念短編考え方や

第8話 Dクラス戦1

s i d e 幽香

ついに始まつたわねDクラス戦…

私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかつて?明久から謹慎処分
喰らつてゐるよ、仕方ないじゃない…

「…………今前線部隊と敵が衝突中」

「状況は?」

「…………今のところ互角」

Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けてい
る…しかし彼どうやつて状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗
聴器は破壊したはずなんだけど…

「そういう風見」

「何かしら?」

「お前、補給テストは…」

「ある程度だけど受けってるわ」

「……いつの間にだ?」

「途中退席をした次の日よ。ああ、明久と妹紅も受けてるから問題
ないわ」

まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わな
かつたわ…

どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだけね(プロロ
ーグ2 参照)

しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らつてゐるし…明久から喰らつ
てるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝つたら明久に何
頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないようと思える
わ…

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしいがおかしいって？H A H A H A何を言つてるのさ

「明久、お願ひだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だあつ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一宮金次郎、といつた理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤアアア（バタン、ガチャ）』

やばいすぐ逃げ出したい…

「ところでテストやつぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになつてゐる。周りにとつて僕は『勉強のできない觀察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はあ、わかつたわよ…いくぜ、明久…！」

「Fクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」

「「ここにいるDクラス全員に対して、勝負を申し込む！－試験召喚モン召喚！－！」」

僕達が手を合わせるようになると足元から、魔法陣というべきだろうか？幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としつぽがついたようなデザインだ。

「いくよ！」

「いぐぞ！」

「たかだかFクラス一人だ。一瞬でつぶすぞ！－！」

「ましてや一人は観察処分者！－！」

古文

Fクラス 吉井明久 62点

Fクラス 藤原妹紅 317点

VS

Dクラス モブ×10人 平均101点

「「「「な、何だあの点数！－？？」」「」」

「ちえ、やっぱちゃんとできなかつたから400点行かなかつたやでも高得点には変わりないよ」

「ひ、ひるむな！－数でつぶすぞ！－！」

「「「「お、おう－！－！」」「」」

「そんなに甘くないっての」

妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた

「「「ぎゃああああああ！－！－！」」「」」

Dクラス4名 0点 戦死

やつぱすごいな…おつと

「妹紅危ないよつと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた

Dクラス2名
0点 戦死

「え……なんで?」

どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくな
い限りは一撃で倒せるみたいだ：

同じ要領であと4人を倒し…… 戦闘描写すらなしかよ！！」
「……ハイハイ鉄人お願いしますね」「…………いやああああああああ
…………」「…………前線部隊はまだ先みたいだしな…… よし、

妹紅

なんだ?
」

四

雨經詩卷之三

「お、それ楽しそうだな。じゃあ私が勝つたら今田の晩飯慧姫と一緒に食あうぜ」

「へー、二つめの『アーティスト』……」「いいんだよ」「ああ、じゃあ……」

「へそ、ここからなめてんのか？」

「妹紅」

۱۰۷

「ゲームスタートだ！！」

卷之三

あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちゃつた…。」

第8話 Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収つとちょっとですが、明久のことが
出ましたね。

明「まだ内緒」、「はあるんだけど後に書くんでしょう？」

書けるかな・・・（遠い目）

明「ちよつとーー？」

PV1万記念短編 向日葵の記憶（前書き）

3回目で14000越えって…
題名から誰のことかわかるかもしませんがどうぞ

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない……

それはホントにただの気まぐれだった……

「さて水をあげに行こうかしらね」
私はいつものように向日葵畠に出た。

「あら?」

するとそこには5、6歳くらいだらうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた。
いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし……話しかけてみようかしら……

「あら? 人間の子供がなんのよつかしら?」

「え……」

いきなり声をかけられたことに驚いたのだらうか、その子はびっくりしたように振り返った……

「……」

見ようによつてはかわいらしい顔立ちだらうか、しかしそれよりも私が見入つたのは……その瞳だつた。
濃いめの茶色……どこにでもいそうな色だつたが、深かつた……まるで吸い込まれるような……すべてを見透かされるような……そんな瞳をしていた……

私はそれに見惚れ、そして恐怖した……

こんな子供が……ここまで深い思いを瞳につらせるものなのだらうか……

「お姉さん誰？」

「いけない…思考にふけるとこだつたわ…」

「名前を聞く場合、自分から言つのが礼儀つてものよ?」

「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」

「明久ね…私は風見幽香よ」

「へ~」

どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…

「明久、気をつけたほうがいいわよ?」

「何を?」

とりあえず…

「ここにはね…とつても怖い妖怪が現れるのよ」

「じゃあ、ここを出なきやかな…」

「そうね…だから早く…」「こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね」え?」

この子なんて…

「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどす」「くでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」

聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…

でも…

「じゃあ、またねお」「まちなさい」?」

「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る?」

「え…でも」

「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし(まあ、自分のことなんだけどね)」

「うーん、じゃあ行こうかな」

笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まあ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…

それからも明久はちょくちょくとここ遊びに来るようになつた…そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになつていた…

でも、ある意味予想できて、起つてほしくなかつたことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会つて数ヶ月たつた時、八雲紫の一言が始まりだ
つた……

- 1 -

「……なんでもそんなのを……」

あ、
逃げた

曆頃

早く行かないと…今日は明久が向日葵畑で待つてるんだつた…
その時、私は気づいてしまった…向日葵畑に感じたことがない妖力
を感じることに…・・・

(あれか!!朝紫が言っていた妖怪!!?)急かな毛ヤニ

「アーモ、カツハナツアーモ。」

「な、やめろ!! 花が傷つくじゃないか!!」

「ハナ? ハレ? ジヤマクサイナ...」

た

あの女性：一口不

二〇〇〇

ゾワツ

「 「 …? 」 「

な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何…?

「この花達は幽香が毎日頑張つて育てたものなんだ。それに気安く触れるな…！」

「 ……」

明久の茶色だつた瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた。周りを包むような殺氣。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…

ああ、そうか…

「フ、フザケルナアアアア…！」

妖怪は明久に恐怖したことが許せなかつたのか、明久に飛びかかつた…

『ガツンッ』

「なつ…？」

しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によつて止められていた…

「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノ…」

「ええ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」

私は…相手に向けて傘をつきつける…

「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」

「覚悟はできるわよね?」

「ヤ、ヤメ…」

「…消えなさい…」

「マスタースパーク…」

「あれ?」

「あら？ 起きたの？ 明久」

「えつと・・・なぜ僕は膝枕されてるの？」といましうか？」

時折この子の思考がわからないわね…

「貴方、私が来なかつたらどうする氣だつたのかしら？」

「あ、そうか僕妖怪に襲われて…」

「ねえ、明久…」

「なに？」

「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思つの」

「うん…」

「だから…逃げる手段として私が特訓してあげるわ…」

「えつ・・・・・」

ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・

「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと
来なさいね？」

「・・・・はい。」

ほんと明日から楽しみだわ。

思えば、この時…いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見
ていたのかも知れない…

「…夢…みたいね」

はあ、まさか明久と会つたこの夢を見るなんて…／＼＼＼＼
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあつたのよね…
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな…

「おじや まします。明久、起きなさい」

まだ寝てるみたいね…

私は明久の部屋の行いつとしたとき、リビングにある花に気づいた…

「…ふふ」

それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、ちゃんと育てているらしい。

蝴蝶蘭：清純、純粹という花言葉を持つ花。

でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう…この花をあげた本当の意味に…もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛しています

PV1万記念短編 向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…

時期的には第1話の直前です。

ちなみに向日葵の花ことばには「私の日はあなただけを見つめる」というものもあるのですが

第9話 ロクラス戦2（前書き）

とつとつ彼女が……うまく書けるかな……

第9話 Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「やうじやのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじや…！」

「「「イエッサー！」」「」」

美波と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしゃ美波お姉さま・五十嵐先先生、こっちに来てください！」

戦場に響き渡る声に、美波は顔色を青くする。

「くつ！ぬかつたわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということを…！」

「美春…だから言つてるでしょ…ウチは普通に男が好きなんだつて…！」

「いえ、お姉さまも美春のことを愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかつたから美春を捨てたのでしょうか。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あんた」

「…なんじやろうか…帰つてもよいか？」

「き、木下！！手伝いなさい！！」

「はあ・・・しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本
氣で帰つてはだめか？」

「き、木下～！？」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚サモン」

「あ～もひ、試験召喚獣召喚」

科学

Fクラス 島田美波 52点

VS

Dクラス 清水美春 78点

このままではやられてしまつ。そしたら補習室に・・・・・

「い、いや！ 補習室は嫌つ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻
撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を引いた。

戦死した、と思った美波であったが

「え？」

島田美波 6点

点数が僅かに残つた。どうしたのか困惑していると

「フツフツフ・・・・・・」

『ガシツ』

突然美春が美波の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行こうとした。

「ちょっとー、どこに連れて行こうとしているのー。」

「どこに? 愚問ですわ、お姉様・・・・・・」

ゆつくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません! さあお姉様! 美春と共に大人の階段を上りましょう!」

目を爛々と輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよー、前から言つていいるけど、ウチは普通に“男”が好きなの!」

「大丈夫です、お姉様! 初体験は怖いかもしけませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ!」

「い、いや!」

「無駄ですか、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません!」

美春の言つとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。ハ方手詰まりだつた。それでも誰か助けてくれると信じて美波は助けを求めた。

「た、助け…」

「さあ、美春と一緒に…」「邪魔だ…!…だけ」「え?」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでの「」とく燃やされ美春の召喚獣は…

清水美春 0点 戦死

「な、何が起こったのですの?」

その先の戦場では、

「ははは、燃えろ!…」

「ぎゃあああああああ…!…!…!…」

「…斬る…」

「…うわあああああああ…!…!…!…」

「戦死者はほしゅうづづづ…!…」

「…いやああああああ…!…!…」

明久と妹紅の召喚獣によつてどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるDクラスの面々だった…

side 明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな…

「よし、明久!…討伐数を確認するぞ!…!」

もこた…妹紅…討伐数つて…

「えっと僕は17人かな…」

「…やつたあああ！！勝った、18人！！！」

「うん、おめでとう」

「明久、約束だからな！！」

「ふふ、わかつてるとよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや・・・

「明久、たすかっただぞい」

「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかつたなんて言えない…

「よ、吉井…」

「し、島田さん？」

「とりあえず助かったわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

第9話 Dクラス戦2（後書き）

なんていうか…突破短編で燃え尽きた…
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出で
ます

第10話 ロクラス戦ラスト あとがき（前編）

私的のことですが・・・

空の境界は神作品だと感づいて・・・

第10話 Dクラス戦ラスト あとがき

Dクラス付近

さすがに点もやばくなつてきたな…

「明久、どうする?」

「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」

「おい、やばいぞ！－！Dクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」

船越先生といえば数学・・・くつ、点数的にもうみんなやばくなつてゐるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ！－！」

「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ…！

s i d e 雄一

風見が手洗いに行つている間に暇だなーと思つていて須川が教室に入ってきた。

「坂本」

「？須川どうした？逃げてきたのか？」

「いや、吉井から船越先生のDクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい？」

「そりや、放送で…」

「そつと言えんば… ククク、ちょうど風見もいないことだし、須川、・・・・・・・・・・と放送で流せ（ニヤ）

「・・・了解だ（ニヤリ）」

ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄一が死亡フラグを立てている

s.i.d e 明久

『ピンポンパンボーン』

『連絡致します』

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

『船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい』

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ・・・

『吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「・・・え・・・・？」

船越先生
数学担任の45歳独身

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に
単位を盾に交際を迫る様になつたと噂の人・・・

「な、なんてこつた・・・」Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言つてるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！

『繰り返し・『ジゴーンツ』なつ!!え、ちよ、やめ・・・・・』

• • • • • • • • • • • •

『・・・コホン、さつきの放送に訂正を入れるわ。船越先生、体育館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ』

((((須川お前のことは忘れない・・・)))

『あと・・・坂本雄一・・・クビヲアラツテマツテオキナサイ！！』

あ、雄一終わつたな……

「明久、私も行つていいかしら? (ニコツ」

妹紅

今は戦争に集中しよ!」

「吉井!」

「横田君? どうしたの?」

「(な、名前が出た) Dクラスの代表の隊が、隙を見てFクラスに向かっているらしいぞ!」

な、さっきに放送で見逃してしまったか!?

「みんな!! 急いでFクラスに戻るよ!!」

「「「「了解!!」」」

Fクラスに戻ると・・・

「・・・・・・・・・・・・」

「チョット、マツテテモラエルカシワ?」

「「「「は、はい」」」

す"」に笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄一と、

幽香の殺氣おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え～っと」

「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろ?」

あ、代表として何とか立て直したね。

「確かに僕たちじゃ無理だね」

「なら「だから、「ん?」

「「姫路さん、あとはよひじへ」」

僕と妹紅がそつそつと

「あ、あの・・・」

平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無をそつに姫路さんが肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通りなかつたと思つけど…」

「い、いえ、そういう訳なくして…」

「？」

「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願ひします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」

「はあ……、どうも」

「あの、えつと……や、試験召喚獣召喚です」サモン

「え？あ、あれ？」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

現代文

Fクラス 姫路瑞希 345点

VS

Dクラス 平賀源一 128点

「う、ごめんなさいーー。」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であつさつと、斬つてしまつた。

こうして、Fクラスの勝利は決定した。

第10話 ロクラス戦ラスト もとせよひこへ（後書き）

ふつ、なんとかここまで書けた・・・

あとは戦後対談だ

戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

第1-1話 Dクラス戦 戰後対談（前書き）

今のところの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでどうぞ。

第11話 Dクラス戦 戰後対談

戦後対談したいんだけど……

「・・・・・」（ボロボロの雄一）

「フフフフフフフフ……」（目が狂気に染まつてゐる幽香）

・・・・・・・・・・・・・・

卷之三

「あ、ああ」平賀君ちよこと待ててね

たゞ、
おわせ
・・・

「妹紅、幽香を止めるから雄一を起しして」

「今はいる人間だから普通に起こして」とおどかされたのか、沙也が笑った。

さてと……わかった

少年少女作業中

Dクラス

えるように抑えられている)

「（いいな……）」（その状況を「うらやましそうに見ている）

「（はあ、明久に奴は……）」（FFF団を押さえながらもちよつと

「うらやましそうに見ている）

「ちよつ、ふ、藤原さん。あ、足ほどいて……」（明久に尋問しようとしたとこを妹紅に四の字固めされてる）

「「「「・・・（呪呪呪呪呪）」「」「」「（明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない）

「・・・」

うん、カオスだな～（お前が言つか！？b Y作者）

「え、えっと……」

「あれは無視しろ……」（氣絶していたところを、妹紅に思いつきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活）

「あ、ああ」

「じゃあ、対談と行こうか……」

でもよく雄一、幽香の攻撃に生き残れたな…やつぱり前より幽香、手加減うまくなつたのかな？

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて……信じられん。」

氣を取り直したように平賀君がつぶやいた。

「あ、その、やつはすいません……」

別の方から瑞希が駆け寄つていつて源一に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

「これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラス負けた、ということでクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄一はそう言い放った。

「何？」

「Dクラスの設備を奪つつもりは無いからだ。」

雄一の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

「そう言つて雄一が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。」

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろ？が悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そりゃね。つまへやれば厳重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もつ。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰つていいわ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願つていてるよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思つてるんだろ?」

「はは、そうだ。EクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社
交辞令だ。」

そう言つと源一は去つて行つた。

「さて、みんなー今日は苦労だつたー明日は今日消費した点数の
補充を行つから今日は帰つてゆつくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻つて
いく。

「さ、帰ろうぜ明久」

「あ、うん。帰ろうか」

「そー／＼そー／＼そー／＼」

僕たちは帰路につくのだった・・・

慧音＆妹紅宅（正確には部屋かな？）

「ただいま

「あ、慧音おかえり」

「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」

「ああ、今ご飯作ってる」

「そりが、じやあ着替えてくるかな」

「おう。私は手伝いしていくよ」

リビング

「　　「　　「　　いただきます　　」　　」

「　　今日は明久悲惨だつたな　　・　　・　　・　　」

慧音の一言で今日の放送を思い出しちゃつた　　・　　・　　・　　

「　　慧音　　・　　・　　それは言わないで。ホントにヤバいって思つたから　　・　　・　　・　　」

「　　ああ　　・　　・　　もひちよつと力こめとければよかつた　　・　　・　　・　　」

「　　いや　　・　　・　　ダメでしょ　　・　　・　　・　　」

「　　さすがに限度つてもんがあると思つせ？　あの「ココ」のはふきでて
るにしても度が過ぎる」

「　（ふむ、原因は坂本か　　・　　・　　）まあ、船越先生には隣の草部さん
(49歳独身)を紹介しといたから大丈夫だろつ　　・　　・　　・　　」

「　　・　　・　　・　　」

「　　ん？　　どうした？　明久」

「　　あ、ありがとうけいね～～！～～！」

『抱きツ』

「なつ、あ、明久／＼＼＼＼＼

「（いいな・・・）」

「つう・・・」

「・・・・・・・・・・・」（なでなで）

キングクリムゾン！—

「・・・・じめん取り乱しちゃつて・・・」

や、やっぱ。こ安心から慧音に抱きついてしまった・・・

「まあ、気にするな／＼＼＼＼

「そうそう。あれは仕方ないよ

「つる・・・」

「明日は・・・・・・補充試験をもつて終わりかな？」

「飯も食べて一入でゲームしていくと、妹紅がそんなこといつぶやいた

いた

「うん、たしかそれだけじゃなかつたかな？」

「だつたよね」

「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えていくが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしていろ」

「やつた」

「うん、楽しみに待つてるよ」

さて時間はつと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ら'つな・・・」

「え、泊つて構わないわよ」

やつぱ家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」

「ん? 私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・
でもま・・・

「じゃあ泊つてこいつかな?」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝
た・・・

ホント、なにか忘れてこるよ! な・・・

第11話 Dクラス戦 戰後対談（後書き）

おまけ
朝

「・・・」（チラツ）
「・・・（スウ・・・」（右 慧音
「・・・う・ん・・（スウ・・・」（左 妹紅
「・・・どうしてこうなった・・・」

第1-2話 恐怖！大量殺戮科学兵器（前書き）

つ、ついにあれが…

第1-2話 恐怖！大量殺戮科学兵器

慧音&妹紅宅 朝

何とか一人の拘束から抜け出した僕は、

「昨日は出来なかつたからね…」

ベランダで座禅をしていた。

本当は身体を動かしたいけど… さすがに無理だからね、イメージトレーニングだけでも…

数時間後

「明久、『ご飯食べよ』

「あれ、もうそんな時間？」

妹紅の声によつて空想世界から現実に引き戻される。

「慧音は？」

「明久の邪魔しちゃ悪いからつて声かけずに行つたよ

「そう…まあ、『ご飯食べようか』

「うん」

その後、幽香を呼んで僕達は学校に向かつた。

キングクリムゾン！！

お皿

なんか作者の陰謀を感じた…

「明久、行くぞ」

いけない、話を全く聞いてなかつた…

「行くつて、何処に？」

「吉井…あんた今日姫路さんから試食頼まれてるの忘れたの？」

「「「あ、ああ」「」」

「つて、お前らもかよ」

「でもどじょうつか、明久」

「そうよね…」

「ん？お前らどじうかしたのか？」

『ガラツ』

「あ、藤原さん達、ちゅうどよかつた」

タイミングよく慧音がやつて來た。

「はい、藤原さん、風見さん」

「「ありがと」」

「なんだ、お前ら上白沢先生から作つてもうつたのか？」

「一緒に住んでるしね」

妹紅達に弁当を渡した後慧音は僕に近づいてきて、

「はい、吉井君の分です」

「ありがとうございます。上白沢先生」

「「「「なつ、何だと……？」」」

みんな何驚いてるんだろう？？

「吉井…」

「…何かな？島田さん」

「どういうことかしら？」

「い、いや足を掴みながら聞く事じゃ…」

「大丈夫よ、いへ「大丈夫じゃないからはなせ…」わ、わかったからはなし…」

た、助かつ…

「「「「手作り弁当…」」」」

「……妬ましい」

「「「「異端者には死を…」」」」

「ハイハイ、ジャマ」」

「「「「やめやああああああああ…」」」」

このクラスは本当に大丈夫なんだろうか…

「…あ、てがすべつた」

『バツ』（雄一が弁当を叩き落とすつとする）

『パシッ』（慧音がその手をキヤッチ）

「えつ」

『ドガツ！』（一本背負い）

「げふ…」

「いけませんよ？坂本君」

「アハハハ…」

時間は消し飛ぶ…

屋上

「では歸れど、どうぞ」

試食するつて言つた以上食べないとね。

「……………いただき（スツ」

「あ、ムツツリーー意地汚いぞい」

『パクツ、ドサツ！』

……えつ……

「どうかしましたか？」

「（スクツ）…『グツ』」

「あ、やつですか」

…

(あれどいの悪ひへ)

(わざと…じやなこな…)

(ここりゅう…)

やつぱつ氣のせこじやなこか

((((この井沼…薬品臭が…)))

「あ、あ、明久早く喰えよ」
「な…」

雄一の野郎わかつて…

(逝つてここ)

「あ、吉井君…」
「え、えつと…」
「…」

姫路さんの皿からハイライトが…へ…

た、助けてーえーりん…!

『ガチャ』

「なんか吉井君のHエリがきたから登場

頭に浮かんだ言葉を心の中で叫んだら永琳が来た。

「や、八意先生…どうしたんですか？」

さすがに永琳の登場に雄一達も驚いているようだ

「…」

状況確認中

「姫路さんだつたわよね？弁当に何入れたの？」
「え、えっと酸味が足りなかつたので…」

「硫酸を…」

「…な？」

「…試食は？」

「食べたら太るのでしてませんよ（一いつ）」

『ブチツ』

「ちゅうと姫路さん、いつかこいつじゃー…」「え？先生？」

『ズルズル

「 「 「 …… 」 」

『 もちああああ…』

「 … とりあえず 」 飯食べよつか

「 うん 」

「 そうね… 」

うん、姫路さんに料理させたら危険だ…

第1・2話 恐怖！大量殺戮科学兵器（後書き）

まさかの永琳登場。

まだまだ続く。

第1-3話　日常？（前書き）

幽香の召喚獣の腕輪の能力ぢうじょう・・・
妹紅のは考えたんだけど…

第1-3話 日常？

まさかの永琳の登場により命の危機を脱した僕であるが・・・

「セ・・・吉井、八意先生とはどうこいつ関係かしら?」

「あと、上白沢先生もです」

島田さんと姫路さんに（悪こほりで）迫られ、

「「「「あんな美人の先生達と知り合いとは・・・」「」「「
「「「「うらやま・・・恥と知れ!...!...」「」「「
「多数決を取る、」」」で死刑とする・・・
「「「「賛成!...!...!」「」「「

FFFF団に囲まれ、僕は十字架に縛られている・・・

幽香と妹紅は慧音からの頼まれごとでこないし、やばいな・・・

くわ、あせいで一ヤつこじる雄一がむかつく

「「「「いやんと嬲しなきやよね（ですかね）」「

いや僕は悪い」としてないし、一人のペシトでもないし

「「「「異端児には死を!...!...」「」「

君たちは黙つてろ

「明久」

「何さ・・・雄」

「今だから言つておく」

?

「俺はお前の幸せがとつても大つきらいだ！！」

「あんた最低だな！！！」

どづする・・・

「では火W「貴方達・・・何をしているのかしり?」へ・・・?」

「「「「あ・・・」」」

「私言つたよな・・・明久に手を出したら容赦しないって・・・」

Fクラスの入り口には不死鳥の雛と・・・USCが立っていた・・・

数分後

「明久、大丈夫か？」

「あ、うん縛られただけだからね」

目の前にはFクラスだった物の山・・・あ、雄一原形すらとじめてない。

「ロープ解くぞ」

「うん、わかった」

はあ、やっと解放される・・・!?

「も、妹紅ちよつとま・・・・

幽香が姫路さんと島田さんを睨んで前に・・・ダメだ、気づいて
いない！－

「え？」

『シユルツ』

現実とは無情にもひもは解け・・・

僕は・・・

「幽香危な・・・

「え？」

『ドサツ。ポフツ』

幽香を押し倒すように倒れた・・・

はて、何か柔らかいものが・・・

「・・・・・・・」
「・・・・・・・えつと・・・・・」

・・・うん・・・現実を認めよう・・・

これは・・・幽香の胸だ

「／＼／＼／＼！？？／＼／＼／＼／＼

『ドンッ』（幽香が明久を弾き飛ばし）

『ペーンー』（蹴りを放つ音）

僕が悪いのはわかってるけど、平手じゃなくて蹴りってどうなのよ。
・
・
・

『ゴシグシャツー』

あ・・・じ・・・

・・・なんか後頭部に柔らかいものが・・・

あ、僕死んでなかつたんだね・・・

「こ」は・・・

「あ、明久おきたのね」

「幽香？」

「その・・・わつわは」「めんなさい。いきなり蹴り飛ばして・・・
「気にしないで。僕が悪いんだし、それより・・・」

なんていうかちゅうど胸（ゲフン、ゲフン）　幽香を見上げるよう
な感じになつてゐるけどもしかしてこれ・・・

幽香を見上げている + 後頭部に柔らかい感触 = 膝枕OK?

・・・

「あ、動いちゃだめよ、永琳いわく一応安静にしなさいらしいから
でも・・・」

あれが・・・

「大丈夫、妹紅が牽制してるわ」

向こうを見ると、僕に飛びかかるうとしているFFF団と姫路さん
と島田さんを妹紅が足止めしていた
あ、雄一^{(二ラ)カタマリ}が動いた

「じゃあもうちょっと休むよ
「ええ、おやすみなさい」

・・・

時間はけし飛ぶ!!

学校終了後

三人で帰宅中

「あ、いけね・・・筆箱教室に忘れてきちゃった」

「まつといつか？」

「いや、先に帰つてて大丈夫だよ」

「わかつたわ、とりあえず急いでね」

さてと、学校に戻らなきや・・・

少年移動中

Fクラス

『ガラツ』

「筆箱はつと」

「よ、吉井君ーー?」

「あれ?姫路さん?」

「ううしたんだね?・・・

「ジビビビビビビーしたんですか?」

「いや、筆箱を忘れたから取りに・・・・何でそんなに慌ててんの?」

「べべべべ別に慌ててなんかいましゃんによおー?」

い、いや噛みすぎだから・・・

ふと姫路さんが座つてる席(ちやぶ)を見ると、卓袱台の上に何やら可愛らしい便箋と封筒が。

「あ、あのつ、これはつ、その ふあつ！？」

あ、こけた。

?「これは手紙？」

『貴方のことが好きです』

えーっと……、これは俗に書つラブレターという奴……だよね？ 実在したんだ……。

「えつと……」

「／＼／＼／＼／＼

まあ誰かに送るつてことだよね、秀吉かな？まさか・・・雄一ー？

見たものは仕方ない、素直に聞こつ

「その人のどこがいいの？ やっぱり外見？」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、勿論外見も好きですけど！」

「へえー、そりや羨ましい限りだね。外見に自信の無い僕にとつて

は

「えつ？ ビーしてですか！？ とっても格好良いですよー私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ ホントに？ 随分酔狂な友達なんだね」

自分で言つのもなんだけど

「良く分からないんですけど、吉井君が坂本君と一緒にいる姿を見

ては『逞しい坂本君と美少年の吉井君が一緒に歩こう』て絵になるよね』つてよく言つていました

「び、びしょ？はは…、何か照れるな。お世辞でもうれしいよ」

「『やつぱり吉井君が『受け』なのかな？』とも

「前言撤回。その友達とは距離を置こう。姫路さんにはまだ早い」

婦女子なのか！？

「それに…」

「……まだ何か？」

「『吉井君つて女装が似合つたよ』とも

「姫路さん、その友達とは今すぐ縁を切るつ。間違いなく君を駄目ににする」

「私も最近、何となくやつ思えてきました」

「しつかりするんだ姫路さん！君はそっち側に行っちゃいけない！」

やめてくれ！！仕事だから我慢して女装したことはあつたけど、精神的にあれはきついんだ！！

いかん……話を変えねば

「や、それにしても姫路さん、外見『も』つて事は、中身が良いの

？」

「あ、えーっと…………はい」

なんとかそらせた…

「その人のどんな所が良いの？」

「や…、優しい所とか…」

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……、私の憧れなんです

「…………」

強い思いを瞳に感じる・・・ほんとに好きなんだな・・・

さてと筆箱ももう回収しておし、あとは帰るだけなんだけど・・・

「姫路さん」

「は、はい」

「その手紙、良い返事が貰えると良いね」

「…………はい！」

命短し、恋せよ乙女ってね。

おまけ　血元にての会話

「そう言えば明久」

「?何、幽香」

「蹴つたとこ大丈夫かしら?」

「うんあの程度なら大丈夫だよ」

「そう・・・」

あ、そういえば・・・

「そういえば・・・」

「?どうしたの?」

「いや・・・なんかおぼろげなんだけど・・・蹴られると血元が見えた気が・・・」

「・・・忘れなさい」

「え?」

「わ、わかつたけどなんで……」

なんか今日は怒られてばつかだな・・・

第1-3話　口算？（後書き）

ちょっとと「アーヴィングレター」の口をすりました、理由？何となくです。わ、忘れてたわけじゃないんですよ！？

第14話 Bクラス戦1（前書き）

やっぱ平日は忙しいから書く時間が少ないな・・・
まあ休日も忙しい時もあるけど。

前話の色ですが、友人の完璧な趣味です
オリジナル技ですが、技名とどんな感じの技か、については友人と
頑張つて考えました。

第14話 Bクラス戦1

Fクラス

「せん輩、総合科目テストが苦労だった」

畠田、昨日から跨いでやつていたテストがようやく全科目終了。

大体平均65位かな？

「午後からBクラスとの試合戦争に突入する訳だが、殺る気は充分か？」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

殺る気つて・・・あ、ちなみにBクラスの宣戦布告は須川君が（幽香に脅されて）行きました。

予想どうり雄一は僕を行かせようとしたみたいだけどね

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負ける訳にはいかない」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取つて貰う。野郎共、キツチリ死んでこい！」

「が、頑張ります」

『　　』『　　』『　　』『　　』『　　』

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮。

その姫路さんは、そんな皆のノリに追っていけないらしく若干引き

氣味だ。まあ、それが普通だよね。

「先陣は・・・」

「僕と幽香と妹紅とで行くよ」

「じゃあそれで頼む」

「了解」

「前回は出来なかつたけど楽しみね」

幽香・・・なんていうかごめんね・・・

『キーンコーンカーンコーン』

「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『『『サー、イエッサー！……』』』』

昼休み終了のベルと同時に、ダッシュで教室を飛び出してBクラスへ向かつて全力疾走。敵を教室に押し込む事が目的なので、とにかく勢いが重要となる

「あ……待つて…、下さ～～い…」

だからいきなり指揮官が出遅れてるけどもいちいち構つていられない。

さつき雄一も言つてたけど、渡り廊下の戦闘は絶対に落とせないから、戦力も五十人中四十人を注ぎ込んで勝ちに行く。その代わり教室がほぼスッカラカンになっちゃうけど。

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、担当教師の長谷川先生は広範囲の召喚フィールドを展開出来るという理由だ。他にも、英語Wの山田先生と物理の木村先生もいる。

「一ノ瀬、三浦のダニ！」

高橋先生を連れているぞ！」

数は大体十人程度。あくまで様子見つて所かな?

卷之二

おあ!!!!!!

Bクラス戦が開始された。

Fクラス	Bクラス	総合
Fクラス	Bクラス	総合
モブB	モブA	モブA
V S	V S	V S
68点	137点	1947点
数学		
Bクラス		
Fクラス		

Bクラス モブC 140点

V
S

V
S

FケラスモフC 71点

圧倒的だ・・・「「「「「ていうか、あつかいひどくないか！！

卷之三

なんか叫んでるけど無視して早くフォローしなきゃやばい！

「幽香！！！未江！！！・・・・」
「アガル！」

「ええ、わかつたわ」

わかった！！

「サモン...」

前回僕と妹紅の召喚獣は説明下から省くとして、幽香の召喚獣は・・
・うん私服（原作以下略）に傘を持つてる。あとなんていうか、ト
ラ耳と尻尾つて・・・

気にしないでおいた。相手は、つと

英語 W

Fクラス 風見幽香 345点

V
S

Bクラス モブD 121点

モブD
121点

数学

Fクラス 藤原妹紅 198点

VS

Bクラス モブB 119点

妹紅は得意科目じゃないけど点数が勝ってるから問題はないかな・
・えっと僕は、っと

物理

Fクラス 吉井明久 71点

VS

Bクラス モブN 188点

ローマ字が飛んだだと・・・

まあ冗談はほどほどにして、

「 「 「 おい待て！？なんだよあの点数！？！」」「
「なんかホント驚いてばっかだな」
「まあ、いいじゃない」
「お~い一人とも僕の心配はしないんだね・・・」
「 「 当り前でしょ（だろ）」「

ですよね～まあ

「勝てないこともないけどね」
「な、雑魚のくせに！？」

あれは・・・ハルバートかな？それで相手が斬りかかってくるけど

「ほいっと

『ガツ、ドカツ』

「な・・・・」

先端付近を地面に抑え込めばなれない操作じゃ動かせないからね。

「ほら、隙だらけだよ」

『ズバツ！－－』

モブN 109点

やつぱ一撃じや無理か・・・なら召喚獣でもできるか練習として

「・・・散れ」

—閃鞘・散華時雨—

まるで雨の「」とく高速で刺突を行つ・・・この技の利点は密度を調整して、小範囲か広範囲かわけれぬ「」である

モブN 0点 戦死

「な・・・負けた？」

「嘘だろー？あんな明らかに雑魚っぽい吉井の召喚獣にやられたるなんて！？」

「気を引き締めろ！奴らをただの雑魚だと侮るな！Dクラスに勝つたのはマグレじゃないかもしねない！」

うん・・・あんまり上手く出来なかつたな・・・要練習だ

「お、やつぱり勝つてるな」

「うん、妹紅も勝つたみたいだね」

「当り前だ」

「明久・・・たつきの技・・・」

「ん? ああ、やれるかやつてみたんだけじ要練習だね」

「あれでか・・・」

だつて違和感があるんだもん

「す、すいません・・・遅くなりました・・・」

あ、やつと追い付いたみたいだね。って

「姫路さん、大丈夫?」

「何なら少し休んどく?」

「だ、大丈、夫、です。行つて、来ます」

まあ、見た感じ大丈夫かな?

「き、來たぞ! 姫路瑞希だ!」

Bクラスの誰かの叫びに、他のメンバーの目付きが変わった。明らかに姫路さんを警戒しているね

「長谷川先生、Bクラス若下律子です(な、名前出してもらえた・・・)。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!」「律子、私も手伝つ!」

「 「 「 試験召喚…」 「 」 」

Bクラスも必死みたいだね・・・でも・・・

数学

Fクラス	姫路瑞希	412点
VS		
Bクラス	岩下律子	187点

Bクラス	菊入真由美	152点
------	-------	------

うわ・・・姫路さん400オーバーだ。つてことは・・・

「あ、腕輪だ」

「あ、はい。数学は結構解けたので…」

一科目400点以上点数を取ると、特殊能力を持つた腕輪が使える様になる。その腕輪が姫路さんの召喚獣の左手首に装備されている

「そ、それって!?

「私達で勝てる訳無いじゃない!」

向こうの一人が姫路さんの腕輪を見て顔色を変える。

別に腕輪を持つてるからと黙つて絶対に勝てないと思
うんだけどな・・・

戦い方次第じゃ圧倒的実力差も覆す事だつて難しくない。『戦闘』
において一番大事なのは『戦術』じゃなくて『戦略』、要するにど
う戦うかだし

「じゃ、行きますね」

姫路さんが手を握り込むと、その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が標の方へ左腕を向けてる。

「これって……

「ちよつ、ちよつと待つてよー?」

「律子ーとにかく避けないとー！」

大袈裟な位に慌てて横つ飛びする一體の敵召喚獣。しかし

『キュボツ』

「「やあああああ」」

岩下律子	0点	戦死
菊入真由美	0点	戦死

うわ・・・レーザーって・・・しかも2体とも黒墨だし、しかも一撃だよ・・・

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「なつ、そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスに動搖が走る。

でもあれは仕方ない・・・てか姫路さんの召喚獣の能力怖すぎ・・・避けきれるかな？

「み、皆さん、頑張って下さいー」

「や、姫路さん？その指示は指揮官としてはどうかと……」

「つねつしゃああーつ！」

「やつたるでえーつー。」

「姫路さん愛してゐひひひひひ」

馬鹿ばつかだ

「さて、僕達も行こうか」

「そうね」

「あ、姫路さんは休んでていいよ。疲れてるだらうし、腕輪で結構点消費してるでしょ？」

「あ、はい」

戦場の流れもこっちに傾いたし大丈夫だらう

「あれ？妹紅は？」

「妹紅なら教室に戻ったわよ」

え？

「なんで？」

「・・・Bクラスの代表根本らしいわよ」

「・・・ああ、あいつか・・・」

根本恭一、一言で言えば『卑怯者』。

噂では『カンニングの常連』^{デフォルト}だと、『球技大会で相手に一服盛つた』とか、『喧嘩に刃物は当然装備』そして幽香たちにもかなり迷惑をかけた男子だ。

「なるほど。たしかにあいつなら何かしそうだね」

「私達も一応戻つてみる?」

「うん」

ホント、なにもなればいいんだけど・・・

第14話 Bクラス戦1（後書き）

今すぐ悩んでいる・・・
根本のどめ誰で刺そつ・・・

番外 キャラ紹介 東方編（前書き）

今のところ出たキャラについて書きます。書き足し予定あります。
友人と一緒に考えながら書いてたら力オスに（笑）
おもにキャラでの変更点とかを書くのであしからず

藤原 妹紅

読み ふじわら もこう

能力：死なない程度の能力

スタイル：身長は157 男子制服でわかりにくい、貧乏「こくら
いあるわ！！／＼／＼」（作者はログアウトしました）

外見：白い長髪に赤い目、基本シャツにもつペを穿いている。

学生服はスカートが慣れないとのことで男子の制服（生徒手帳には
一応女子の制服で写っている）

召喚獣の能力：『リザレクション』

100点消費することで戦死した時、元の点数から200点引いた
状態で復活できる。（ただし腕輪は召喚してすぐにしか発動できない）

点数：古典、歴史に関しては400点を超えることも。

しかし地理は苦手で50台常連。ほかの教科は100～200台で
ある

口調：基本男口調だが時折女口調になる

設定：幻想郷で明久が初めて会った住人。どうも明久を放置できな
くて関わっていくうちに「明久がいる＝妹紅もいる」と言われるほ
ど身近な人間になった。

料理の腕前は普通で、ちょくちょく明久の家に泊まりにいつている。
自分が不老不死であることを明久にばれた時、明久とある約束をし
ている。

明久のことは大切な友人であり大好きな人であり、とりあえず彼を
傷つけるものに対しては容赦がない。

恥ずかしい思い出は、お風呂に明久が入つてることに気づかず入つ
てしまつたこと（その後一人で入つてたそうだ

バカとテストと召喚獣 『パラドックス』 等の作者ゴートンさん
からの絵です

風見 幽香

読み かざみ ゆうか

能力：花操る程度の能力

スタイル：身長は163cm、トップ89のローブ。ちょっと話があるんだけどいいから……」

外見：緑色の髪を肩にかかる程度に伸ばし、紅い目。よく傘を持ち歩いている

召喚獣の能力：投影

50点の消費でもう一体召喚獣を作ることができる。しかしその召喚獣は1つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える
点数：全科目300点越えというオールマイティ。強いて言うなら歴史と古典がたまに400点行く。

しかし、社会の倫理のが大の苦手でほとんど点を取ることができない。

口調：基本丁寧語時折命令系

設定：実は幻想郷で最初の明久の被害者（向日葵の記憶参照）。

花の妖怪だけあって花が大好きで傷つけるものには容赦がない。
明久のことはよくからかったりするが、攻められると弱いみたいで、時折暴力をしてしまい落ち込んでしまったりしている。

明久のことは自分のものと言つたりしているが、「明久の相手は明久本人が決める」と思つてゐる。

恥ずかしい思い出は、多すぎてわからないそうだ（ある意味明久のナイスエッチの一一番の被害者

上白沢 慧音

読み かみしらさわ けいね

能力：歴史を食べる（隠す） 程度の能力：人間時 歴史を創る程度の能力：ハクタク時

スタイル：身長は167（帽子を入れて175行かないくらい）
・ 大きいです「だまれ！！／＼／＼／＼

外見：少し水色を帯びた銀髪の長髪に黒っぽい瞳（人間時）と薄い緑の長髪に赤い瞳と・・・角（ハクタク時）。尻尾もある

教科担当：歴史

口調：学校では敬語、基本は中性的な話し方

設定：幻想郷の寺子屋の教師だが監視を理由に文月学園の教師をしている。

ワーハクタクだけに運動能力は高い。

お仕置きは基本拳骨、明久達には拳骨では効きにくいので頭突き。明久のことは出会ったころは姉として面倒を見ていた。

自分が半妖であることを恐れていたがバレてしまう。
しかし態度を変えずいつもどうり接する彼に思いをぶつけるも明久に「そんなことは関係ない、僕は好きで慧音というだけだよ」と言
われて以来、自分が半妖であることを引け目にとらなくなつた。
恥ずかしい思い出は、宴会の時酔つた勢いでハクタク化し、明久のファーストキスを奪つてしまつたこと。（本人は記憶がなく妹紅経由で聞き1週間ほど目があわせられなかつた
この頃の不安は何かしらと暴走するFクラスである。

八意 永琳

読み やごころ えいりん

能力：あらゆる薬を作る程度の能力

スタイル：身長166 すごく・・・大きいです「あらあら」

外見：銀髪の長髪を三つあみにしており鈍い銀色の瞳。赤と青の半

々の不思議な服を着ている（学校ではその上に白衣）

教科担当：保健医 保健体育（実際は全科目担当可）

□調：学校では敬語 基本は丁寧語

設定：温和で優しい性格をしているが、怒ると怖い・・・。

幻想郷で医者をしながらも明久のために（本人は問題ないと言つがよく怪我をするため）文月学園の保健医をしている。

天才であり点数はほぼつけようがなく、制限をしている（それでも勝てる人はほほいない）。

明久については自分達を完全に殺すことができる存在という意味で興味を持つていたが自分の過去、罪について聞いても態度を変えない人間性に女性として興味を示した（本人いわく）。

その外見、スタイルからファンクラブ等も多いが「明久君以外にはあんまり興味はないの」と断つているそうだ。

明久が「助けて！！えーりん！！」と心の中で叫ぶと同じであらうとどこからともなく現れる。

恥ずかしい思い出は、酔った勢いで明久を誘惑しようとしてしましたこと。（しかしある意味これで吹っ切れたとも彼女は言う

十六夜 咲夜

読み　いざよい　さくや

能力：時間操る程度の能力

スタイル：164　スタイルは、少しいおつきい？PADではない

！！「死になさい・・・」

外見：肩にかかるないくらい銀髪にもみあげあたりに三つ編みにしてリボンで縛っている。目は基本青みがかつた黒で、能力発動時赤になる

召喚獣の能力：ナイフの設置と操作

指定した場所にナイフを設置したり、飛び方や動きを制御できる。
しかし途中変更はできない。

（ナイフは能力関係なく点数消費なしで無尽蔵に出せる模様）

点数：全体的によく高得点だと600に行くこともある

□調：年相応だが丁寧語もつかう

設定：明久とは紅魔館編で出会い、年も近く主であるレミリアを救つてくれた恩人であり、彼女いわく「目ぼれらしい」。明久の投擲技術を教えた先生であり今ではともに切磋琢磨している。紅魔館の皆のことを家族みたいに思っているが、明久のことに関しては譲る気はないらしい。

恥ずかしい思い出は、明久と弾幕勝負をしているとき、胸元の服が破けてしまい、あまつさえ吹き飛んだ反動でそこに明久をダイブさせてしまったこと（この後明久は頬に大きな紅葉をつくった）

番外 キャラ紹介 東方編（後書き）

・・・これはひどい・・・

幽香に関してですが・・・歌のネタです！！

第15話 Bクラス戦2 『アキ』（前書き）

友人と明久の能力やお話について話してたら……結果

影月・友人「うわ……中二病くせえ……」

気を取り直してどうぞ

第15話 Bクラス戦2 『アキ』

教室にたどり着くと

「お前達、覚悟はできているな」

「　　補修はいやだあああああ　　」

Bクラスの生徒だろうか・・・鉄人に連れて行かれた

「お、明久」

「妹紅、これは・・・」

そこには壊されたちゃぶ台、ペン漁られたカバンが散らばっていた。
・・あ、僕達のところはまだ何もされてなかつたみたいだね

「『めん・・・私が来た頃にはあいつらがいて・・・それに一人逃げられちゃつた」

「大丈夫よ、被害をここまで抑えられただけよかつたと思いましょ

「うん、一応何か取られたりしていいか確認しよう?」

「「うん(そうね)」」

うん何も取られてないな。あればずっと身に着けてるしね。

僕は首にかかるひし形の結晶思い浮かべた

「どうした?何かあったのか?」

「つて雄二どこ行つてたの、危うくもの全部壊されるとこだつたじ

やないか・・・

「これは・・・」

「Bクラスだよ」

どこに行つてたのか知らないけど雄一達と秀吉が帰つてきたので簡単に状況を説明した

「被害は少ないが確實に補給テストに響くのう」

「まあそれはそうと、何でゴリラは教室から離れたりした訳?」

「その呼び方はやめる。いや、向こうから協定を結びたいという申し出があつてな。その調停の為に教室を出ていた」

「協定?」

「ああ。『四時迄に決着が着かなかつたら戦況はそのままにして、続ければ明日午前九時に持ち越し。その間は試合戦争に関わる一切の行為を禁止する』つてな」

「それ、承諾したの?」

「そうだ」

「何で? 体力勝負に持ち込んだ方がこつちとしては有利なんじゃ

」

「姫路以外は、な」

「「「あつ」」」

「奴等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろ? そうすると、作戦の本番は明日といつ事になる。その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

「なるほど、だから受けたのかしら? 姫路さんが万全の態勢で勝負出来る様に」

「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

「うーん…」

なんか引っかかるな・・・

「どうした明久？バカのくせに悩んだりなんかして」「雄一、バカは余計だよ。いや、なんかこいつ引っかかるものがあつてや……」

すると

「確かにそうね……こんなことをするようなあの小物がこんな対等な条件の協定をただで出すとは思えないわね」「とするとなんで……」

「吉井、ここにいたか！？」

いきなりの来訪者の声が教室に響いた

「どうしたの？横田君」「実は島田が人質に捕られた」「…………はあ！？」「…………」

器物破壊の次は人質！？とか島田さんなんで指揮官頼んできたのに人質になつてるのさ……

「お陰で相手は残り一人なのに攻めあぐねている。どうする？」「わかった、とりあえず状況確認に行こう」
なんにしても急がなきゃ……

そこには島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制していく。成る程、ただ戦死させるんじやなくて、人質を取つて補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

科目は・・・歴史か・・・なら

(幽香・・・)

(・・・わかつたわ)

「ど、どつする？」れじゃ手が・・・

「総員突撃用意！」

「「「「え！！！？？？」」」

「ちょ、それでいいのかよ？あっちには島田さんがいるんだぞ！？」

「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

「確かに明久の言うとおりだな」

「ええっ！－！ちょっと！？」

あともうちゅうとかな？

「ちょ、ちょっと待てお前達！－！」

「ほらあ、あっちからもちゅうと待ったゴールが掛かってるじゃな

いか。もう少し考えてからでも遅くは…」「

「コイツがどうして俺達に捕まつたと思つていい?」

「バカだから?」「

「バカだからでしょ?」「

「バカだからじゃないの?」「

「殺すわよ」

「明久に何かしようものなら逆にやるわよ? (一ノ口)」

「幽香押されて!…じゃあ、なんで捕まつたの?」「

まあ聞いてみるか

「コイツ、『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かつたんだよ」

「えつ!…島田さん……」

「な、なによ／＼」

「怪我した僕に止めを刺しに行いつとするなんて、あんたは鬼かあ…！」

「違うわよ!…ウチがあんたの様子を見に行つちや悪いっての!…これでも心配したんだからね!…」

「…島田さん、それマジ?」「

「そ、そうよ。悪い?」

「へつ、やつと解つたか。それじゃ、大人しく…」

「『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなつた』って聞いて心配したんだから

「…・・・総員突撃!…」「

ちょ妹紅、幽香!?

「何で!…?」「

「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要ら

ん！居ても足手纏いだ！！

「お、おい待てって！見捨てるのか!? そんなあつさり味方を見捨てるのか!?」

「黙りなさい！…さあ、そいつにはもう人質としての価値は無いわ！大人しく往生しなさい！！」

「くつ、畜生っ！だつたら望み通り、コイツを道連れにしてやるよお！！」

「今だ！！！」

「幽香！…！」

「…・了解したわ」

いや・・・しぶしぶと言わないでね・・・

Bクラスの一人と島田さんの間に2人の幽香の召喚獣が現れる

「「え？」」

歴史

Bクラス 鈴木一郎 33点

Bクラス 吉田卓夫 19点

V S

Fクラス 風見幽香 412 - 50点 × 2

「ダブルスパーク」

2本の砲撃が一瞬にして相手の召喚獣を消し飛ばした

幽香の召喚獣の能力・・・それは『投影』

50点の消費でもう一体召喚獣を作れる。しかしその召喚獣は一つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える。

「戦死者は補習ううう……」

「ぎやああ……」

「助けてえー……」

打ち取つた瞬間、鉄先生に抱き上げられて連行されるBクラスの人。

ふと思つたんだけど、鉄先生はどうやって戦死者の存在を察知してゐんだろう?身体のどつかに『戦死者察知センサー』でも着けてるんだろーか?

それより……

「島田さん……」

「吉井!……よくも見捨てよつと……」

「……ちよつと歯を食いしばりなさい」

「え?」

『パンパン!』

「!?」

いきなり幽香にひっぱたかれたことによつて島田さんは田を白黒させる

「貴方ね、敵の偽情報に踊らされたばかりか、指揮官が持ち場を離れるとはどういうことかしら?明久はあなたを信じて指揮を任せたのに、危うく部隊が全滅するところだったのよ?」

「だ、だつて吉井が……」

「そんな物理由にならないわ。貴方のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ？ 分かっているのー？」

「あ・・・・・う・・・」

「さつさつき言つた台詞、アレは芝居でも何でもないわ。自分本位な事しか考えない様な奴は、居たつて邪魔になるだけだわ・・・足手纏いなのよーーー！」

「幽香ーーー！」

「・・・・ちゅうと頭に血が上つてたわね・・・『ごめんなさい』

そう言つて幽香はみんなを連れて教室に戻つていく・・・ハア・・・

「島田さん・・・」

「・・・・・・・」

「あ～、『ごめんね島田さん。幽香つて興奮し過ぎると口調が乱暴になっちゃうから…』

「・・・・・・・」

「でもさ・・・・、幽香の事、あんまり悪く思わないであげて。あれでも島田さんの事、かなり心配してたみたいだからさ・・・。だから

「分かつてる」

「え？」

「風見さんが言つてた事、間違つてない。ウチは取り返しのつかない事を仕出かす所だつたんだ。叩かれて当たり前よ」

「島田さん・・・」

「・・・・」

「う・・・・空気が・・・よし

「だ、大丈夫だよー失敗は誰にだつてあるんだからさーまた次の機

会にこの汚名を挽回すれば良いじゃないか！」

「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だつたと思ひなさい。」

「あれ？ そーだっけ？」

「全く…、何でウチでも知つてゐる様な熟語を日本育ちのあなたが知らない訳？」

「ぐつ…」

「…・・・・ふふつ」

「ほ、ほら島田さん掴まつて！ 僕達も早く教室に戻らうよー。」

「あ、誤魔化した」

「氣のせいです」

「ふつ、なんとかなつた…・・・

「吉井…・・・・・

「ん？ 何？」

「いめん」

「良じよ、別に。島田さんが無事で良かつた

「あと…・・・・ ありがと…・・・」

「うん…・・・」

やつぱりお礼いわれるのはちよつと恥ずかしいな

「ねえ、吉井」

「な、何？」

「今度からさ『アキ』つて呼んでも良い？」

「え？」

「ダメ？」

「いや、ダメでは無いけど…」

「その代わりにさ、ウチの事も『美波様』つて呼んでも良いから」

「僕だけ様付け！？」

「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だつたと思ひなさい。」

「ふふつ、冗談よ、冗談。」

「島田さんの場合、冗談には聞こえないんだけど……」

「じゃなくて？」

「・・・美波」

「うむ、よろしい」

なんか嬉しそうな雰囲気だな・・・

「ほら、歸きつと待つてるよ？早く行こ、アキ」

「おわつ！？ちよつ、島・・・美波、そんな引っ張んないでー。」

ま、元気になつてくれたし、良つか。

第15話 Bクラス戦2 『アキ』（後書き）

いつもこれなり・・・
いや言つまひ

第1-6話Bクラス戦3 小物の罫（前書き）

よし、ある程度じつするかは決まつた！後はそれを書けるかだ！

無理だ・・・

明「あきらめるのはや……？？」

第16話 Bクラス戦3 小物の罠

さて協定どおりBクラス戦は明日まで持ち越しになつたけど……

「Cクラスが試合戦争の用意を始めているだと？相手はAクラスか……いやそれはないだろから。

漁夫の利を狙つつもりか……いやらしい連中め」

ムツツリーニの情報いわくCクラスが怪しい動きをしているらしい
Cクラス……あれ？なんか大切なことを見落としてる気が……

「で、どうするんだ？」

「協定を結ぶか。ま、Dクラスを攻め込ませるぞって脅しをかければいいだろう」

「わかったわ」

Cクラスと協定を結ぶということになり、雄一、僕、幽香、妹紅、
ムツツリーニで行くことになった。

姫路さんと秀吉は教室で待機してもらつてている

少年少女移動中

Cクラス

「失礼するわ。すまないがCクラス代表はいるか？」

「私だけど、何かようかしり？」

僕たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

あれ？人の気配が・・・！？！

「Fクラス代表としてCクラス「ちょっと待って雄二」ん?どうし

た

「阿波」

「あそこに誰を隠してるんですか？」

「！？な、何を言つてゐるのかしら？」

卷之三

卷之三

「なつ！！」

根本君と小山さんは・・・付き合ってるんだ

side 雄

「つちばれたが、おい坂本を逃がすな！！やれ！！」

なつ！？マジでいただと！？

「つち！妹紅、ムツツリーーー！雄一を連れて逃げて！ー！」

—
•
•
•
•
•
•
•
了解上

「わかった。明久気をつけろよ」
「大丈夫だよ。幽香足止めするけど手伝ってくれる?」

「聞かなくてもわかるでしょ？」

藤原と風見も入った時から戦闘態勢だったが・・・

「ほら、代表行くぞ。お前が戦死したら困るんだ」
「あ、ああ・・・」

明久お前・・・なんなんだ?

s i d e 明久

さてと、雄一も逃げたことだし

「根本君、約束を破るなんてひどいじゃないか」「つむせえ！お前ら！こんな雑魚早くつぶせ！・・・」

「ゆ、幽香？」

「・・・大丈夫よ。さ、行きましょう明久

「だね」

「「サモン！！」」

数学

Fクラス 吉井明久 68点
Fクラス 風見幽香 312点

V/S

Bクラス モブ×10 平均172点

「「「な、なんだよあの点数」「」「」」
「こいつら驚くしか脳ないのかしさ・・・」

「あははは・・・・」

「怯むな！！数でつぶせ！！」

「…………」

あら？ 根本君がいない・・・うわ・・・逃げるよ・・・

「明久、少し時間作ってくれないかしら？一気に吹き飛ばすから」「了解、じゃあ行くよ！」

「解してお行くよ。」

「な、吉井が一人で突っ込んできたぞ？」

あんな糞魚で、手にモロモロを一気にこらす

はあ、ひどい言われようだな、ホント

「散華時雨」

【閃鞘・散華時間】、刺突の密度を調整する「ヒト」で範囲を調整する「ヒト」がである。

「な、近づけねえ！」

「近づいても攻撃で押されるー？」

広範囲は威力が減るもの、足止めにはちょうどいい！！

「明久！！準備OKよ！！」

「わかつた」

「あ、攻撃がやんだ？」

「・・・消し飛びなさい・・・」

「」「」「」「」

マスター・スパーク

Bクラス モブ×10 0点 戦死

「…………え？」

幽香の召喚獣は基本拳とかによる攻撃だが、力をためる」とこなつて砲撃とかを撃つことができる。
これは召喚獣自身の能力で腕輪とかを取る必要はないようだ。

「ち、逃げるよ」

「そうね」

少年少女逃避中

Fクラス

「ただいま～」

「ただいま」

「お、大丈夫だったみたいだなお疲れさん」

妹紅が労いをくれる

「しかし、どうするのじゃ？」

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

ま、それが狙いだろうね

「まあ、向こうがその気ならここも考えがある」

「考え？」

「ああ、明日実行する。とりあえず今日はこれで解散だ」

・・・

保健室

「失礼します、八意先生いますか?」

「あら、明久君どうしたの?あと誰もいないしこの呼び方でいいわよ?」

「じゃあ、永琳。じつは・・・」

キングクリムゾン!-

次の日の朝

「考えがあるって言つてたけどどうあるの?」

幽香がそう質問すると雄一は

「ああ、コイツを秀吉に着でもらひ」

「んむ?それは別に構わんが、ワシジが女装してビースルんじや?」

いや、構おつよ、男としてみてほしいなら構おつよ秀吉!-!

「なに、秀吉には木下優子としてAクラスの使者を送つてもいい」

木下優子。秀吉君の双子のお姉さんであり、Aクラス所属。違いと
いたらテストの点数と喋り方位しか見当たらない程秀吉君にそつ
くり。しゃべり方なら秀吉はすぐにまねれるからほほ見分けようが
ない。

成る程ね、そのお姉さんに化けてAクラスとして圧力を掛けようつ
て事か。

「という訳で秀吉、早速用意してくれ」

「う、うむ…」

坂本君から制服を受け取つて、その場で生着替えを始める秀吉

「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」

おい、君達秀吉は男だ、あとムツツリーーー写真を取らない。
姫路さんに美波、まるで女の子を見るよつにショックを受けない
つて、眼つぶしは危ないって…！」

「よし、着替え終わつたぞい」

「じゃあCクラスに行くぞ」

「一応付いて行くよ」

またあんなことがあつたら困るしね

少年少女移動中

Cクラス前

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」
「気が進まんのう…」

「そこを何とか頼む」

「もう……。仕方無いのう……」

「悪いな。とにかくあいつ達を挑発してAクラスに敵意を抱く様仕向けてくれ。お前なら出来るハズだ」

「はあ……。あまり期待はせんでおくれよ……」

そう言つて秀吉はCクラスへ向かつた・・・大丈夫かな?

『ガラツ』

『静かにしなさい、この薄汚い豚共ッ！』

.....マジか?

「.....流石だな、秀吉」

「うん。これ以上無い挑発だね……」

「もう既にAクラスに敵意が向いてるんじゃない?」

てゆーか、秀吉のお姉さんってあんな感じなの?

『なつ！？何よアンタ！』

『話し掛けないで！豚臭いわ！』

うわ、理不尽だ・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数が良いからつていい気

になつてゐんぢやないわよ！何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なつ！？言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですつてえ
つ！！』

いや、誰もFクラスなんて言うてないから

「ねえ、明久演劇部つて……」

妹紅言わなくて…僕もすこい悩んでるから…

「これで良かつたかのう？」

うわー、凄いスッキリした顔してるー。何かお姉さんに対して不満でも溜まつてたのかなあ・・・。

「ああ。とても素晴らしい仕事だったぜ。ホレ」

『 キイイイイイー！ ムカつくー！ 何よ調子に乗ってえー！ ！ ！ Fクラスなんか相手にしてられないわー！ ！ Aクラス戦の準備を始めるわよー！ ！ 』

「」「」「」「」「」

・ 気を取り直してBクラス戦に向けて用意するかな

時間はけし飛ぶ！！

「ニアと壁を上手く使え！戦線を拡大せんじゃねーぞ！」

坂本君の怒号にも似た指示が飛ぶ。

「勝負は極力単教科で挑め！補給も念入りにしろよー」

「雄一の指揮の下、ここ数時間はほぼ順調かの様に見えた・・・しかし

「姫路頼んだー！」

「はい、さも・・・！？」

さつきから姫路さんがおかしい・・・なにが・・・
あれは・・・根本君・・・！！！

その手に持っていたのは・・・手紙・・・
そう姫路さんの・・・

「・・・姫路さんきついなら下がつていいよ？」

「え？でも・・・」

「大丈夫だから、じゃあちょっと雄一のところに行つてくるね

はあ・・・ふつ・・・面白ことしてれるじゃないか

根本・・・

第1-6話Bクラス戦3 小物の罠（後書き）

さあ、次回

お前の敗因は俺を怒らせたことだ

ジョジョネタですねわかります

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（前書き）

さて友人から頼まれたが・・・うまく書けるかな？

先生の名前変更

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ……

「……雄一……」

「明久?なんだ逃げてきたのか?」

「ちょっと話がある」

「……なんだ?」

真剣な話と読み取つたのだ!「……雄一がまじめな雰囲気になる

「姫路さんを戦線から外してほしい」

「なんでだ?」

「それは言えない」

「なにか、策でもあんのか?」

「Dクラスの手を借りる位かな?あと根本君の服がほしい」

「明久お前……」

?あつ・・・・・

「いや、前回教室荒らされたでしょ?その仕返しだよ」

「……人数はさけないぞ?」

「幽香と妹紅、あとムツツリー」「がいれば」

「わかった。だが絶対成功させろよ」

「当たり前でしょ」

かてじやあ用意するかな・・・

「『ごめん待たせた?』

「いえ? 待つてないわよ」

「大丈夫だよ」

「そつか」

さてあとは・・・

『ペペペペシフ』

「はい」

『・・・準備OK』

「『ごめんなさい吉井君、お待たせしました』

「大丈夫ですよ」

さて永琳もきたしやるか!!

「じゃあ先生お願ひします!!」

「はい、試験召喚獣召喚を承認します」

「!! サモン!!」

僕は召喚獣を召喚し・・・

『ドカツ!!』

壁を殴りつけた・・・

s.i.d e 雄一

「お前らいい加減あきらめろよな。教室の出入り口」群がりやがつて暑苦しい事この上ないつての」

「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」

「はあ？ ギガアップするのはそつちだろ？」

一 無用な心配だな

『シナリオ』

始まつたみたいだな・・・

「 そ う か ？ 頼 み の 綱 の 姫 路 も 調 子 が 悪 そ う だ ゼ ？」

お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくれ

「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だ

な
」

『アーネスト・ヘミングウェイ』

「・・・ もう あからずハジンといひなセバな。それにこの轟れはなんだ。ニアノンをこへんのか? おこッ 懸全部開けとせよ。」

・・・・・ 態勢を立て直す！ 一回下がるぞ！」

み掛けろ！！誰一人生きて帰すな！！

頼むぞ、明久！！

久明 時

つく・・・さつきから殴つてゐるけど間に合わない・・・

「明久・・・手が・・・」

さすがにファイードバックで手がボロボロだな・・・

?てか直接やつたほうが壊せるんじゃ・・・

「三人ともちよつと距離置いてね」

「「「え?」「」」

ふう・・・やることは簡単だ・・・視ればいいんだ・・・

side妹紅

なんか黙つちやつたけど・・・!?まさか

次の瞬間周りが・・・殺気に、いや、でも優しい雰囲気に包まれた・
・

これは・・・

明久を見るとその瞳は青く、いや深い蒼に輝いていた・・・

side明久

「・・・視えた」

あとは力を調整しないと壊しそうけりやつからな・・・

「ふう・・・蹴り碎く!-!」

一閃走・一鹿一

真横にきれいなまでな一直線の蹴りを壁に・・・点に数発叩き込む

『やれ！！明久』

『ドガガガガッ！！！』

『ガラガラガラ・・・』

・
僕の蹴りは点を貫き・・・壁に人が通れる大きさの大穴を開けた・・

「な、壁を壊すなんて、どういう神経してるんだあの野郎！！」

「藤原妹紅と」

「風見幽香、Bクラス・・・」

「やらせるかああああ！！」」

Bクラスの人達が一人の前に立ちふさがった。さすがにこの人数は
きついかも・・

「は、結構驚いたが・・・残念だつたな」

『スタッツ！』

まだだ！！

ここに少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によつてテストの結果に特徴が現れるんだが・・・
例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史の五十嵐先生は
採点が早い。

世界史の田中先生や生物の不知火先生は点数のつけ方が甘く、数学の長谷川先生や英語のリアン先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や歴史の上白沢先生は多少の事は寛容で見逃してくれる。

あと、基本承認に関しては西村先生と高橋先生以外は担当科目の承認しかできない

話を戻すが、じゃあ保健体育の先生はと「う」と、採点が早いわけでも甘いわけでもなく
召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立つた

「・・・・・Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリーニと保健体育の鈴村先生だ

これで・・・

「Bクラス近衛部隊が受けますッ！」

「残念だつたな、あとはそこの雑魚だけ、お前達の負けだ！」「つぐ」

雄一が悔しそうに呻いてるけど・・・

「いや、これでいいんだよ……」

「なに？」

そう言えど、さつきの説明だけど……実は言うと例外な人がいる。
それは……

「ハ意先生、Fクラス吉井明久、Bクラス根本恭一に現代文で勝負
を挑みます」

「な、お前バカか？ 保健医がそんなこと許可できるわけ……」

「承認します」

「え？」

それは保健医ハ意永琳は全科目の試験召喚獣の召喚を承認する」と
ができるということ……

「サモン……」

現代文

Fクラス 吉井明久 112点

VS

Bクラス 根本恭一 235点

「ふん、確かにちょっとは高いようだがその点数で勝とうなんて「
・・行くぞ・・・」なつ……」

根本君の……「イツの御託なんかどうでもいい……

「一瞬で終わらせる……」「
あ・・・明久切れてるね……」

「ええ、切れてるわね・・・なんか帰りたくなったわ・・・」

あっちで妹紅と幽香がなんか言つてるし、永琳が冷や汗を流しながらひきつった笑顔をしているけど無視だ！！

「！」に貴様の居場所などない・・・消え去るがいい・・・

一閃鞘・凶刺死獄一

一瞬で接近した僕の召喚獣は根本の召喚獣の腕と足を切り払い、そしてどどめに心臓、喉、眉間、水月に一瞬で刺突をたたきこんだ・・・

Bクラス 根本恭一 0点 戦死

「え・・・？」

「「「「「な、う、嘘だろ・・・」「」「」「」

「根本・・・」

「！？ひ、ひつ！――！」

「一つだけ言ってやる。今回の君の敗因はただ一つ・・・

「僕を・・・『俺』を怒らせた・・・ただそれだけだ・・・」

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ・・・（後書き）

ふう・・・なんとか書けた・・・

第18話 Bクラス戦 戰後対談（前書き）

やっぱ女装は外せないよねーー。

第18話 Bクラス戦 戰後対談

「いっつ・・・」

「ほら、もう少しで終わるから我慢しなさい」

「うう・・・永琳の口調がちょっと崩れてる・・・お、怒ってるのか？」

「お主・・・思い切った行動に出たの？」

「あはは、それもそうだね」

僕は穴のあいた壁を眺める・・・あんまり大きな穴になつてない
みたいだね、よかつた

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。なあ、負け組代
表？」

「・・・・・・・・」

おとなしいな・・・どうしたんだね？

「いや、明久の氣を擱てられたんだろう」

「う」愁傷をまね

「？何を話てるんだじゃ？」

「木下君は氣にしなくていいのよ」

そこまで強くした覚えないんだけど（前回の最後のセリフの時に軽
く気当てをやっています

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前達には素敵な卓袱台をア

レゼントする所だが、特別に免除してやりんでもない」

雄一の発言に、当然周りの誰がわわつき始める

「落ち着け、皆。前にも言つたが俺達の目標はAクラスだ。IJJはあくまで『ゴールじゃなく、通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうつかと思つ』

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな」

「うわ・・・誰もフォローしないや・・・

「や」で、お前達Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行って、試合戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ、それだけで良い。ただし・・・」

「うつて雄一は・・・

「そのままじやあ面白くねえから、Bクラス代表がコレを着てせつた通りに行動してくれたら見逃してやろう（笑）」

Cクラス対策で秀吉が着ていた女子の制服を取りだした。
どこにしまつてたんだろう・・・

「さ、坂本……」

「ん？ なんだ藤原？」

「えつと、その……」

「反、林、粗、手」文、題、作

読み

「な!? 風見、趣味じゃねえよー!」

雄一が幽香にいじられるのは無視しちゃう・・・それより永琳いつまで体触ってるんですか

「壁を壊すような力を使つたんですから、他のところに影響がなかつたか調べてゐるのですよ」

心を読まないでください

「ばつ、バカな事を言うな！」の俺がそんなふざけた事を…」
「… Bクラス生徒全員で必ず実行させよう。」「…」
「… 任せて！絶対にやらせるから！」「…」
「… それだけで教室を守れるなら、やりない手はないな！」「…」

うん・・・すごい団結力だねBクラス・・・

「 じ 」 や 、 决 定 だ が

「ぐつ、よ、寄るな変たぐほうつー?」

「取り敢えず黙らせました。閣下」

へ～いいパンチだな・・・

「じゃ、着付けに移るとするか。明久、任せた」

「えつ、僕！？何か嫌だな・・・」

「じゃあ藤原あたりに・・・」

「わかつたやるよ・・・」

まあ、手紙のためだしね・・・

「う、うう・・・」

「あ、やっぱ・・・」

「落ちなさい」

『ガクツ』

幽香…頸動脈を絞めるつて・・・
まあ一年の頃何かしらと近づいてきていたが、つて言ってたも
んね

「これってどうづけるんだ？」

女子の制服なんて着け方わかんないな・・・

「私がやつてあげようか？」

「そう？悪いね。それじゃ、せつかくだし可愛くしてあげてよ
「あ、それは無理。土台が腐つてるから」

・・・やっぱ、否定できない・・・

さて田舎でのモノは、つと

「・・・あった」

「何があつたんだ？」

「うわつ！？・・・何だ妹紅か・・・脅かさないでよ

「え？あ、『めん。それよりその手紙何？』

僕の持つている手紙を見て妹紅が聞いてくる。あ、そつか妹紅達知らないんだ

「姫路さんの手紙だよ」

「ふうん、渡しとこうか？」

「そうだね、お願ひ

さてと皿洗でのものは見つかっ・・・

『ガラツ・！』

「失礼します」

「え？上白沢先生どうしたんですか？」

慧音が来たことにみんな驚いてる・・・
あ、やばいかも・・・

「ちよっとね・・・あ、いた（二）」

「！？」

慧音が笑顔で「ひに・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いが・・・

『「ゴシン――』』

「…………？」

やパリ、こノ頭突きは痛イ！！

「いくぞ、明久……」

「け、慧音……□調……」

「妹紅、黙つときなわー。巻き添え食らうわよ……」

「幽香……」

『ズルズルズル、ガラツ！』

あ～痛みで口調が……それよりこの後説教か……

s i d e 妹紅

「な、なんなんだあれ……？」

「いや、慧音がマジギレしてただけ」

「そ、そうか……」

うん、坂本あんまり突っ込まなくて正解だ

さてこの服は……ごみ箱に入れとくか……手紙、姫路さんに渡しに行くかな。

少女移動中

「よつ、姫路さん」

「…? ふ、藤原さんですか?」

「ハイこれ

「！？これは・・・」

「事情は何となく察してて。あ、大丈夫だよ？明久は何も言ってないし中も見ていないから」

「その・・・吉井君は・・・？」

「慧音に説教されてる、まあ今日のはやりすぎけりたからね」

「そうですか・・・ほんと吉井君って優しきりますよね」

「・・・そうだね」

私がどういう存在かしいても受け入れたり、10救うために自分を
かえりみないほどだけどな・・・

「その、藤原さん

「？なに」

「藤原さんは吉井君のことが・・・好きなんですか？」

・・・

「好きよ。私だけじゃない幽香もね」

「そう、ですか・・・」

「でも・・・」

「？」

「幽香もそうだけど、私達は『明久の相手は明久自身が決める』こと『』
だと思つてるの」

「・・・強いですね・・・」

「強くないわよ・・・まあ、私にできる」とは選んでもうべるよう
に頑張ることくらいだけね

全然気づいてくれないけどね

「・・・・・」

「さて・・・帰るか・・・あ、あと姫路さん」

「なんですか?」

「私のことは妹紅でいいよ」

「じゃあ、妹紅ちゃんって呼びますね」

「ちゃんつて・・・まあ慣れるしかないか・・・じゃあね」

「はい」

さて幽香と合流して明久を迎えて行くかな

第1-8話 Bクラス戦 戰後対談（後書き）

おまけ

ただいま説教中

「壁を召喚獣といえ、素手で殴るとなんど殴っていいんだが…。」

「いや…・・・なんていうか、ね？」

「・・・・お願いだ・・・・」

「え？」

『ギュウッ』

ふいに抱き締められて・・・これは・・・涙？

「お願いだ・・・・私達をあんまり心配させないでくれ・・・・」

「・・・・うん・・・・」めんね慧音

ホント僕って女の子の涙に弱いな・・・

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合（前書き）

題名の通り

紅魔館、紅い霧編後となつております

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合

吉井明久こと僕はとても悩んでいた・・・

「なんか能力に目覚めたのはいいけど・・・名前もわからないし、鍛えようにもどうすればいいのか解らないしな・・・」

能力の一つである『』って場所に行つたことによつて目覚めたこの能力

なんていうかスイッチ？みたいなものを切り替えると視界に点と線が見え、線を切るとどんなモノだろうと切ることができ、点をつくとあらゆるものを見ることができるという能力・・・

僕はこれに目覚めてから結構立つけどどうすればいいのか答えが出しができず、森を歩いていた・・・森？

「あ・・・迷つたああああああああ！」

どうしよう・・・？あれは・・・人！？まさか同じように迷つた・・・

その人は妖怪に追いかけられていた・・・

「くつ！」

何か出来るわけではないが・・・追いかけなきや！-

しかし……そこで見たのは妖怪に襲われる人ではなく、妖怪と対等に戦い、ましてや倒している人だった……それ以上に

「……す、」「いな……」

その人はたった一本のナイフで妖怪を解体していく、乱雑にではなくあまりにもきれいな動きで……
いつの間にかその戦闘は終わっており、その人は僕を見ていた……

s i d e ? ? ?

はあ……空間を飛んでみればいきなり魔物？に襲われるしついでないな……

そこにはいつからいたのだろうか、中学生くらいの少年がいた……！？な……いやこれは……魔に対して感じるものじゃなくて……なんていうんだろうか……
まるで同類にあつたような……
まあいいか

「えつと君、ちょっとといいかな？」

「え？あ、なんですか？」

「ここに永遠亭つてとこがあるって聞いたんだけど……

「ありますけど……それよりお兄さんその田……」

あ、いけない聖骸外したままだった。

「僕と似たような目ですね」
「……え？」

今この少年は何て言つた?」の『直死の魔眼』を『僕と似たような』?

「あ、いや『氣のせ』ね、君……線と点が見えるのかい?」え、はい

「わづか……」

なるほど……さつきの感覚はそういうことか……でも、何だかおれとは違うような……

「すまないけどそれについて詳しく教えてくれないかな……?」「え? あ、いいですけど……

・・・? あ・・・

「ああ、『めん。自己紹介がまだだったね。俺は……』

「遠野志貴、ちょっとした物探しの旅人だよ」

s.i.d e 明久

互いに自己紹介をした後、志貴さんがここに来た理由と僕がこの能力に目覚めた経緯を話した。

「まさか、先生が前言つてたどこ? でも彼はそれよりも……

「えつと……志貴さん?」

「ああ、『めんそれについてだったね』

それは『直死の魔眼』と言つて物の死を点や線としてみる力なんだよ

「物の死……」

「怖い……かい？」

なんていうんだろう……確かに怖いかと言われば怖いけど……

「僕は約束したんです。たとえどんなことがあらうと前に進み続けるつて……」

「……」

「それに……」

「それに？」

「これは間違いなく僕自身の力である意味自分自身です……それを否定するなんてバカみたいじゃないですか」

「……」

「?.どうしたんですか？」

いきなり黙り込んだけどどうしたんだろう……

s.i.d e志貴

驚いた……自分自身だから否定するのはバカみたい……

「ふつ」

「？」

「あはははは……！」

「な、なんで笑うんですか！……」

「いや」「めん、ふふそうか自分自身か……」

まさかこんな小さい子から教えられるなんて俺も歳かな・・・まあもう100はいってそうだけど・・・

「あ、その・・・志貴さん頼みがあるんだけど・・・」
「?なんだい」

「僕に戦い方を教えてくれませんか?」

「・・・なぜだい?」

「僕は、守りたい人たちがいるんです・・・」

「・・・」

「それに僕は前に進み続けるつて誓つたから・・・」「力を手に入れるつてことは他人を傷つけるかもしれないってことだよ?」

「・・・」

「それに逆に傷つけられる覚悟もいる。もしかしたらその守りたい人を守れないかもしねない」

俺は・・・守れなかつたから・・・

「それに力を手に入れるということはそれだけ過酷だということ、場合によつては死ぬかもしねないんだよ?」

「ですね・・・でも・・・」

「僕は、何も努力しないで守れなくて後悔するよりも、何かを守るために血反吐を吐くような努力をするほうがましだ」「それで守れたなら最高ですけどね」

・・・人によつては夢、理想つて言つかもしねないな・・・

「大怪我するかもしねないよ?」

「今さらですし、覚悟の上です」

「最悪死ぬかもしれない」

「死ぬ覚悟でなんかしません、絶対生き残つてやります」

「・・・・・」

はあ・・・「これはここで使つても動かないだろ? な・・・

「はあ・・・負けだ」

「え? ジヤあ・・・」

「いいよ、教えてやるよ。ただしあんまり期待するなよ?」

「はい! -! -

でも、こんな子にあんな思いはさせたくないし、大人である俺から
教えることは教えようかね・・・

「まあ、話も決まったことだし明久」

「?なんですか?」

「永遠亭まで案内してね?」

「あつ・・・・・」

本当に大丈夫かな・・・

s i d e 明久

志貴さんに弟子入りしてから毎日訓練を行つた・・・

それこそ本当に血反吐を吐くような毎日。妹紅達やお母さん達とも心配とかしてたけど、

僕はそれを説き伏せて毎日志貴さんのところに通いつめた。

志貴さんいわく体力面や肉体能力に関しては基礎ができているから

後はどううまく体を使えるかが問題らしい。幽香・・・君の特訓いじめのおかげだね・・・

志貴さんに技の基礎を教えられたり、組み手をしたり・・・はつきり言つて折れてない骨とかないんじゃないかと思う。でも僕はあきらめなかつた・・・

だつてあきらめたら必死に教えてくれる志貴さんにも失礼じゃないか。

ある程度したころ・・・僕は技・・・七夜の技術の伝承が始まった。

side 志貴

最初に言おう異常だ・・・体力面等もそうだが（それを言つた時明久は遠い目をしていた）まあ、これは『』に到達したときに身体能力等自体も強化されているのかもしれない（ゼルレッチさんがそんなことを言つてた気がする

だが問題なのは学習能力だ。教えた動き、技、道具の使い方、体の使い方、魔眼の使い方をまるで水を吸い取るように、しかも限界なく吸収しものにしていくのだ。

何より・・・それは技を教えているときに起つた・・・

「志貴さん」

「ん?どうしたんだ?」

「実は見てほしいものがあつて・・・」

そう言つと明久は刀を構え・・・

「・・・散れ・・・」

一 閃鞘・散華時雨一

「・・・なつ・・・」

「八点衝とかを刀とかでしようとしたら難しくて考えたんですけど
どうですか?」

「・・・自分で考えたのかい?」

「はい!・あ、これのすごいところは密度を変えると範囲を変える
ところなんですよ」

七夜の技から新しい技を作る才能、そしてそれを完成とまで昇華さ
せる技術・・・

本当にこいつは人間なのか?

s i d e 明久

師弟なつて1年くらいたつた夜・・・僕と志貴さんは森で試合をし
ていた・・・

『キン!・ドカツ!・』

「ぐつ!・!・!・」

「・・・隙だらけだ」

一閃鞘・八穿一

志貴さんが視界から外れ・・・真上から斬りかかってきた

「蹴り穿つ!・!・!・」

一閃走・六兎一

僕はそれに対して瞬間的に六発蹴りを叩き込み志貴さんを吹き飛ばすも・・・志貴さんはひょいと受け身を取り・・・

「遅い」

一閃鞘・一風一

僕の胸あたりに肘を叩きこみ、そのまま後ろに投げ地面に叩きつけた

「がはっ！？？？」

頭から叩きつけられていたら死んでいただろう・・・

「はい、ここまで」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふう、でも本当に強くなつたね」

「まだ志貴さんに決定打入れれませんけどね・・・」

「あはは、弟子にそんなに簡単に抜かれてたまるかよ。」

「うう・・・でもやっぱ一撃くらこりちゃんと当たいたいな・・・

「・・・明久・・・」

「?なんですか?」

「俺は今日ここを出る」

「・・・やつぱりですか・・・」

「?わかつてたのか?」

「だつてこきなり試合するそつて言われたらわかるでしょ」

ホントは信じたくなかったけど・・・

「俺が教える」とは教えた。あとでお前がどう昇華をせむかが問題だ」

「……はい……」

「でだ、お前にこれをやるついで思つてな」

そつと志貴さんが取り出したのは……

「い、これは……でもこれって志貴さんのじや……」

『七夜』と刻みこまれた金属棒……仕込みナイフだった……

「あ、これはなまあ物探ししてる途中の世界で拾つたものなんだが……」

「この持ち主……『俺』がどうなつたか知らない。もしかしたらこれを使わなくていい生活をしているか、もうどい昔に死んだかもしれません。倉庫で見つけたからな」

「それって泥棒じゃ……」

「だがこのナイフは頑丈でな。吸血鬼の一撃をくらつても刃こぼれすら起こさない」

話をそらした……

「俺が2つ持つても仕方ないし、こいつも使われるのが本望だらうし」

「……」

「それに師匠から弟子に送れる物として明久に受け取つてほしい

「……はい」

それを受け取つた時、持ち主のいろんな思いを感じた気がした

「・・・・・

『カシャー！－チャキッ』

「あー」。まるで合わせたかのように手になじむ・・・

「さて渡すのは渡したし・・・自主練怠るなよ?」

「はい。志貴さんもお元氣で、姫様よくなるといいですね」

「あの姫様は気ままだからね。じゃあな」

そう言つて志貴さんは懐から出した宝石剣で空間を切り裂き消えて行つた・・・

「ふう、とうとう今日、Aクラス戦か・・・」

しかし懐かしい夢を見たな・・・あれからいろいろなことがあった・・・
自分の能力がわかつたり、この田の本当の正体がわかつたり、新しい仲間ができたり・・・

「志貴さん、僕は今を進んでいますよ」

僕は制服にいつもどうり志貴さんから受け取った『七ツ夜』ポケットに入れ、

大切な仲間達が待つロビーへと向かった

やばい、志貴のしゃべり方が……

今回は明久の過去についてでした。

明「やつと僕のことが出てきたね

うん。文才なくてごめんね……」

明「大丈夫だけど……」

・・・首吊つてくるわ……」

明「やめろ！！」

次回からAクラス本編です。

この話の明久の持つてる七ツ夜ですがパラレルワールドの倉庫にあつたのをお姫様の吸血衝動を抑えるためにいろいろと世界を飛び回り、たまたまだり着いた志貴がうば・・・拾つてきた物ですあと時間に関しては明久の学習速度がおかしいだけです

第19話 Aクラス戦前 Fクラス（前書き）

Aクラス戦前の交渉前の話です

第19話 Aクラス戦前 Fクラス

Bクラス戦から一日経つて、Aクラス戦について雄一からの説明が始まった

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」

「……こいつは誰だ？ 雄一の皮をかぶった別人か！？」

「なんだよ？ ゴリラらしくない」

「いい加減その呼び方やめてくれないか？」

「……で坂本。どうしたんだよ、らしくねえ……」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強さえすれば良いってモンじゃねえっていう現実を、成績だけが全てとしか見てねえ教師共に突き付けてやるんだ！」

「……」

「でも努力ぐらいしようね……」

「皆、ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと考えている」

「どういう事だ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

雄一の言葉に、教室中にざわめきが広がった

「落ち着いてくれ。それを今から説明してやる」

「そつは言つてもどりつかぬのかしら？」

「まず、戦るのは当然俺と翔子だ」

代表同士の一騎討ち。まあ、当然と言えば当然よね……でも

「普通にやつて今に雄二が勝てるわけ……」

『ヒュウ』（雄二が明久にカッターナイフを投げる）

『パシッ、ヒュウ！』（妹紅がキヤッチし投げ返す）

『ヒュウ！』（私もついでに雄二にペンを投げる）

「うわーーー？ 何すんだてめえらーーー！」

「最初にやつたのはお前だろーーー！」

確かにそつね、それに

「今度明久に同じ」としたら・・・アテルワヨ？

「マジでいませんでした

「ま、まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。あとでに戦り合えば勝ち目は無いかも知れない」

だったら、カッター投げないでよ

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろ？？まと
もに戦り合えば俺達に勝ち目は無かつたが、俺達は今こうして勝ち
進んで来ている。今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、Fクラスは
Aクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。俺を信じて任せ
てくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「――「おお～！！！」」「（（（いや、無理でしょ・・・）））

あら？なんだか明久と考えが重なつたような・・・

「さて、具体的なやり方だが・・・、一騎討ちではフィールドを限定す
るつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は
100点満点の上限有り。召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とす
る」

ふ～ん、何か秘策でもあるのかしら？

「でも、同点だつたら引きつと延長戦だよ？そつなつたら問題のレベ
ルも上げられるだろ？し、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじや」

「まさか運任せとか言わないよな」

「おいおい、お前達。あまり俺を舐めるなよ～いくらなんでもそこ
まで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか」

「じゃあ、雄一は霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」「アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろ？」

あら、まるで霧島さんのことなら知ってるよつた口ぶりね・・・

「雄一よ、あまり勿体振るでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「ああ、すまない。前置きが長くなつたな」

「俺がこのやり方を探つた理由は一つ。それは、『ある問題』が出ればアイツは確実に間違えると知つていてるからだ」

「ある問題？」

「ああ。その問題とは・・・『大化の改新』

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？小学生レベルでそんな問題が出てくるのかな？」

「いや、そんなに掘り下げた問題じやない。もつと単純な問いただす」

「単純とこうと・・・起こったのは何時代かとか？」

「もしくは年号とかかのう？」

「お、ビンゴだ秀吉。お前の言つ通り、その年号を問ひ問題が出たら俺達の勝ちだ」

そんなこいつまくいくのかしら・・・

「簡単な問題なんだが、翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ちとなり、晴れてこの教室とオサラバつて寸法だ」

「（）自信ね・・・それよつさつきから気になつてたけど・・・

「あの・・・」

「なんだ？姫路」

「坂本君って、霧島さんと知り合いなんですか？」

それよ。さつきから「アイツ」とか言つてゐしね

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「總員狙えええええ———つ！—！」

あ～また！」つらは・・・

「なつ！？何故須川の号令で皆一斉に武器を構える！？」

黒れ男の敵！Aゲーテの前にギザマを殺すッ！」

「男とはツ!!』『愛、

一男とはッ！『愛』を捨て『哀』に生れる者成りッ！それをキサマは汚らわしき欲望を以て気高き才色兼備の霧島翔子を唆し、我等の

「鉢の振を踏みにじたのだ……！」

死をツ！！」

・・・ハア・・・ここにはバカしかいないのかしら・・・

「訳分かんねえ！何だよ血の盟約つて…？つまらビリにうつ事だよ！」

「「「「「霧島翔子と幼馴染なんて羨ましいじゃねーか」の野郎ツ

くだらないわね・・・

「それ言つたら明久はどうなる！！風見と藤原と幼馴染で、上白沢先生や八意先生とも聞いてる限り仲いいんだぞ！？」

「な!? 雄一おま・・・」

「吉井イイイイ——! キサマも異端者だ!」

『シユカカカカツ！！！』

「お前ら……」

「豐方產」

「… 明久に手出したらどうなるか解つてるよな（わかつてゐるわよね）

はあ、呆れてこの頃溜息が多いわ・・・

「あの、吉井君」

卷之三

「アーニー、お前がアーニーだよ！」

۷

一 けど好みかと言われたら……って、ええっ!? 何で姫路さんが

僕に対して攻撃態勢取つてゐるのー！そして美波！？君は何故教卓なんて物騒な物を僕に投げつけようとしてるのさー！？僕が一体何をしたとーー！」

井君にはお仕置きが必要な様ですね

「覚悟しないアキ。その性根を叩き直してあけるわ！」

「あと話を聞くつてひともね」

私と妹紅は一人を抑えつける

記憶が確かなら姫路つて子もつちよつとまとも子だと思つてたけど

氣のせいだつたのかしら・・・

s i d e 明久

なんとか命の危機を脱出すると

「まあまあ。落ち着くのじや眞の衆」

「冷静になつてよく考えてみるが良い。相手は『あの』霧島翔子じやぞ? 『ぐり』幼馴染とはいえ、男である雄一に興味があるとは思えんじやうづが」

「まあそれもそうだな・・・」

「むしろ興味があるとすれば・・・」

さつきまで暴走してたFクラス男子が一斉に姫路さんを見る

「な、なんですか? もしかして私、何かしましたか?」

「いやいや。別に何も」

「何もしてないけど、何かされる可能性が・・・」

「え?」

「――『いいえ、何でも!』」

「? ? ?」

やつぱりみんな噂を鵜呑みにしてるみたいだね・・・

「とにかくつ! 僕と翔子は幼馴染で、俺達が小さい頃に俺がアイツに間違えて『大化の革新は625年』って教えていたんだ」

「貴様ツ!! まだ幼くて何も知らない純粋無垢な霧島さんに嘘の情報教育を施していやがつたのかツ! ..」

「何て外道な奴なんだ!!」

「・・・・・許されざる行為・・・」

「ええーい、もつ何とでも言えーー取り敢えず今は黙れーー話が進まんーー」

どんまい、雄一

「アイツは一度覚えた事は絶対に忘れない。だから今、学年トップの座にいる。しかし、今回はそれが仇となるんだ！」

雄一が黒板をバンッと叩いて皆の注目を集める

「俺はそれを利用してアイツに勝つーーやつしたら俺達の机はーー

「システムアスクだつーー」

そうつまくいくかなーー

第19話　Aクラス戦前　Fクラス（後書き）

交渉まで行きたかったが一分割。

第20話 Aクラス戦 交渉 メイド服との恋愛（前書き）

今回明久の能力がちょっとわかります

第20話 Aクラス戦 交渉 メイド長との会合

「一騎討ち?」

「ああ。FクラスはAクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む」

今回の交渉は雄一が行つてゐる。ちなみに一応僕、幽香、ムツツリ一一、姫路さんは付き添いだ。

で、Aクラスから交渉に出てゐるのは秀吉の姉の木下優子さん、ホント見た目じゃどうとか分かりにくいね・・・

「うーん、何が狙いなの?」

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのにはありがたいけどね。だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」「賢明だな」

「ここまで予想通りだね。ここからが交渉の本番。

雄一君の腕の見せ所だよ?」

「ところでFクラスとの試召戦争はどうだった?」

雄一は腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけよ?何の問題もなし」

「なるほどな。ところでBクラスとやりあつ氣はあるか?」

「Bクラスって・・・・・昨日來ていたあの・・・・」

「ああ。あれが代表をやつているBクラスだ。幸い宣戦布告はまだ

されていないようだがさてさて。どうなることやら」「でもBクラスはFクラスと戦争したから三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね?」

確かにルール上そうだけど・・・

「知つていろだらう?事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになつていてる。規約には何の問題もない。・・・・BクラスだけじゃなくてDクラスもな」

例外もある

「・・・・・それって脅迫?」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

木下さんは考え込むように黙る・・・

仕方ない

「木下さん、じゃあいつこいつのはビリーハー」

「?なにかしら?」

「お互ひ7人、7VS7の一騎打ちを行つて、最初に4勝したほう
が勝ちっていう方法なんだけど」

「な! おい明久! 何を勝手に・・・・!」

「でもこの提案が却下されたら全面戦争になるかもしねいよ? だ
つたらちょっとでも勝ち目がある方に妥協した方がでしょ?」

木下さんは少し考えた後

「うん・・・いいわ。吉井君の案なら? んであげてもいいわよ」

「本当か？」

「ええ。それならこちらのリスクも結構小さく出来るしね。」

「……はあ、仕方ない。けど、勝負する内容はここで決めさせてもいい。それくらいこのハンデはあってもこにはすだ。」

さすが雄一。あくどい

「え？ うへん……」

「…………受けてもいい。」

「…………雄一の提案を受けてもいい。」

代表の登場だね……

「あれ？ 代表いいの？」

「…………そのかわり、条件がある。」「

「条件？」

「…………うん。負けた方は何でもこいつ事を一つ聞くべ。」

そう言いながら翔子は雄一の後ろにいる瑞希を直踏みするよじつくりと観察した。

そこでムツツリーニはカメラを準備した。

「土屋君、早くそれしまわないと……壊すわよ。」

「…………（サッ）

さすがに壊されたくはないよしだね、まあ、僕自身幽香が言つ前に壊そつかと考えたけど……

「じゃ、こうしょ？ 勝負内容は二つの内4つをうち決めさせてあげる。あと二つは二つで決めて。」「…………」

「そうだな・・・わかつたそれで行こう

「開始はいつ?」

「補給テストをもう一度受けたいからな、昼からだ」

「わかつた」

さて、話も終わつたしかえ・・・

その時僕は銀髪の少女に気がついた・・・

そしてその手に懐中時計が・・・

『力チツ』

その瞬間みんなが時間が止まつたように動かなくなつた、いや実際に時が止まつてゐるんだから当たり前か・・・

「よかつた。気づいてたみたいね」

「何言つてるのさ、思いつきり目があつてから時を止めたじゃないか、咲夜」

彼女は十六夜 咲夜。幻想郷の紅魔館のメイド長で、『時間を操る程度の能力』を扱う

「だって貴方、認識しないと周りと同じ状態になるじゃない

「うつ・・・」

そう僕の能力だが意識していれば咲夜の止まつた時間の中に入れるが、気づいてないと発動しないのだ・・・

「それよりいつのまにここに?」

「2年の始まりくらいに転校生つてことで來たわ」

「へ～」

「やつぱり・・・明久、貴方Aクラス見に来た時私に気づいてなかつたでしょ」

「ハイ、誠に申し訳ございません」

本気で気付いてなかつた・・・

「まあいいわ。それより紫さんから伝言なんだけど」

「え？ 紫から？」

「今回の試験召喚獣で私達にちょっとした実験を手伝つてほしいそうよ」

八雲 紫。幻想郷を作つた張本人で『境界操る程度の能力』を扱う妖怪である。

みんなからは胡散臭いとか嘘つきと言われるけど、僕はそう感じたことがない。

彼女いわく「なぜか明久に対してだと本音とかほろぼろ出ちゃうのよね・・・」と言つていた。

あと、彼女にとつて僕は天敵みたいなものらしい。

それ以来僕の2つ名に「紫専用最終兵器」というものがついた・・・で話は戻すが、僕がこの学園に入ったのを知つてから紫は何かしらと技術提供をしたりしてスポンサーみたいな立ち位置にいるそうだ

「そうか・・・わかつたよ

「・・・明久・・・」

「なに？」

「本気でやつてね？」

・・・

「何言つてゐのさ・・・」

「・・・」

「咲夜とやる以上本氣を出すに決まつてゐでしょ」

「・・・ふふ、そうね。ありがとう」

「じゃあ、今度はクラス戦で」

「ええ、待つてゐわ」

『力チツ』

「? 明久どうした?」

「何でもないよ雄一」

「明久・・・」

後で説明するよ幽香・・・

「じゃあ戻りつか」

今回の補給テスト『本氣』でやらないとな・・・

第20話 Aクラス戦 交渉 メイド長との会合（後書き）

さあ、今日は咲夜との会合でした。

あと補足ですが明久が紫の天敵な訳は、
紫の境界を操る能力が明久の直死の魔眼とも一つの能力とともに
相性が悪いからです。

例

境界を扱おうとする 境界を殺して扱えなくなる

第21話 Aクラス戦1

夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

妹紅編！！

第21話 Aクラス戦1 夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

とつといひの時が来た…

「準備はよろしいですか?」

立会人はAクラス担任であり、学年主任の高橋先生が行うみたいだ…

「大丈夫だ」

「…はい」

「では今よりAクラス対Fクラスの試合を開始します」

「始まつたね」

「そうですね」

「ところで何で上白沢先生がここに?」

美波ナイス質問

「貴女達の担任だからですよ」

さいですか…

「では両クラス代表は前へ」

「ではわしがいくかのう」

「じゃあ、私が行くわ」

姉弟対決か…

「では一回戦を開始します」

「秀吉、シクラスの小山さんってしつついる?」

「え?誰じゃったかの?」

小山さんって言えば代表の…

「ちょっとひたちに来なさい」

優子さんは秀吉を連れて裏に行つた…

『どうしたのじゃ姉上?』

『あんた私に変装してブタどもが、とか言つたらしいわね…』

『あれはわしなりに姉上ならこいつだらうと…って姉上…腕はそ
つちには曲がらな…』

…

「(めんなさい秀吉体調が悪いみたいで休んだわ)

といつあえず、行つてみるか…

s i d e 姉紅

明久は…行つたか…相変わらずだな

しかし秀吉の姉つてバイオレンスだな…

「はあ、演劇なんて馬鹿な」とばかりして…勉強を疎かにするなん

て恥じもこいとひだわ

…「マイッ…

「どうする？」

「仕方ない、先生この試合…ちら「待つて…」ふ、藤原?どうした
?」

「あら、貴女が相手?」

「先生、教科は歴史で」

「では、初めてください」

「力の違いを見せてあげるわ」

なんか言つてるけどいいや

「最初に言つておきたいことがある」

「何かしら?」

「私は…」

とりあえず

「夢に向かつて努力する奴を侮辱する野郎は大嫌いなんだ!…」

燃やす!!

歴史

Fクラス 藤原妹紅 412点

V S

Aクラス 木下優子 337点

「 「 「 「 400オーバーだと…?」 「 「 「

「な、貴女…」

：

「能力発動」

藤原妹紅 312点

「どうこうつもり?」

「どうでもいい、やるが!」

「…舐めるな!」

私は炎をぱりまき、あつちはなんとか避けながら槍で攻撃してくる

「…」それで終わるよ…。

私の炎はあつちの召喚獣の腕を焼き、あつちは私の召喚獣の胸を槍で貫いた…

「勝った…」

喜んでると悪いけど…

「リザレクション…」

「え?」

『ボツ…』

「！？」

召喚獣が炎にかこまれ、火の羽がはえた状態で復活した…

藤原妹紅 212点

V S

木下優子 102点

「嘘…」

「燃えろ・・・」

召喚獣は巨大な炎塊を優子の召喚獣に投げつけた。

木下優子 0点 戦死

「なんで？確かに止め差したのに…」

「私の腕輪の能力はな…100点を払うと、200点元の点数から引かれるが一回だけ復活できるんだよ」

「…」

「木下…」

「何かしら」

「秀吉謝れよ。確かに悪乗りしたあいつも悪いけど」

「そうね、私のさつき言つたこと失礼よね…」

「では1回戦Fクラスのし「負けでいいよ」え？」

「な、なに言つてんだ！！藤原」

なんかゴリラが言つてるけど

「だつて私乱入しただけだし」

「確かに木下君の代わりに出るとは言つて無いですね」

さすが慧音、私が言つてること理解したみたいね

「では1回戦Aクラスの勝利とします」

あ、明久も帰つて来たみたい出し戻るか

第21話 Aクラス戦1 夢に向かって努力する奴を侮辱する野郎は許さない

おまけ

「秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「さつき馬鹿にして、めんなさいね」

「別にもうよい」

「藤原さん強いわね」

姉上：

「多分それは明久が理由だと思つぞい」

「吉井君が？」

「つむ」

『明久、勝つたけど負けたぞ』

『妹紅なに言つてゐの？とか抱きつかな…』

わしは明久を見ながら姉上にそう言つた

第22話 Αクラス戦2 もじたんは壱子（前書き）

もじたんがエフされました
今回のお話は
カオス
三頭身
たれパンダ
でお送りします

第22話 Aクラス戦2 もいたんは帽子

今の状況をお伝えしよう・・・

「うひゃー」（明久の頭の上でたれパンダ状態のもいたん）

「久しぶりに見たわねこれ・・・」

「そうですね、この頃この状態になることなかつたですから

慧音・・・懐かしそうに言わないでどうにかして・・・
じやないと・・・

「「うまいようかしら（まじょつか）・・・」「

だから僕は君達のペッシュじゃないって・・・

「「「「死死死死死死死死」」「」「」「

そいつるさこよ

「なあ・・・藤原が三頭身みたいになつてるような気がするんだが・

・・・

「創作物の話だから仕方ないわ」

雄一がまともな意見・・・そして幽香メタ発言しない

「ホントうつ見ると人形みたいね」

永琳・・・でかいつの間に来たの！？

「ちよひと紫さん」に呼ばれてね

そこですか・・・でか心読まないで・・・

「では2人田どうぞ」

「じゃあ須川頼んだぞ」

「俺か?」

「ああ、藤原はもう出れないからな」

「ふ・・・本気を出せつてことだな・・・」

「ああ、逝つてこ!」

雄二・・・漢字違つよ・・・

「なんじや?」この空氣は

「あ、秀吉おかえり。お姉さんは何て?」

「わざの謝罪だそづじや、。それより明久治療ありがとうなのじ

「や

「気にしないで、最初の原因は雄一だから」

「しかし、異様に手馴れておつたのう、あとあの救急セットはばい」

から出したんじや?」

「それは・・・」

うへんどうしきよつ

「吉井君が治療がうまいのはハ意先生から習つてたからですよ」

「どうじつことですか?上白沢先生」

「言つたまんまよ。明久はハ意先生の弟子みたいなものなのよ」

「いや、別に弟子つてわけじゃないんだけどね、幽香」

「さうね、もう吉井君ほんどの治療の仕方と薬の調合覚えてるも

のね?」

永琳！？

「明久が？ありえんだろうこのバカが」

「 「 「 確かに」 」 」

「あら、貴方達シニタイノカシラ？」

「 「 「 「 すいませんでした」 」 」 」

「あの・・・」

「 「 「 はい？」 」 」

「早く3人目でてくれませんか？」

「 「 「 「 え？」 」 」 」

須川君・・・瞬殺だつたんだね・・・

「・・・・・俺が行く」

「おう、ムツツリー二頼んだぞ」

「了解」

ムツツリーは科目選択に保健体育を選ぶだろう。

保健体育だけでムツツリーは総合科目の点数のうち80%を占めている。

その単発勝負ならAクラスにだつて負けはしないだろう

「じゃ、僕が行こうかな」

？知らない子だな？

「1年の終わりに転入してきた上藤愛子だよ。ようじくね

「教科は何にしますか？」

「 · · · 保健体育」

「土屋君だけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんがムツリーに話し掛ける

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？・・・・・キリとは違つ

「実技」でね

「アーティストの心」

な
いきなり鼻血出して倒れた！

「ちょっと、大丈夫！？ ムツツリーーー」

問題なし

いやどう見ても瀕死だから・・・

そつちのキミ、吉井君だつけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかつたら僕が教えてあげようか？

もせん 実技 ね

勉強も要らないわよー・・・」「

「……そこです！永遠に必要がありません！」

なんだろうすごく失礼な気が・・・

「...」が添付

もこたん人間の言葉喋るうね。てかそろそろ戻るうよ・・・

「やつね妹紅の血のとおつ・・・」

え？ 幽香今言つたことわかったの！？？

『ギヨシ』

「く？」

「ちゃんと相手がいるから問題ないわ」

「くわー！…吉井殺す！…！」

幽香が抱きつきながら言つた

「あ～確かにそうだね」

「くくく…く？」

?みんなどうしたんだ？

「え・・・吉井君つて…・・・

「藤さん？ 何驚いてるんだつ…・・・だつて

「え？ 保健体育の『実技』って体育のことでしたよ？」

しーん

あれ？ 僕何か変なこと言つた？

「・・・まあや！」辺はあとで教えてあげるから吉井君、気にしなくていいわよ

「は、はあ・・・」

「「「「八意先生と個人授業だと！？」吉井許すま・・・」「」」」

「はいはい、黙りなさい・・・・・」

「「「「Yes sir・・・」「」」」

うん？

「そろそろ召喚してください」

あれだけの騒動にも関わらず、高橋先生は冷静だな・・・

「はーい。サモンつと」

「・・・サモン」

二人の召喚獣が姿を現す。

ムツツリー二の召喚獣は隠密スタイルで武器は一本の小太刀。対して、工藤さんの召喚獣は…。

「なつ、何だあの巨大な斧は！？」

見るからに破壊力抜群そうな大戦斧に加え、腕輪まで装備している。見るからに強そうだ

「では第三試合、始めつ！」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

「…………その必要は無い」

「えつ？ 何で？」

「…………工藤愛子、お前では俺には勝てない」「へえ～、自信満々だね。けど つ！」

「工藤さんの召喚獣はものす」「スピードでムツツリーの召喚獣に突っ込んできた

「それじゃあ、バイバイ。ムツツリー君つー」

そして斧を振り上げムツツリーの召喚獣を両断・・・いや、そんなことないか・・・だつて・・・

「…………『加速』」

『ムツツリー』だし

ムツツリーはそれ以上のとてつもないスピードで工藤さんの召喚獣を切り捨てていた・・・

「・・・・え？」

「…………『加速』、終了」

保健体育

Fクラス	土屋康太	572点
VS		
Aクラス	工藤愛子	446点

「す」「スピードだな・・・」

「そうね・・・20回かしら?」

「何がだ?」

「切った回数よ」

「――――え?」

「正確には24回」

「へへ私には幽香と同じ20回しか見えなかつたや

あ、妹紅元に戻つてゐ

「な・・・何言つてんだ? 明久」

「・・・・・明久・・・全部見えてたのか?」

「うん、どにを切つてるかも切り方も全部見えてたよ」

志貴さんのほうがやっぱ切り方は正確かな・・

「ムツツリーーー、まさか・・・」

「・・・・・切つた回数24回」

「「「「「・・・・・」」」」

「しょ、勝者、Fクラス」

高橋先生・・・Aクラスだから絶対負けないってわけじゃないんで
すから・・・

おまけ

「とじろで妹紅」

「うん?」

「いつまで抱きついてるの?」

「気が済むまで『ギュッ』」

「そう。まあ別にいいけどね・・・

「・・・(妹紅の奴いな・・・)」

「・・・(勢いとはいえ明久に思いつきり抱きつこちやつた・・・

／＼＼＼＼

「（私も頼んで抱きついでみよつかしら・・・）」

「（ほんと明久君変なとこで天然なんだから・・いつその事本氣で実践しようかしら・・・）」

「アキ・・・」

「吉井君・・・」

なんか美波と姫路さんから不穏な空気が・・・
ハア・・・咲夜との試合まで生きてられるかな・・・

第22話 Aクラス戦2 もじたんは帽子（後書き）

やつぱりいろいろとフラグを立てる明久でした。

え？ 手紙？ 友人からか・・・なになに・・・

明久はもこたんから後ろから抱きつかれてるならすなわち胸が・・・

『蓬莱』凱風快晴 - フジヤマ、ヴォルケイノ - 』

作者はログアウトしました

第23話 Aクラス戦3 燃え须きたか・・・(前書き)

注意 久保君にはお気を付けください

第23話 Aクラス戦3 燃え尽きたか・・・

「で、では4人目の方前へ」

「じゃあ姫路頼む」

「あ、は、はい」

「雄二に言われて姫路さんが前へ・・・? FFF団? 幽香がそこで山にしています

「姫路さんの試合か・・・どうなるかな・・・」

「そうだね・・・勝たないとやばいもんね」

妹紅が上から聞いてきたのでそつ答える。あ、美波が幽香に「プログラミスト喰らつてる・・・あとムツツリーー美波のスカートの下を」そつとしない

「それなら僕が相手をしよう」

「あっ、あれは!」

「やはり来たか。現学年次席、久保利光」

復活するのはやいな・・・あれ? 久保つて・・・

「大丈夫だよ明久」

「そうね」

「私達が守るから」

「私達も手伝いますね」

「何から?」

4人ともどうしたんだろう・・・

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

「構いません」

「やばいな・・・」

「なにが? 雄一」

「前のテストで二人の差はそこまでなかつたんだ。もし万が一のことがあつたら・・・」

「大丈夫だろ」

妹紅がはつきりとそう言つた・・・

「何を根拠に・・・」

「見てればわかるさ」

「それでは4試合目開始してください」

「「サモン! ! !」

総合科目

Aクラス 久保利光 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希 4409点

「な、何だと! ! ?」

「差が400オーバーなんて・・・」

「いつの間に・・・」

「あれ代表にも匹敵するんじゃ・・・」

Aクラスの「反応す」いな・・・

「先生、合図を」

「あつ…！し、失礼…」

先生、さつきから驚きすぎです・・・
なるほど確かに妹紅がの言うとおりだね

「ぐつ…！姫路さん、この短期間にどうやってそこまで強くなつた
んだ！？」

「私、このFクラスが好きなんです！誰かの為に一生懸命になれる
このクラスの皆が！」

うん・・・確かに一生懸命だね嫉妬面では・・・

「Fクラスが好き？」

「はい！だから、私は頑張れるんですつ！」

「どうしても、僕も負ける訳にはいかないつ！」

なんとか拮抗してるので

「やあつ！」

「あつ！？」

姫路さんの大剣が久保君の大鎌を真つ二つにへシ折り、すかさず左
腕を相手召喚獣に向けて翳す。
あ、あれは・・・

『シユボツ』

腕輪の能力を発動させ、ほぼ零距離から放った熱線砲。成す統べな

く久保君の召喚獣は消し炭と化してしまった。

それを見て僕は・・・

「然之」卷之二

「?どうしたの明久」

いや……なんか電波を……」「

2

「しょ、勝者、Fクラス」

お疲れ様
姫路さん

卷之三

うん？

なんか嬉しそうにしゃが
桃色オーラか・・・

「アホ……」「ハーハー然じた御用達が、あらわら宛てに一々幽

香！？？」

あら? 一つの間にか名前呼ぶやつになつたんだね

「
む
」

?どういいふあふおふおふお」(「どうしたの妹紅」)

卷二

いきなりほつぺ引っ張ってきて・・・

「あ、業ざな

「おう、逝つてこ」

「雄一漢字変だよ」

「氣にするな

さて行こうかな・・・

「ちょっと待つた～～」

するといきなり乱入者が・・・

「な、だれ「問題ないさね」が、学園長！？」

「今回の実験のスポンサーだよ

うん・・・何となくわかつてたけど・・・

「紫・・・空氣読もうよ・・・

・・・ハア

第23話 Aクラス戦3 燃え尽きたか・・・(後書き)

まさかの咲夜の登場を妨害して登場した紫。

この作品での紫は基本ダメっ子です。

あとアンケート結果ですが

・台詞の前には名前をつけない

- ・映姫の外見は17歳（明久くらい）程に決定しました
アンケートにお答えいただきありがとうございました

第24話 Aクラス戦4 説明（前書き）

さて説明と明久の能力が・・・

第24話 Aクラス戦4 説明

「あ、『めんなさい』ね。私は八雲紫と言ひて幻喰獣のシステムの制作担当の一人よ」

まあ、ちよつと記憶をこじつてそつなつてるけど関わってるのは確かだね・・・

「な、製作者だと」

「でもなんで・・・」

「あ、なんでここにいるかといつと新システムの実験を頼んでる子たちがいるからその説明よ。つことで吉井君、カモン」

・・・なんていうか・・・

「話は別としてふざけた行動をしないでください」

「話は聞いてたけど空気を読んでください」

慧音、永琳言いたい」とありがと

「えっと、八雲さ「ゆかりんでいいわよ」ふざけないでください」

「うう・・・」

「あ、Bクラスの壁ありがと」「わこまく」

「気にしないで」

「じゃあ紫さん説明お願ひします」

「分かつたわ」

「今回だけどちよつと幻想郷関係者である貴方に頼みたいの」

「今回のあの学園長の考てるシステムひとつしても危険だと言つて

るんだけど聞かなくてね」

「教育者としてどうなんですかそれ…」

「で、それを疑似的に作るために明久に頼みたいことがあるの」

「なんですか？」

「一つは直死の魔眼を発動しないこと、これは実験と表して境界をいじるからそれを殺されたら困るからよ」

「うん」

「もう一つは明久の能力を押さえてほしいの、理由はさつき言ったとおりね」

僕に能力の一つで、「あらゆる状況下で我を貫く程度の能力」と言うのがありこれは、

認識しさえすれば、時が止まろうがその影響を受けないのだ。咲夜の能力が効かなかつたのもこれのおかげ。あと自分自身で考えれば思考を読まれるのを拒否したり、幻覚等も効かず、紫の境界制御すら効かないはつきりいてチート的能力だが難点もあり、認識できていないと発動しなし、物理的?なものは防げないし、自分自身にしか意味がないのだ。

「わかつたよ、それだけ?」

「ええ、ところで私の境界の力は役に立つてるかしら?」

「うん、荷物とかの持ち運びにすぐ」

「・・・ほんと無欲よね・・・」

「そりかな?結構貪欲だと思つけど・・・」

そしてもう一つの能力、それは「力を共有し昇華させる程度の能力」
・・・『あの子』いわく、こちらは僕が本来もとから持つてている能
力らしい。

これは相手と力を共有しその力を使うことができる物である。力は
はっきり言って固定的意味はなく技術力や魔力等も共有して身につ

け自分自身に合わせて昇華してしまつ。志貴さんとの修行はこれのおかげでかなり早く覚えた。

ただし身につけるためには、理解し、その行動を行い、それを受けることが条件であり、妹紅の「死なない程度の能力」などは覚えることができない。また相手が拒否した場合力の共有は行えない。

(明久の能力がわかりにくい場合は明久のキャラ紹介を)

「後ファイードバックだけど20%ほどつくわ・・・」

「うわ・・・けがしたらホントどうするんだろ?」

「ええ・・・しかも困ったことに追加だからはつきり言って明久は40%近くのファイードバックを食らひつてことよ」

「・・・もう何も言わない」

「もう咲夜にも伝えてるけど合図したら「イリュージョン」って言つてちようだい」

「なんで?」

「それらしく見せるためよ」

まあいいか

Fクラス陣

ある程度省いて雄一達に説明した。

「で、明久どうだった」「なんかちょっと用意がいるみたい」「しかしあの婆あほか?」「婆つて・・・言いすぎだよ」

まあ確かに言いたくなるけどね

「用意出来ましたので5人目の方、前に」

「いつでくるね」

「行つてらつしゃい」

「気を付けてくださいね明久君」

慧音・・・心配なのはわかるけど・・・

「逝つてこい」

「ハア・・・・・」

境界のずれたフィールド

「『めん待たせたかな?』

「いえ、待つてないわ明久」

「じゃあ・・・・」

「『樂しもうか(しみましょう)』」「『

side 雄一

「明久が負けるのはわかってるし、あいつがボロボロになるのを楽しむかね(笑)」

「イツ学習しないのかな・・・・

「吉井君なんだか楽しそうですね・・・・」

「そうね、お仕置きが必要かしら・・・・」

「 「 「 「 またか、またなのか！吉井の野郎！…」「 「 「 「
「 どつちかといつとお仕置きが必要なのはあなた達よ」

あいつ等は幽香に任せよつ

「坂本、あんたの予想だけど確實に外れるよ
「何？」

「教科は何にしますか？」
「えつと古文で」
「では召喚していくぞ」
「「サモン…」」

古文

Aクラス 十六夜咲夜 613点

「 「 「 「 な・・・・！？」「 「 「 「
「な、なんだよあの点数！？」
「さつきの土屋つてやつを超えてるぞ…！
「てが代表でも無理なんじや…」

Aクラスの反応す”いな

「な、化け物かよ…」
「あんなのアキに勝てるわけない…」
「吉井君…」

ハア…

「何言つてんのさ…」

「そうね・・・」

「明久は」

そして明久の点数が遅れて表示された

Fクラス 吉井明久 684点

「…………ええええええええ！」

学園が揺れた

第24話 Aクラス戦4 説明（後書き）

まあ普通に考えて永琳のところで勉強してたんですから・・・
点数はほぼ適当です

番外 キャラ紹介 吉井明久（前書き）

主人公のキャラ紹介です

番外 キャラ紹介 吉井明久

吉井 明久

読み よしい あきひさ

能力：『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』『力を共有し昇華させる程度の能力』

スタイル 身長は170程度 ほつそりしているが鍛えられている
外見：茶髪に濃い茶色の目、それなりに美形に分類される

召喚獣の能力：『スタイルチェンジ』

100点を消費して武器、外見が変化する。最初はランダムだが一回発動させるとそのあとはコストなしで武器は変換可能。
しかし外見（服）は一回になると変えることができない。あと低い確率だが『大当たり』が存在する。

点数：慧音、永琳から教えてもらっているためどれも高い

口調：年相応

能力について

『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』

認識していれば時が止まつていようがその影響は受けず、意識すれば心を読むことも、幻術にかけることも、境界などをいじることすらも拒否できる。

しかし気づいていることが条件で不意打ちや認識できていない状態だと発動せず、また物理的干渉については拒否できない。しかし、命になどが危険にさらされるような物理的なものは除く干渉には自動的に発動する。指定は自分自身のみ。

この能力は靈夢の能力を昇華したことにより身につけたのではない
かと思われる。（明久はこれが自分の能力だと思っていた）
実はなどと、誰かの能力を昇華して手に入れたわけではなく、『

』に何度も明久が繋がり続けたために手に入れた能力である（ネ
タばれ

『力を共有し昇華させる程度の能力』

明久が元から持っている本来の能力。

相手と力を共有する能力。また共有した力は使うことができる。

力に制限はなく、他人の能力もだが魔力等もさることながら、技術力ましてや生命力等も共有できる。

しかし相手側から拒否されると共有できない。

また能力や技術力に関しては自分に合わせて昇華させることにより身につけられる。

しかし、認識、見る、行う、感じる等条件があり、妹紅の『死なない程度の能力』など条件が無理なものは覚えられない。

『直死の魔眼』

本来は違うらしいが今のところはこれで表現する。

物の死を見ることができる。これが読み取つて視覚化するのは單なる生命活動の終了ではなく、意味や存在における「いつか来る終わり」、「死期」、「存在限界」であり、「存在の寿命」そのものである。直死の魔眼所有者にとって「死」は黒い線と点で視認され、強度を持たない。魔眼所有者がこの「死」を切つたり突くと、対象（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。

しかし明久に関しては狂氣など、精神等にも干渉できるらしく、志貴いわく「似ているが全然違うもの。性質が悪ければ直死の魔眼より上位の魔眼」らしい。

本来の名前は『虚無の神眼』^{クニフオ}。明久が真理の扉を開いたことにより手に入れた物

今のところ共有して身につけている物で分っているもの

七夜の技術 永琳の才能（劣化版）身体能力 直感 靈力 魔力

『空を飛ぶ程度の能力』
『魔法を使う程度の能力』
『気を扱う程度の能力』
『剣術を扱う程度の能力』
『境界操る程度の能力』（境界を開くことしかできない）
『あらゆる薬を作る程度の能力』
『怪力乱神を持つ程度の能力』（劣化版、せいぜいコンクリートを碎く程度。しかし靈力等で肉体強化をした場合十数トンは出るみたいだ）

設定：基本は原作と変わらないが頭は良い。しかし天然で時折すごいボケをかます。

ある意味ねじが抜けており、慧音の正体等聞いたり見たりしても「だからどうした」というほど神経が図太い。またあまり怒らずとも優しいが、怒ると手がつけられず、昔暴走した時幻想郷の最強勢が総出で止めにかかったが止まらないほどである。しかし無敵というわけではなく、負ける時は負ける。

夢想天生を発動した状態の靈夢と戦うことができ、殴り合いになるとどうしても明久に分があるため、今のとこ事実上幻想郷最凶。努力家でもあり、仲間のためなら自分すらも犠牲にする。が本人いわく「けがとかは気にしないけど死ぬつもりはさらさらない」らしい。

後なぜだかわからないが幻想郷の住人いわく彼には嘘などがつけないらしく、胡散臭いといわれる紫ですら彼と話しているときは胡散臭くないそうだ。

そしてやっぱり鈍感。それなりに性に興味はあるが相手が嫌がることはしたくないので表だっては出さない。

主な使用武器はナイフの七ツ夜。一応ほぼすべての武器が使用可能でナイフ投擲技術なども高い。素手による格闘も美鈴との組み手得意としている。

首に制服等で隠れているがひし形をした結晶のついたネックレスをいつもつけている。

この結晶は『刹那』と明久は呼んでおり、武器に変化する。

yu - za - ga - rō - tonさん作です

> . i 3 7 4 6 4 — 4 2 5 1 <

番外 キャラ紹介 吉井明久（後書き）

書きなおし、追記ははしていく予定です

第25話 ▲クラス戦5 メイドと執事？（前書き）

分割
後アンケートあります

第25話 Aクラス戦5 メイドと執事？

s.i.d.e 妹紅

古文

Aクラス 十六夜咲夜 613点

VS

Fクラス 吉井明久 684点

いや～やつぱり高いな…

咲夜の召喚獣だか外見はメイド服に犬耳と尻尾である（いぬせくや

「な、あ…あり得ない…」

「あの馬鹿の代表が600オーバーだと！？」

「ふ、不正じや…」

驚くのはいいが、最後の一入覚えてろよ？

「…藤原、どういう事だ？」

「見たまんまだ」

「でもアキがあんな…」

「明久は八意先生に勉強を昔から見てもらつてたのよ

「みんな馬鹿だの何だの言つてるけど、明久私達の中で一番頭良い
んだよ？」

「…」

信じてないな

「…ならなんで隠してたんだ？それになんで今更…」

「別に隠すんじゃないくて目立ちたくないかっただけだろう」

「今日咲夜と本気でやると約束した、って言つていたわね」

「？あの一人一言も喋つてないぞ？」

「大体なら視線で会話出来るし」

「視線だけで…」

…羨ましいのは分かるが明久に殺氣むけるな…

s i d e 明久

！？な、なんか美波達から殺気が…

「やはり明久に勝てませんでしたね」

「いや点数がすべてじゅないし分からなによ

紫を見ると扇子を閉じた…合図だね

「じゃあ」

「始めるようか」

「「イリュージョン…」」「

召喚獣が光になり僕達を覆い尽くす。そして光が消えると僕達の見た目（服等）は召喚獣と同じになつていった。

「召喚獣との融合か…」

「結構違和感あるわね…」

「動いて慣れよう」

「では、5試合目を開始します」

દ્વારા મનુષીઓ

「スタイルチェンジ！」

吉井明久 584点

光が僕を包み、手には七ツ夜を持ち服は…

執事服だった

Г Г Г Г Г / / / / / / / / / / / /

何でさ：

第25話 Aクラス戦5 メイドと執事？（後書き）

明久の幻想郷での話ですがこの作品の番外編見たいに書くか、別投稿で書くか投票してください

第26話 Aクラス戦6 人間最強▽Sありゆる意味で最凶（前書き）

時を止めるつてある意味人間最強ですよね

第26話 Aクラス戦6 人間最強▽Sあらゆる意味で最凶

s.i.d.e 慧音

とりあえず言いたい

「 「 「 戦う執事とメイドですね」 」 」

ん? どうも皆と意見が重なったようだな
紫いわく周りに被害はいかないように結界が張つていいらしいが心
配だな・・・

「・・・あれ本当にアキなの?」

咲夜と切り合つてる明久を見て島田さんがつぶやいた

「あの二人は獲物が似てるからね~結構仲いいんだよな・・・」
「そうね、あの子たちたまに昔なじみじゃないのかしらと思つべ
り息あつてるものね?」
「え? ハ意先生どういうことですか?」

永琳の言葉に姫路さんが質問した

そうだつたなこの子たちは知らないのか

「十六夜さんが吉井君にあつたのは中学生くらいの時なんですよ
「そうね」
「そう言えばその時くらいからハ意先生、明久に医学と勉強を本気
で教え始めたんでしたっけ?」
「まあ上白沢先生と一緒にですけどね」

「今でも見ていますが、八意先生には勝てませんがね」「えつどどういづことなのじゃ？」

「あ、貴方達は知らないんだつたわね。八意先生は・・・天才といわれるほど秀才なのよ?」

月の頭脳といわれるくらいだからな

「…………天才」」」

「医学もさることながら学者としても優秀。JUJのシステムの管理等も行つてゐるわね」

((((() の人なんで保健医してんのだ?))))

「ちなみに保健医をしているのは吉井君のためだからよ?」

「…………またなのか!? やはり処刑を…………」

その意気込みを勉強に向けてほしいものだ・・・

「しかし明久達動き悪いな」

「多分体を慣れさせてるんじゃないかしり?」

「おひまで藤原、今何て言つた?」

「だから動き悪いなつて言つたんだよ」

「な、あれでか!?」

まるで舞うようにナイフをぶつけあう一人・・・しかし

「確かに。吉井君、十六夜さんに慣れさせるためでしおうね。手を抜いてますね」

「え、十六夜さんが手を抜いてるんじゃなくてアキが手を抜いてるの!?」

JUJの仲たちの中での明久の扱いとはどんな物なのだろうか・・・

「・・・・・二人が止まつた」

みたいだな・・・あれば・・・

『『さあ、始めようか（始めましょう）！・・、楽しい死愛を！・・』』

「！！慧音、幽香、永琳！・！」

「分かつてゐるわ！・！」

「急ぐぞ永琳！・！」

「ええ！・！」

明久・・・本氣でやりますぎるなよ？

s i d e 明久

結構打ち合つて、動きに慣れ始めたころ

十六夜咲夜 572点

VS

吉井明久 572点

「明久、もう結構慣れたし点数も同じみたいだからそろそろ本氣でやらない？」

「そうだね～あんまりちゃんとやつてたら後がつつかえちゃうもんね」

後一試合あるし、もう結構動けるから問題ないでしょ

「いぐょ・・・？」
「ええ・・・」

「「わあ、始めようか（始めましょう）！――、楽しい死愛を――。」

同時に僕たちは数本のナイフを投擲、そしてそれに突っ込むナイフが弾きあうのは分かり切ってる。所詮これは日くらまし

そして近くで対面した僕たちは

「ふつ！――」
「はあ――」

『キンシ――』

互いにナイフを相手に向かって切りはらつた

s.i.d e 妹紅

『パウチ！――』

「――「う、うわあ！――？？」
「ふう、間に合つたみたいね」
「そうだな」

私と幽香はFクラス、永琳はAクラス、慧音は教師陣、紫は高橋先生と学園長の盾になるように前に出た。あ、FFF団だつけ？吹き飛んじやつたな、まあいいか

「な、なによこれ！！」

「ん？ 気当たりだよ」

「な、気当たりだと！？」

ま、明久のだらうけどね。 . . . 結構ストレスためてたんだね . . .

・

「なんでお前ら平氣なんだ！！」

「それは感じ慣れてるからに決まってるじゃない」

「そそ。だからお前らの盾になつてる」

「なんというかマンガみたいじやのう . . . ！－！」

「確かにそうですね . . . 」

「（）まで口きけるなら大丈夫だろ。明久 . . . 勝てよ . . .

s i d e 明久

僕と咲夜は縦横無尽に駆けながら切り合つ

「・・・遅い！－！」

「！？」

— 閃鞘・七夜 —

僕は急加速をし懐から斬りかかるも

「させません！－！」

どこからともなくナイフが現れそれを妨害する

ナイフの設置と制御、咲夜の召喚獣の腕輪の能力は指定した場所にナイフを設置したり、ナイフの動きを制御する能力みたいで厄介だがいつものことなので気にしない

僕は壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら咲夜に切りかかり、咲夜はナイフの投擲と腕輪の能力を駆使し時には自分の時間を早くしてものすごい速さで突っ込んで切りかかってくる

「ふふ、やっぱりあなたとの戦いは楽しいわね」

確かに・・・でも隙だらけだよ

「切り裂くーー！」

一閃鞘・一拾掬威一

僕は急接近して咲夜に掴みかかり、逆手で僕側に切り払い、掬うように切り上げしゃがむようにナイフを流した・・・これならしゃがむことにより相手の視覚から消えたように見え反撃はできない

「くつーーー！」

しかし咲夜も喰らって終わるわけではなく、受け身を取りながらナイフを投げてきた

「ちつーーー！」

こつちが相手の点を削れば相手が、相手が削ればこつちが・・・

「幻符「殺人ドール」！！」

咲夜はナイフをばら撒き、そのナイフは咲夜の周りを回っていたかと思つと僕に向かつて飛んできた

「散れ！！」

一閃鞘・散華時雨一

無尽蔵にやるようみえながらも僕は正確に刺突でナイフ落としていく。ちっ！－何本か落としきれなかつたか－－

「斬刑に処す！－！」

一閃鞘・八点衝一

僕は咲夜に向かつて無尽蔵に斬撃をばら撒く

「くつ！－？傷符「インスクライブレッズンウル」－

咲夜もそれに対して斬撃で対応してくるも数発かは当たる

「時符「イマジナリバー チカルタイム」－

そう咲夜が宣言した瞬間大量のナイフが現れる。

僕はそれを避け、時には弾き、潜り、飛び越えながら咲夜に近づき

「遅すぎるんだよ！－！」

一閃鞘・一風一

肘鉄を当て投げ飛ばした

「つ・・・光速「C・リコシH」」

な、くせこの狭い空間じゃあればきつこけど

一閃走・水月一

僕は反射しながら来るナイフのタイミングをずらすために壁、天井ありとあらゆる場所を駆け抜けながら避けるも最後の最後で力尽きてしまう

「・・・やっぱ避けきれないね」

「・・・それだけ避けられれば十分だと思つんだけど」

鍔すり合いでしながら互いに点数を確認する

十六夜咲夜 112点

V S

吉井明久 109点

微妙に負けてるな・・・

「咲夜、もう点数も時間もきついし次の一撃を最後にしよう

「そうね。明久・・・」

「なに?」

「勝つたらひとつ願いを言つてもいいかしら」

「うん、出来ることならね。でも・・・」

「勝たなきや意味がない」

僕達は距離を取る・・・

僕は水月で〇からトップスピードに入り咲夜に接近する

「・・・・・！幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」」

咲夜の周り全体を襲うようにナイフが飛び交う

「・・・・・」

しかし僕はあるで慣性の法則を無視したかのように急停止した

「なっ！？？」

急停止したことにより予想が外れたのだろう、ナイフは本来僕がいるはずだった目の前を通り過ぎる。

僕はまた高速で接近にしながら消えさせた。そして

「・・・・え？」

「なっ！？」

周りからの驚愕の声・・・そう周りや咲夜には僕が『2人』に見えているのだろう・・・

「・・・弔鬼八仙、」

一閃鞘一

地に伏せるように疾走する僕と、上空を飛ぶよつて舞う僕から同時に咲夜に向かつて斬撃が放たれる

「無情に服す・・・」

—迷獄沙門—

咲夜は棒立ちになり・・・僕は蹲るようにして現れる

「あつ・・・」

十六夜咲夜 0点 戦死

「し、勝者Fクラスです・・・」

静まり返った教室に高橋先生の声が響く・・・

あ・・・やばいな・・・意識が・・・この頃まともに自主練できなかつたし、フィードバックの影響かな・・・

僕はそのまま闇へと落ちて行つた・・・

第26話 Aクラス戦6 人間最強∨Sあらゆる意味で最凶（後書き）

咲夜と明久の試合でした

ちなみに死愛は誤字ではないのであしからず

捕捉で永琳は明久に永夜变以降から勉強等を見ており、一応その前から知り合い程度には関係を持つていました

第27話 Aクラス戦7 そして・・・（前書き）

明久の氣絶した後のお話、そしてまさかの幽香の弱点が！？

第27話 Aクラス戦7 そして・・・

・・・あれ？・・・またなんか後頭部に柔らかい感触が・・・

「う・・・ん・・・」

「あ、吉井君起きましたか」

「・・・慧音？」

「・・・まあ、上白沢先生と言ことなさい」といひすがいいで
しょ」

上から慧音が覗き込んでくる・・・あ～膝枕か・・・

「えつと、咲夜は？」

「今そこで八意先生から治療を受けてますよ。あ、噂をすれば・・・

「明久、大丈夫かしら？」

「大丈夫だよ。ところで実験はどのよう?」

「中止よ。いくらなんでも生徒が怪我するんじゃ危ないじゃないの」「しかし、学園長「はあ、こりやだめさね」と言つて吉井君達に労
いの言葉も謝罪もせず帰るなんて・・・」

「ホントお話を必要かもしれませんね、あの人」

（（頑張つて生きてください、学園長））

なんだか横がいわといなと思い見てみると

「邪魔しないで！－幽香、アキに説教をしなきやなんだから－－！」

「そうです、妹紅ちゃん！－吉井君とお話できません！」

「－－－－異端者には死を！－死を！－－－－」「－－－－

「ねえ、明久・・・・・」

「言わないで、咲夜……」

あいつらに労いという物はないのだろうか……あ、幽香と妹紅が切れて吹き飛ばした

「では6人目の方をお願いします」

高橋先生、冷静なのはいいですが止めてください

「じゃあ風見頼んだ」

「仕方ないわね……」

「幽香……」

「明久は休んでなさい。妹紅があれば止めてるし、最悪の場合八意先生も止めてくれるでしょ？」

「ふふ、当たり前でしょ」

「……がんばってね」

「行つてくるわ」

Aクラスも誰が行くか決まったみたいだね

「では、教科はどうされますか？」

選択権はAクラスだ

「社会で」

・・・社会・・・・

「やばい……」

「何がやばいんだ明久」

雄一復活してたんだね。それより

「いや幽香にはその・・・弱点があつて・・・」
「では始めてください」

今回の社会のテストは「ある物」が大半を占めていた・・・それは・
・

社会

Aクラス 佐藤美穂 301点

VS

Fクラス 風見幽香 189点

「幽香は社会の倫理が大の苦手なんだ・・・」

「「「え?」「」「」

ある程度幽香も召喚獣は使えるけどあの点数だときついわけで・・・

「勝者Aクラス」

「ごめんなさい・・・」

「大丈夫だよ、今度から一緒に頑張って勉強しよう」

「・・・そうね(一緒に・・・か//)」

「それでは7回戦を始めます。代表者は前に出てください」
「俺の出番だな」

今3対3・・・」の試合で決まる・・・(起き上がろうとしたが永

琳に止められたためまだ膝枕中

「科目は？」

「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

「分かりました。そうなると問題を用意しなければなりませんね。このまま待っていてください」

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル、満点確定じやないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ」

雄一がいつたん戻ってきたので

「坂本、負けたら承知しないからな」「みんなの努力無駄にしないでね」「が、頑張ってください」「当り前だ」

さて僕からは

「雄一……」「なんだ？ 明久、いい御身分だな」「からかわないで、勉強してきたよね？」「ふつ、大丈夫だ」

「準備が出来ましたので、代表者は視聴覚室に来てください」

高橋先生の呼びかけに答えて、雄一と霧島さんが教室を出る。

「試合状況と問題内容がそちらのディスプレイに映されますので、代表者以外の生徒はそちらを見てください」

これで確認できるってわけだ

「不正行為は失格となります。良いですね?」

「……はい」

「わかっているさ」

「では始めてください」

ディスプレイに次々と問題が映されていく・・・

次の（　）に正しい年号を記入しなさい。

・

（　）年 大化の改新

あつた・・・

「あつた……あつたぞ!」

「じゃあ、ウチらの卓袱台が……」

「俺たちの勝利だ!」

「――うおおおおおおおお――」

・

「どうしたのかしら? 明久」

「いや・・・雄二つてさ中学校時代『悪鬼羅刹』って言われててね

・・・にあわねえな」

「それで勉強をしてなかつた人間が点を取れると思う?」

「無理ですね、普通は」

「でもさつき明久君の質問には返事してたわよね？」
「八意先生・・・多分あの大丈夫は・・・」

あ、結果が表示された

日本史 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄一 53点

「勉強しなくても大丈夫だつていう意味だよ」

やつぱりか・・・

「4勝3敗でAクラスの勝利です！」

「.....とまあこうなる」

「ふふふ」

「あははは」

一人が怖い・・・

こうして僕達Fクラスはちゃぶ台がミカン箱になつた。

第27話 Aクラス戦7 そして・・・（後書き）

次回、雄一の処刑

第28話 Aクラス戦戦後対談 そして幻想入り？（前書き）

いや～もう△▽が10万行きそうだ‥‥

第28話 Aクラス戦戦後対談 そして幻想入り？

「……雄一、私の勝ち」

「……殺せ」

「フフフ、いい覚悟ね・・・」

「ハハハ、カンタンニシネルトオモウナヨ」

「幽香、妹紅おさえて」

僕は幽香と妹紅の前に出て抑えた

「大体53点つてなんだよ！？これが0点とかだったら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この中途半端な点数だと！！」

「いかにも、俺の全力だばあつ！？！」

「雄一も威張るな」

いかん妹紅の言葉に威張るように雄一が返事したからつい足が・・・

「……でも危なかつた。雄一が「所詮、小学生の問題だ」と油断していなければ負けていた

「言い訳はしねえ」

「明久の予想道理なのね」

「明久コイツ本気で燃やしちゃダメ？」

「妹紅ダメだから押さえて、ね？」

「む？」

〔冗談にしても全然笑えない〕

「……所で、約束」

「…………！（力チャカチヤカチヤカチヤカチヤ！）」

「ナニ、ミシシッターハー。」

「照明、スタンバイOK！」

「おい、そこ」のレフ板持つてこい！」

「なんかこいつら見ると頭が冷えてきたよ・・・」

「おひる」

ホントなんでこんなのがないんだろう・・・

「分かつてゐる。何でも言え」

「さあそれじゃあ

雄一、私と付き合つて

『五經傳』卷之三

「明久の予想道理つてわけね」

た
た

「確か」

研力社

「……私は諦めない。ずっと雄二の事が好き」

「アラビア語の歴史」

「……私には雄一しかいない。他の人なんて興味無い」

「拒否権は？」

無い。約束だから、トントン行べ

「ちよー!? ちよりと待てー!」

霧島さんが雄一の襟首をつかみ引きずつていくと・・・

「ちよつと霧島さんいいかしら?」

「何？」

ΓΝΩΣΙΠΑΠ

「……………」

「ええ、そうしたほうがいいわよ」

• • • •

「あ、私の名前は風見幽香よ」

一 風見、いい人ありがとう

「おいたしおじ」

卷之二

「誰」

「・・・・なんだと・・・・?」

すると霧島さんは雄一を立たせ腕に抱きついた

ג' ע' י' ט'

「ちょ／＼腕放せ！！」／＼＼＼＼＼

『ガラガラ、バタン』

「幽香なんて言ったの？」
「内緒よ。しいて言うならちょっととしたおせつかい

フム・・・ 女の子とは分からぬいな・・・

「…さて、お遊びの時間は終わりだ。Eクラスの諸君」「あ、こんにちは鉄人」

「鉄人ではない、西村先生と呼べと言つてゐるだらう藤原」「どうしたんですか？こんな時間に」

もう放課後だ

「おめでとう。お前達は戦争に負けたお陰で、担任から上白沢先生から俺に変わるそつた。これから死に物狂いで勉強が出来るぞ。ちなみに上白沢先生は副担になられた」

「「「「「え、ええええ！……？？」」」」

なるほど

「いいか。確かにお前達はよくやつた。学年最低ランクであるFクラスがここまでやるとは正直夢にも思わなかつた。だがな、いくら『学力が全てでは無い』とは言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つになるんだ。それが現実だ。全てでは無いからといって、蔑ろにして良い物ではない」

「とりあえず吉井と坂本は念入りに監視…と言いたいところだが吉井に関しては補修も免除だ」

「「「「「な、なんですか…」」」」

「たしかになんでですか？」

「吉井と藤原、風見の補修に関しては八意先生が受け持つてくれるそうだ。あと監視については俺はお前を信用してゐるからな」

やつぱり鉄人は僕が観察処分者になつた理由を引け目に感じてるのかな・・・

「取り敢えず明日から授業とは別に補習の時間を一時間設けてやるう

「「「横暴だあああ————」「」」

「黙れ！只でさえお前達は試召戦争で本来受けるべき授業が大量に潰れてるんだから当然の措置だろ？が！休日まで補習漬けにしないだけありがたいと思え！」

「さあ～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は前に言つてた駅前のクレープでも食べに行こうか」

「え？ ちょっと美波？ 何でいきなりそんな話に…？」

「だ、駄目ですっ！ 吉井君は私と映画を観に行くんですつ！」

「ええっ！？ 姫路さん、それは話題にすら上がつて無いよ…？」

「はいっ！ 今決めました！」

「なつ・・・・・」

『ガラツ』

「　　「ん？」　　」

「あ、明久いたわね」

「咲夜？ どうしたの？」

「その・・・ 明久様、今日お嬢様がお食事会を開きたいそつで参

加いただけませんか？」

「え？ レミリアが？ うん、大丈夫だよ」

「あと風見様達も・・・」

「なら行こうかしら」

「私も。じゃあ永琳と慧音には私が伝えとくよ」

「ありがとうございます」

しかしレミリア達と会つのも久しぶりだな・・・

「それと・・・」

「？」

「明久今日の試合では私が負けたから命令権は貴方にあるわ」

「…………な、なんだとー?」「」「」「」「」「

「アキ~」

「吉井君・・・」

「ハイハイ、貴方達は黙つとこうね~」「

う~ん。あ、そうだ

「じゃあさ、今田の食事でパエリア作つてよ
・・・それでいいの?」「

「うん」

「・・・心をこめて作るわ

「楽しみにしてる」

「後、買い物手伝つてほしいのだけれど・・・
構わないよ、じゃあ行こ~」

「な、まつ・・・」

「ハイハイ邪魔しない」

「じゃあ幽香たち後で」

「わかつた(わかつたわ)」「

「(つして僕と咲夜は買い物をして・・・

ある丘

「さて集まつたかしぃ?」

紫が確認をしてくる。

僕、妹紅、幽香、慧音、咲夜。永琳は事務処理と学園長の教い・・・

お話をのために無理だそ�だ。

「うん、みんないるよ」「よ

「では幻想郷へごあんない」

そして僕達は隙間へと入つて行つた

第28話 Aクラス戦戦後対談 そして幻想入り？（後書き）

ちょっと霧島さん修正。

だってあれは見ててかわいそなんだ・・・

次回紅魔館でのパーティです

第29話 紅魔館の人々？ ステミタックルは致命傷になります（前書き）

紅魔館お食事会編です

曜日ですが金曜日とこいつことになつてます

では、どうぞ

第29話 紅魔館の人々？ステミタックルは致命傷になります

隙間を通り僕達は紅魔館の門の前にいる。（紫は寝るそうだ）

妹紅、慧音、幽香は一回家に戻るらしい。

紅魔館の門・・・そしてそこには・・・

「・・・ZZZZZ」「

「・・・・・・・」

「・・・・・（チャキッ）

『ヒュツ、トスツ』

「あ痛！？」

「何寝ているのかしら・・・」

「さ、咲夜さん・・・」

彼女は紅 美鈴。紅魔館で門番をしているのだが・・・正直来たときはたいてい寝ている・・・

「明久、先に入つてお嬢様にあつてきて。私は彼女と話があるから・・・」

「あ、明久くん助け・・・」

「えつと、わかつたよ」

「明久くん！？」

「めん、庇いようがないんだ・・・

紅魔館主の間

「ひさしひりね、明久」

「そうだねレミリア、少しは背のびた?」

「こきなり雰囲気壊さないでくれないかしらー?」

この子はレミリア・スカーレット。紅魔館の主で吸血鬼である。
しかし……ほんと小さにな……

「明久……すげい不快な気分になつたんだけど……」

「えっと……れみりあ」

「うへへ」

「……」

「……はつ、な、なんで今を……」

「え? 咲夜から買い物の時にやつてみたり? って言われたから……」

「咲夜……! ? ? ?」

うん何となく咲夜がかわいいって言つた意味がわかつたよ

「うへ知られたからには……」

「え? ちょっと!? 何槍構えてんのさー?」

「明久殺して私も死ぬ……! !」

「どこのヤンデレ発言……? ? ?」

音声のみでお楽しみください

「逃げるな……! !」

「逃げるに決まってるでしょ……! !」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』……」

「うわつ……?」

「な、殺すなんて卑怯よ！！」

「いや、当たつたら危ないからねー！？」

数分後

「すみません、お待たせしました・・・って何ですかこの状況・・・

「おつかれ・・・咲夜」

「」

部屋は荒れ、レミリアは僕の髪をいじって遊んでいた

「ちょっとレミリアが暴走してね・・・」

「は、はあ・・・そう言えばお嬢様明久様に何かお話が・・・
「・・・あ、そうだったわ。明久今からパチエのところに行つ
てくれないかしら？」

「？いいけど」

「用意ができましたらお呼びしますね」

さて図書館つと

少年移動中

紅魔館地下の大図書館

目の前には崩れた本の山・・・
？気配が・・・って！？

「・・・なにこれ・・・」

「ちょ！？パチュリー！？今助けるからーー！」

本をのけること数分

卷之三

とがあえず隙間から医療セミナーを取りだし……

卷之三

「明久？来てたのね」

うん、とりあえずシッナはるから動かないでね」

「アーティストによるアーティスト」

「・・・魔理沙が来てたのよ・・・」の頃また借り癖が悪くなつて

二二九

「あ、明久？」

「うん? 何かな? ちよ」と魔理沙はじけておねね

「あ、パチュリー話つて？」

「あ、魔道書のことなんだけど……」あ持つてきて

あ、こあやつと気がついたみたいだね
このあと僕達は麓道書の解析をしていった

「ありがとね明久」

「いやいいよ」

「明久様、パチュリー様食事会の準備ができました」

「うん、わかつたよ。ほらパチエリー」

「・・・なにかしら？」

「足、まだ痛いでしょ？おぶつてつてあげるよ

「・・・・お、お願ひするわ／＼／＼／＼／＼」

ロビー

「あ～き～ひ～さ～」

いきなり黄色い物体が・・・

『ドドドッ！』

「ゴフッ！」

鳩尾あたりにステミタックルをかましてきた・・・ぐつ・・・パチ
コリーを背負つてゐから倒れられない！！

「や、やあフラン久しぶりだね」

「うん...」

僕に抱きつきながらにこにこしている少女・・・フランドール・ス
カーレット。僕は時々思う・・・果して彼女を救えたのだろうか?
と。でも彼女に会うとそれも杞憂だと実感する。

「さ、今日はお食事会だしそれが終わったら一緒に遊ぼうか？」「やつた～」

「うして食事会が開始し、咲夜のパエリアの出来に驚き、幽香がレミリアを弄っているのに参加し、慧音がハクタク化してちょっと混乱し、みんなで人生ゲームをして僕とフランチームが優勝し楽しんだ。」

そして就寝・・・部屋全体が赤くて目が痛かったです・・・

第29話 紅魔館の人々？ ステミタックルは致命傷になります（後書き）

おまけ

紅魔館朝

「・・・・・」
「・・・・・すう・・・」右 パチュリー
「・・・・うにゅ・・・」左 レミリア
「・・・あきひさ・・・」上 フラン
「・・・なんか前にもあつた氣が・・・」

第30話 町の人々 森と人形使い？（前書き）

PV10万達成。早いのか分からぬけど・・・現代で土曜日のお話
ちなみに記念短編は書きます

第30話 町の人々 森と人形使い？

朝・・・門の前に二つの影・・・

「・・・・ふつ！…」

「・・・・しつ！…」

僕と美鈴は組み手をしていた・・・

「ふう、ありがとうございました」

「いえいえ。しかしそろそろ本気で抜かれそうですね・・・」

「あははは、じゃあ頑張って抜かないとな」

「ふふ、そう簡単に抜かれませんよ」

「さ、そろそろ朝食だし行くかな」

食事中

「さていろいろとありがとうございました」

「また遊ぼうね～あきひさ」

「ではまた学園で」

「また来なさいよ」

「何かあつたら連絡するわ」

僕は町へと向かった

町（てか村）

「お、明久じやねえか久しぶりだな」

「あ、おじさん久しぶりだね」

「明久君、妹紅ちゃん達とは仲良くしてる?」

「はい」

村に入るといろいろな人が声をかけてくる
ん?あれは・・・

「靈夢、魔理沙」

「あれ? 明久じやん」

「明久帰つてきてたのね」

まず巫女服の少女が博麗靈夢。博麗の巫女で妖怪退治と異変解決を
仕事としているが・・・めんどくさがりでもある。そして・・・

「靈夢、ちゃんとご飯食べてる?」

「・・・ちゃんと仕事して食べてるわよ・・・」

一時何もしなかつたために瀕死になりかけたりしていた

そして黑白も少女が霧雨魔理沙。自称普通の魔法使い。この二人は
昔から異変解決時一緒に解決してきた仲間だ。

そういうえば魔理沙には悪いとこもあって・・・あつ

「そう言えば...魔理沙・・・」

「ん?・・・どうしたんだぜ? 明久(なんだらう・・・冷や汗が・
・)」

「(・・・なんだか帰りたくないなったわ・・・)」

「また・・・借り物癖悪くなつてきてるみたいだね・・・」

そう魔理沙は昔から物借り癖は悪かつたが一時「死ぬまでの間借り
ているだけ」と言い泥棒まがいな借り方をしていた時期があり・・・
・（その後それを知った明久はぶち切れた）

「どうもまた・・・ムカシモドッテキテルミタイダネ？」

「え、そ、その・・・」

「オハナシ、シヨウカ？（ニコツ）」

「―――――愁傷様です」――――

「いやああああああああああああああ――――！」

「もう、借りた物はちゃんと返すこと、そうすればまた貸してくれ
たりするんだから」

「・・・はい」

「わかったね？」

「ごめんなさい・・・」

「（やつぱり明久は怒らしちゃダメね・・・）」

「なんだかすごい悲鳴が聞こえたのだが・・・」

「？あ、藍久しぶり」

「久しぶりだな、明久」

「どうしたの？」

彼女は八雲藍。紫の式神で九尾狐、昔は丁寧語で僕がため口でいい
と言つたのでため口で話している。ただしたまに丁寧語になる。

「あ、紫さまから伝言があつてな

「僕に？」

「ああ、実は・・・・・・」

ふむ・・・・・なら行くとしたら魔法の森かな？ いるといいな・・・

少年移動中

魔法の森

・・・いるといいんだけど・・・

『コンコン』

「どうやら様？ って、明久どうしたの？」

「うん、ちょっと用事があつてね。今大丈夫かなアリス

「ええ、紅茶入れるからあがりなさい

「ありがとう

彼女はアリス・マーガトロイド。魔法使いで人形使いとも言われる。

「で、用事つて？」

「あ、紫から現代入り許可が出たつて・・・」

「ホント！？」

「ほ、本当だから落ち着いて・・・」

外での技術とかいろいろと興味があるじしく、紫に頼んでいたらし
い。藍の言伝はこれの許可だそつだ。

「えっとなんか条件があつて

「何かしら？」

「1、吉井明久の近くにいること。2、学園教師という形で入ること。3、能力制限をつけること」

1は安全策らしい。2は多分生活手段でだろう。

3に関しては幻想郷の住人は現代の人間からすると当たり前だが力が強く、もしものことがないように制限がかけられている。外す方法は僕が紫が許可したときだけみたいだ。

「わかったわ。（学園で明久の行つてる学園か・・・生徒じゃないけどいいか）」

「じゃあ用事も終わつたし・・・」

「帰るの？」

「いや久しぶりだし話しそう」

「そうね」

この後家の帰りつくと・・・慧音が隅で蹲っていた・・・ごめん帰る時間言つてなかつたね・・・

泣きつかれながらそう思つた・・・

第30話 町の人々 森と人形使い？（後書き）

10万記念・・・明久の観察処分者になつたわけを書く予定です

第31話 太陽の畑（前書き）

・・・うんスペルカードがわからん

第31話 太陽の畑

「あやや、明久君ではないですか」

村を歩いてると下駄を履いた少女から話しかけられた

「あ、文。久しぶり」

彼女は射命丸 文。天狗であり、本来は1000年近く生きている最高クラスの妖怪なのだが、戦闘は好まず新聞記者をしている。あと羽だと思っていたがあれは羽毛らしい・・・

「あ、そうだ。文、はいこれ」

「なんですか?」

「現代での記事と、シャーペンと手帳後カメラ」

「おお、これはまたありがとうござります」

「いいよ、気にしないで」

「しかし現代も楽しそうですね・・・」

「来たいの?」

「いけたら行つてみたいものですが・・・あ、明久君?間違つても大天狗様のところに突っ込まないでくださいね!?前の時は本当に心配したのですから」

まさか考えを読まれるとは・・・

「あ、そうだもう少ししたら僕の学園で学祭があるんだけど来る?」

「学祭ですか・・・」

「一応紫に言つてみるけど?」

「では今回はじ厚意に甘えましょ。とにかく行くんですか

？」

「太陽の烟だよ。幽香との約束で
「それは呼び止めてすみませんでした」
「いいよ、ちょうど探してたし」
「ではお気をつけてくださいね～」
「うん、またね」

さて、行くかな

少年移動中

太陽の烟

「や、お待たせ」
「そうね、じゃあ始めましょうか・・・」
「だね」

開始と同時に幽香が弾幕をばらまく。

「なら僕も・・・」

僕は手の中の魔力で短剣を大量に作り出しそれを弾幕に向けて投擲した

普通の短剣なら意味はないが、これは魔力で作った短剣・・・

『ボンッ！！』

短剣が弾幕に当たると爆ぜ、連鎖的に爆発し幽香の弾幕を消し去った

「簡単にはいかないわね・・・なら花符「幻想郷の開花」

まるで花のように並べられた弾幕が敷かれる

僕はそれを避け、避けれない場合は魔法刃で相殺していく

「なら僕も行くよ刃符「散華時雨」

閃鞘・散華時雨を表すように魔法刃広範囲にばらまく

「さつきの貴方のやり方借りるわ

「え?」

「幻想」「花鳥風月、嘯風弄月」

「あ・・・」

互いの弾幕は相殺し合つ・・・あ、煙幕の役目か!!!

「しまつ」「捕まえた」!..!

「マスター・スパーク!..!」

こうして僕の負けが決定した

「今回は負けちゃったな~」

「持続戦になるとあなたのほうが有利だから速攻で決めさせてもらひ
つたわ」

「でもホントにこんなことでいいの?お願い

僕と幽香は太陽の畠で紅茶を飲んでいた。あ、クッキーもあるみたい

「いいのよこれで。昔を思い出せるからね」

「そういうや幽香と初めて会ったのもここだったね」

「・・・覚えてたのね」

「うん、大切な記憶だもん」

「そう・・・明久こむらへこむらしあい」

幽香は太股を指さす

「・・・え？」

「ふふ、昔みたいに膝貸してあげるわよ？」

「はは、じゃあお言葉に甘えようかな」

僕は幽香に膝枕をしてもらひながら…

「」の一週間楽しかつたけど疲れたや

「なら・・・おやすみなさい。帰る時は起こしてあげるから」

「うん・・・おや・・・すみ・・・幽香・・・『お姉ちゃん』」

「ええ、おやすみなさい」

僕は太陽の畠の優しい雰囲気のなか眠りについた…

由モ

その後由モに帰りつき、

「さて明日からミカン箱だな・・・」

「そうね・・・」

「そう思つと憂鬱だよな・・・」

「」

「あ、そうだ！！慧音」

「ん？なんだ明久」

「大掃除したいんだけどダメかな？」

「ううん、西村先生と相談してみよう」

「ありがとう」

さて、掃除でもすればそれなりに快適になるだろ

第31話 太陽の畑（後書き）

魔法刃＝魔力で作った短剣とつてください
短編でもすこし言つてましたが、明久は幽香のことと一緒に『幽香お
ねえちゃん』と呼んでいました。

明久が観察処分者になつた経緯です
クラスが違うこともあり、あまり東方組が出ないかも・・・

それは帰り道・・・
何となく幽香たちに何かプレゼントをしようと思つて、商店街を歩いていたら

「「これ買えないのですか?」

「お譲りやん、このお金じゃ無理だよ」

「うう・・・」

「ああ・・・じつしたらいいかな・・・」

人形屋で泣きかけの少女とそれを見て困つてゐるおじさんがいた

「どうかしたんですか?」

「いやね・・・この子がこの人形が買いたいそんなんだが、お金が足りなくてね。ほかのを薦めるんだが・・・」

「これじゃないとダメなんですか?」

「この一 点張りでね・・・」

そこには可愛らしい人形があつて・・・つて嘆息!ー!
さすがにこれは・・・

「おねえちゃんのプレゼントはこれじゃないとダメなんですか?」

「えつとどれくらい足りないんですか?」
「へ田だよ」

元の値段の半分くらいか・・・

一応お金はある」とこにはあるんだけど……ま�、すぐ質素に
るだけか……

「ちょっと待つてもうりますか?」

「?大丈夫だが」

僕は銀行に走りお金をあらした

「はい。これとこの子の出したお金で足りますよね?」

「ああ。だが坊主、いいのかい?」

「いいですよ」

「そうか、いい男だね~ちょっと待つてな包んでやるから

「えつと・・・」

「おねえさん喜ぶといいね」

「・・・ありがとうです、優しいお兄ちゃん

その子はうれしかったのだろう人形を抱えて走つていった。
ハア、質素に生きるかな・・・

キングクリムゾン!! 時間は消し飛ぶ!!

明日、親の仕送りがくる。それまでの辛抱だ

なんとか時折幽香や妹紅宅にお邪魔し空腹を耐えた・・・

「今日は持ち物検査をする」

「――――な、なんだと!?」「――――

あ~僕には関係ないか・・・

ふう、なんとか乗り切ったこれであとは夜家に帰つてご飯を・・・

「やばい見つかつたぞ逃げる！――」

「うん？」

「明久？・・・！――」

？雄一がいたんだ？

「明久荷物は俺に任せて逃げるんだ」

「え？何言つてるの？」

雄一は叫ぶと走つていった。うん？この足音は・・・

「吉井！――お前も共犯か――！」

「え・・・鉄人？」

急接近しこぶしを振り上げる鉄人

『「ゴツン！――』

あ、やばいこの頃まともにご飯食べてなくて体力が・・・

その後、鉄人には誤解は解けるも点数も悪く、よく雄一達とつるんでいた僕はあまり良く思われていたのか、観察処分するべきではないかという意見が上がった。

鉄人、慧音、永琳は僕を頑張つて弁護するも学園長はこれを聞き入れず・・・

「吉井、本当にすまなかつた・・・」

「いえ、いいですよ。日をつけられてたのは僕自身が悪いですし」

僕は紙見つめた・・・その紙には

『本校の吉井明久を本日より観察処分者とする』

こうして僕は、学園初の観察処分者となつた。

ちなみにその事件当日（鉄人によつて氣絶させられた日）の夜僕は永琳、慧音、幽香、妹紅からなんで相談しなかつたのかと説教を食らつた・・・
僕からすると観察処分者になるよりあつちのほうが辛い・・・

あら？なんか雄一がひどい扱いになつてるけど・・・まあいいか

第32話 手紙？ラブレター？よし殺やうー！ 1（前書き）

今回は
逃げる明久
追うバカ達
守る東方勢
でお送りします

第32話 手紙？ラブレター？よし殺やうー！ 1

朝、いつもならこの一人は紫達と共に、アリスのことについて話会いをするそうだ

しかし思つたけどアリスどこに住むんだろう…まあ、ない時はいつもでもいいけどね（ちなみにこのことについての話だったりする）

「うん？吉井か、おはよう」「あ、先生おはようございます」「藤原達はどうした」「なんか用事で・・・」「あ、すまないんだがグランドに「ゴールポストがあるんだが、校門近くまで運んでおいてくれないか？」」「分かりました」「すまないな」「いえ、観察処分者の仕事ですか」「・・・本当にすまない・・・」「だから気にしないで下さいよ、西村先生」「ああ、たぶん先生がいるはずだから西園はその先生に頼め」
僕は「ゴールポストを持ち上げ（先生等誰もいなかつたので素手で）校門まで運んだ
「・・・吉井、教師は居なかつたのか？」
「いやそれが・・・」
『ピンポンパンボーン』

『文月学園教師は至急職員室に集まつてください』

「あれが原因見たいですね」

「すまなかつた、もう行つていいぞ」

「はい」

僕は少し遅れて昇降口へ行き靴箱を開くと・・・手紙？

「うへん・・・？」

「これ・・・あ、ちょっと術式が書いてるな・・・

「どうしたんだ？明久」

「あ、おはよう雄一」

まあ、読むのは後でいいか

僕達は教室に入ると、その後すぐにチャイムがなり鉄人が入つてきて出席を取り始めました

「工藤」

「はい」

「久保」

「はい」

幽香たちの話いわく、アリスは咲夜と同じく幻想郷から通うみたいだ（紫にそれ専用の術を書いた札を一人は貰っている）

「坂本」

「…………明久がラブレターを貰つたよつだ」

「…………え？ちょっと何言つてんのさー？」

「「「殺せ……」」「」「」

雄二の一言にクラスメート達から殺氣が…

「お前らつー 静かにしろー！」

「「「はい……」「」「」

「それでは出席確認を続けるぞ」

「手塚」

「吉井」「ロス」

『ピクッ』

「藤堂」

「吉井」「ロス」

『ピクピクッ』

「戸沢」

「吉井」「ロス」

「…………どうもお前達は補習時間を延ばされたいらしくな

「「「いえ、めつわくも」」れこません！……」「」「」

「布田」

「吉井」「マジ殺す」

『『ブチッ』』

「藤原」

「お前が見極めでしるよな・・・」

「あら、妹紅それなら私も参加するわ」「ああ、いい

「では、勉学に励むよ!」

「「「「「先生助けて！-！-！」」」」

お前ら 勘違しそんな

「自業自得だ」

「……………」

確かに

「明久ラブレター もう見たのか？」

「いや、まだだけじ。てかワブンターじや。。。」

「明久君もう読んだ？」

何焦つてゐんだろうこの一人

「いや、お皿になつたら読む予定」

「… 明久 どんなの？」

「これは…」

(あ、幽香わかつた?)

(多分アリスあたりでしょうね)

妹紅は魔法関連がわからないみたいだが視線で話すと理解してくれた

「…………明久君、それが例の手紙ですか？」

「えつと・・・じつしたの？姫路わん」

田にハイライトがない・・・

「諸君。ijiはどいだ？」

「「「最後の審判を下す法廷だ」「」「」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」「」

「男とは」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの。」「」「」

「宜しい。」れより、FFF団による異端審問会を開催する

復活するのはやいね！？君達

「妹紅、幽香」「めん。ノートとか取つといで」

「わかつたけど、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

一閃走・水月一（ちよつと早さ抑え版）

『逃がすな！ 追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！』

『サーチアンドリースト...』

せめてデストロイして置おうよ！――

『待つてください明久君。お話がまだですよ』

『待ちなさいアキ！』

ある意味きみたちのほうが怖いからお断りします！――

「はあ、なんか逃げてばかりだな・・・」

僕はため息をつきながら窓から飛び出て壁を走るのだった

第32話 手紙？ラブレター？よし殺そうー！ 1（後書き）

鉄人は明久に対して原作よりは優しいです

第33話 手紙？ラブレター？よし殺やつー！ 2（前書き）

長くなつやつだったので分割

怒らない人を怒らせると、とてもなく怖いです

s.i.d.e 妹紅

明久大丈夫って言つたけど心配だな・・・

「あら妹紅、心配？」

「うん、あんな奴らでも明久って手加減したりするから・・・」

「そうね・・・」

「では授業を・・・つて藤原さん監さんは？」

慧音が入ってきた。あ、1限目歴史か

「実は・・・・・・・・」

少女達説明中

「・・・・・ハア・・・・ある程度は見逃していたけど・・・」

「うん、やっぱ心配だ」

「授業をさぼるだけでなく明久を殺しに行こうとま」

「「「よし、ヤリに行こう」「」「」

「あやつら生きていれるかのう・・・・」

恋する乙女とは時としてとてもなく恋ひじこ

s.i.d.e 明久

「吉井の野郎どーじだー!?」

「おい須川、A、D、F班がやられたそーだ」

なんとか罵にかけながら逃げてるけど・・・執念深すぎでしょーー!
??

「アキーデーなのよ」

「まだお話してないのに逃げるなんて」

いや、君達とお話する理由ないからね?

保健室とかAクラスとかに逃げ込もうにも待ち伏せがありいけなか
つた
くつ、罵だらりナビ屋上行くしかないか

「よお、遅かつたじゃねーか。明久」

「雄一.....!」

屋上のドアを開けると雄一がどや顔で立っていた。うわ・・・腹立つ

「雄一! 何で根も葉もない嘘で僕を不幸に貶めようとするんだ!」
「どうして? 決まっているだろ!.....」

雄一は何を今更といふ顔で答える。決まっている?

「明久、俺はお前の幸せが心底、大ッ嫌いだからだー!ー!」

「そりこや、そんなことひ言つてたね・・・

後ろから島田さんと姫路さんが鉄球とかを持ってつて現れる。あれ

? 二、殺す気なのか……彼女たちは

「アキ。じつへりはなしでもらつわよ?」

「大丈夫ですか？」

いや、聞く気ないでしょ！？

「諸君、何がどうだ？」

「最後の法廷だ！！」「

「黒竜香！」

「男とは？」

「おまえの心を察して、おまえの心を捨てて、おまえの心を生むがために」

卷之三

ちつ！！集合が早い！！

「…………黒崎君は許せないー

ムツツリ——・・・そうか！！彼の情報操作か！！

「死死死死死死」

「・・・・異端者には死を」

「あははははははは（大爆笑）」

•
•
•
•
•
•
•
•
•

ブチツ

「フフフ、あは、アハハハハハハハ

「「「「な、なんだ！？」」

「な、何よいきなり笑いだして！！」

「・・・・・おかしくなった？」

「さつきから聞いてれば殺しとかざりとか、なりやうれる覚悟はあるんだよなあ？（ニヤツ）

「「「「？」」「」

「え、え？」

「・・・・・（ブルブルブル）

「あ、明久？（あ、そう言えば藤原達が明久は自分達より強いつて言つてた気が・・・）

何みんな震えてるのかな～？

「遺言はあるかい？」

「「「「」」逃げていいですか？」」「」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・極彩と散れ

「　　「　　「　　「　　「　　あああああああああああああああああああ

！　　「　　「　　「

「はあ、案外大丈夫だつたみたいだけど・・・

「止めなきやよね・・・あれ

「私達で勝てるかしら・・・

「ちょっと微妙だな・・・

「場合によつては誰かが明久君にキスでもしてみたら？」

「…………なんでそうなる（の）…………」「
「伝承みたいに戻るかもしけないし、明久君ならなんか氣絶しそう
だもの」

永琳本当になりそつだからやめてくれ・・・」

「だつて前慧音がキスした時・・・」

「とりあえず、」

この後僕は咲夜たちによつて止められた。慧音、顔真っ赤だけどうしたんだろう？

手紙の内容だが、これからよろしくの意と学園と町の案内の頼みで
したとさ

第33話 手紙？ラブレター？よし殺やう…！ 2（後書き）

わてどうだつたでしょうか。

え？慧音の顔が真っ赤な理由？早い話頭突きつて・・・

第3・4話 新任教師と大掃除と駆け引き?（前書き）

友人との会話

友「なな、影月」（本名呼びですが変えてます）

影「?なんだ?」（ストーリ等制作中）

友「これさー8き・・・」

『バキツ』

影「なんか言つたか?」

友「調子に乗つてすいませんでした」

あの時、怒りに任せて殴つた私は悪くないと思つ!・!

第34話 新任教師と大掃除と駆け引き?

朝、緊急集会が行われ、新任教師の紹介が行われた

「アリス・マーガトロイドよ。担当科目は今回から新しくつけた召喚獣の操作技術について教えるわ」

「うわ～すげ美人」

「肌白～い」

「てか俺らと歳近いのかな?」

結構ざわついてるな・・・まあ仕方ないか。アリスの外見は金髪で肌の色は薄く、瞳は薄い水色。見ようによつては人形のような容姿をしているしね。

「以上、緊急集会を終わります」

Fクラス

「え～上白沢先生との話の結果、大掃除を行おうと思つ

鉄人の一言で始まつた大掃除・・・結果は・・・

「ダメだ・・・こいつ腐つてやがる・・・」

「こっちもだ

「てか、下の板まで腐つてね?」

悲惨だった。畳は8割方が腐つており、下の板まで腐敗し始めている・・・

「雄一……さすがにこれって……」

「ひどすぎだな……」

「よくこれで文句言われなかつたな……」

「……上白沢先生、八意先生呼んでくれませんか?」

「いいですよ」

さて……僕も準備するかな……

キングクリムゾン!!

ただ今僕達（永琳、慧音、幽香、妹紅）は学園長室前にいる。

「失礼します」

「あ、明久君さすがにノックしなさい」

「確かに失礼なガキだね」

「失敗する実験を手伝わせといてお礼や謝罪もしない学園長に対する礼儀なんて持つてません」

「……はあ、ところで何のよつだい?」

あ、ケンカ売るほうから先にしちゃつたや

「ただいま大掃除したところ畳は腐つており、下の板も腐敗していました。」

「それで?」

「ですので人体の影響を八意先生に頼んで見てもらつたところ、健康新を及ぼす可能性が非常に高いとのことですので、方針ということは理解していますが、せめて下の板と畳の交換の許可をもらいたくてきました。まあ畳に関しては中古等でも問題ありません」

「ふむ・・・」

学園長は悩むそぶりをする・・・実際悩んでないだろ?な・・・

「よしよし。お前たちの言いたい」とはよくわかつた

「では?」

「却下だね」

「なぜですか?」

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろこガキども。」「専門家が危険と言つてるんですよ?」

「だらうと方針だよ」

「生徒がどうなるうと関係ないと」

「なんと言おうとダメだね」

「ハア・・・」の手段はとったくなかったけど・・・

「分かりました。では今からPTAに訴えときますね?」「なに言つてんかい」

「いや、だつて『力チツ』」

『専門家が危険と言つてるんですよ?』

『だらうと方針だよ』

『生徒がどうなるうと関係ないと』

『なんと言おうとダメだね』

僕はボイスレコーダーを流す

「僕はちゃんとした理由、確認、証拠、対応を持つてきました。それをお針だからの一^ト張りで対応する様な学校を野放しにできると思いませんか?」

「・・・」

「誰も方針を変えるとは言いません。ただ中古でもいいから畳と板を変える許可をくれ、と言つてるだけです」

「・・・ちつ、分かつたよ。ただしその取り付けとかは「ijitachiでやります」まあ、じゃあもう帰んな」

「失礼しました」

僕達は学園長室を出た

「明久・・・」

「ん? びつしたの?」

「いやあれだと田をつけられるんじや・・・」

「せうだね~でも悪いのあっちだし」

「畳とかはびつあるの?」

「あ、それは」

僕は境界を開き探る・・・

「フイツシユ!-!-」

そして釣りあげたのは枕を持つた紫だった

「「「「・・・え?」「」「」

「あ、明久・・・なにかしら?」

「ごめんね。実は・・・」

少年説明中

「ハア・・・もうこいけど、いつやつて私を扱つのはあなたぐらじよ?」

「あははは

「とりあえず幻想郷で余つてゐる中古の畳と板を持つてくれればいいのね?」

「うん、お願ひね

「じゃあ、戻りましょうか

「私は戻るわね

「ありがとね、永琳

「ふふ、いいわよ

少年少女移動中

「といふことで、明日板と畳を取りかえることになったから

「・・・明久、お前何したんだ?」

「何もしてないよ? 雄二

「よしじやあ補習を開始するぞ」

西村先生も来たし席つくかな・・・ミカン箱だけど

「あ、吉井実は頼みがあるんだが・・・

「なんですか?」

「いや、本人からの依頼でな」

『ガチャツ』

するとドアが開いて

「失礼するわ」

「な、あれつて」

「確か新任のアリス先生

「きれいだな・・・」

「

アリスが入ってきた

「あ、明久居たわね」

「どうかしたの？」

「前案内頼んでたでしょ（第33話参照）」

「あ、そうだつたね。西村先生……「かまわん。それについて言おうとしてたからな」じゃあ行こいつか」

「「「「「ま・・・・」」」」

「ん？ま？」

「「「「また吉井がああああああああああああああ！」！」」」

「なんだ？ええ？貴様にはフラグ建築機でもあんのか！？」

「え？何言つてんのみんな！？」

「アキ・・・・」

「吉井君・・・・？」

「なに？ふたりとも。なんか怖いんだけど・・・」

「「お話いいですか（かしら）？」」

いや話する気ないでしょ・・・

「えっと・・・アリスごめん」

「え？」

僕はアリスを抱えると教室から逃げ出した

「「「「「「FFFF団の名に懸けて吉井！…貴様を殺す！…」」」」

「」

「待ちなさい！…アキ！…」

「待つてください、吉井君！…」

僕は逃げながら

「なんで僕頑張ったのに追いかけられてるんだろう・・・」

「／＼／＼／＼／＼」

一人愚痴るのだった

次の日、腐った畳と板は中古の（幻想郷製）畳と板になつた。

第3・4話 新任教師と大掃除と駆け引き？（後書き）

さて次回から本編に戻ります
まだアンケートは受け付けております。

第35話 清涼祭1（前書き）

うへん原作組一回でもいいから幻想入りさせようかな・・・

第35話 清涼祭1

暖かくなり、新緑の芽吹き始めたこの季節。俺たちの通う文月学園では、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。どのクラスも学園祭の準備の為のLHRの時間は活気に溢れている。

そして我がFクラスといふと・・・

「横溝！」

「勝負だ、須川！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやがる！」

準備なんてせずに校庭で野球をしてやがった

こいつら・・・なんでこいつこいつとここで協調性ないのかな・・・

「僕達だけでも決めよつか・・・」

ただ今教室にいるのは僕、幽香、妹紅、秀吉、美波、姫路さんそして・・・

「何にするの？明久」

なぜかアリス・・・

「なんでアリスがここにいるの？」

「慧音さんから貴方達を見るよう頼まれたからよ

慧音、貴女の心配は的中してしまいました

『貴様らーーー何をしているーーー』

『げつ！？鉄人が来やがった！！』

『に逃げろ！！』

「おまえがやつたの出来事か？」

「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」
「はあ・・・」

「さて。そろそろ春の学園祭、
『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ
いけない時期が来たんだが

雄二は教壇の上から俺たちを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。ちなみにさつき西村先生に全員連れてこられた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そ
いつに全権を委ねるので、後は任せた」

心底どうでも良さそうな雄一の態度。ぶつちやけ『そいつに全部押しつけて俺はサボる』ってことだろか？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田でいいか?」

どうやら実行委員は美波に決まつたらしい

「別にいけど・・・補佐つけていい?」

「好きにしろ」

「じゃあ・・・」

補佐候補

1：吉井

2：明久

・・・・・・・・

「どつちがいい?」

「ねえ・・・どつちも僕な気がするんだけど・・・」

「甲乙つけがたいな・・・」

「そうだな・・・」

「・・・「だつてどつちも、バカだし」」」

なんだろうか・・・みんなひどくないかな・・・

「はあ、これじゃ話が進まないわね・・・明久、私が進行するから筆記お願いしてもいいかしら?」

「え、?「分かったよ」あ、アキ!?!?」

アリスの言葉に美波驚いてるけど

「確かに決定を決めるならそっちのほうがいいわね」

「幽香何言つてるのよ!!--」

「あ～どうでもいいから早く進めようよ」

美波が幽香に食つてかかるうとするが、妹紅が制止する。ありがとう妹紅

「じゃあ何か案はあるかしり?」

アリスの声に何人か挙手する

「はい、えつと土屋君」

「……（スクツ）」

名前を呼ばれてムツツリーーは立ち上がった

「……写真館」

「写真館だね」

「次は、姫路さん」

「メイド喫茶……といつのはよくあるのでウエディング喫茶つてい

うのはどうでしょうか・・・?」

ふむ、やっぱ女の子つてそういうのに憧れるのかな?

「はい、須川君」

「ウエディング喫茶も斬新で良いが、ここは味勝負で中華喫茶はどうだ? 本格的なワーロン茶や簡単な飲茶を出したりするんだ」

「じゃあ、ある程度出たから多数決を取るわね。最初に・・・」

結果から言つと中華喫茶となつた

「では、次にホール班とキッチン班に分けます。ホール班は坂本君、キッチン班は須川君の方に行つてね」

「僕どうしようかな・・・」

「うーん明久料理うまいしね・・・」

「時間」とで両方したらどうかしら」

「「「なるほど」」」

「あれ、康太もキッチン班？ 料理できるの？」

「……紳士の嗜み」

絶対違うな・・・

「あつ、それじゃあ私はキッチン班に・・・」

「姫路はホール班に決定済みだ」

「そうね、貴女は調理台に立っちゃダメよ」

「ど、どうしてですか！？ 私、料理が好きなのに！」

「なんである子あんなに言われてるの？」

あ、アリス知らないんだっけ？

「姫路さんはね、前酸味が足りないからって・・・硫酸を入れたんだ。料理に」

「・・・姫路さん」

「なんですか？アリス先生」

「貴女はホール班で決定よ」

「な、なんですか！？」

「さすがに私も死者は出したくないの・・・」

「先生ひどいです！？」

いや仕方ないと思つ・・・

「私もホールにしようかな」

「おねがいね、美波。ただでさえ女の子少ないし頑張ってね」

「分かったわ」

「うん?なんか死亡フラグを回避した気が・・・

「でも、なんかそれだけじゃインパクトないよな~」

妹紅インパクトって・・・

「じゃあ、明久に執事服を着せるつてどうかしら?

「「それだ!!」」

「いや、なにいつてるのさ!-?二人とも-!-」

「では、昔明久が使用していた執事服を持つてきますね?」

「つて咲夜ものらないで!!てかどうしたの?」

「いえ、明久の執事服と聞いて・・・」

君は何ものさ・・・

こうして、僕は執事服を着ることが決定した。くそぅ・・・妹紅、
幽香覚えてろよ・・・

第35話 清涼祭1（後書き）

明久は死亡フラグを回避しました。

第36話 清涼祭2（前書き）

結構いろいろと変わりますが、原作どうりいけたらいいな・・・

僕達はある問題に直面した・・・

「やつ言えば、台がないね・・・」

そう、台がないのだ、机はミカン箱だから

「しかしどうするのじゃ？」

「まあそこにについては外から持つてこようか・・・」

「そうだね。じゃあ学園長の許可もらつてくるかな」

「じゃあさ、ついでにで良いんだけど坂本を呼んでくれない？ ち
ょっと協力を頼みたいのよ」

「いいけど、前までめんどくさいって言つてたのにどうしたんだ？」

確かに

「.....本当は秘密なんだけどね協力してくれることだし。誰にも言
わないでね？」

「実は瑞希なんだけど.....あの子、このままだと転校してしまうかも
知れないの」

「転校？」

「・・・なるほど」

「どうしたの明久？」

「早い話、姫路さんの親がこのクラスの状況を聞いてそんなどろ
行かせられない、って言ったところでしょ？」

「確かにそうね。クラスのみんなの学習意識のなさ、ある程度良く
なったとは言え教室環境の劣悪さ。最悪といつても良いほどの環境
だもの。こんなところに娘を任せたくないわよね」

「学習意識とかは召喚大会に出て、アピールすることでなんとかなるんだけど教室の環境とか喫茶店の出来映えとかになると、やっぱり坂本の力が必要かなって思つて……」

「うん、わかつたよ。ちょっと待つてね」

僕は携帯を取り出し

「あ、雄一？」

『明久か？何のようだ？』

「ちょっと清涼祭でね」

『俺は参加する気ねえぞ』

「なら・・・（ガーミン）つて霧島さんにてえるよ?』

『な、てめえやめら！…?』

「なら、手伝ってくれるよね？」

『ちつ！…分かつたよ』

「じゃあ学園長室前に来てね」

学園長室前

ある程度雄一に説明した後、僕、妹紅、雄一、幽香で学園長室に入ろうとする

『……の賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランデパークに……』

「なんか言い争つて「失礼します」な、明久！？」

「またアンタかい。何の様だい？」

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。

これでは話を続けることもできません……まさか、貴女の
差し金ですか？」

確かにこの人は教頭の・・・竹原先生だったかな？女子に人気らしいけど僕にはなんだかひどく嫌なものに見えるんだよね・・・

「馬鹿を言わないでおくれ。

「どうしてこのアタシがそんなセロイ手を使わなきゃいけないの。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さっきから言つてこるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「・・・・・・やうですか。

「ここまで否定されるならこの場はもうこのままおまじょう」

・・・・・

「それでは、この場は失礼をせんて頂きます」

竹原先生は出て行つた

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「その前に・・・」

「ん？どうしたんだい？」

僕はポケットから七ツ夜を取りだし壁に向かつて投擲した

「な、何してんだい！！」

「学園長、盗聴されてるの気づいてなかつたんですか？」

「え？」

僕は七ツ夜をポケットに戻し、壊れた盗聴器を壁から取り出した

「な・・・」

「明久、普通わかるわけないだろ・・・」

ふーん、妹紅がそう言つならうなんだらうね

「で、話は戻しますが用事つてのは台の調達の許可がほしいんです」

「台ね・・・いいだらう」

なんかあるみたいだねさつきに話からすると

「ただし、こいつちの頼みを聞いてくれるならだ

「何ですか？頼みつていつのは」

な・・・雄一が丁寧語を！？

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ」

今年は清涼祭で2人1組のタッグマッチの召喚大会が行われるらしい

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「いや、知りませんけど」

「優勝者には賞状とトロフィーと副賞に『白金の腕輪』と『如月ハイラング プレオープンプレミアムペアチケット』2枚を渡すつもりだよ」

「それが？」

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「なじ出せなきゃこいじやん」

まあ、妹紅の言つとおりだけど・・・

「やつであるならしているや。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文円学園として如月グループと行つた正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

「契約する前に気付けよ。学園長なんだから」

「つるさいガキだね。白金の腕輪で手一杯だったんだよ。

それに、悪い噂を聞いたのは最近だしね」

雄一の言葉に反論するも一応責任位は感じてるみたいだね

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

「つまらない内容なんだけどね、如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。

『ここを訪れたカツプルは幸せになれる』っていうジンクスをね

「それのどこが悪い噂なのかしら?」

たしかに幽香の言つとおりだね。聞いた限りは普通の噂だ

「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやつて来たカツプルを結婚までコーディネイトするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!?」

雄一が大声を上げる

「どうしたのや、雄一。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろ? 今ババアが言つたことは、『プレオープンプレミアムチケットでやってきたカツプルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!?」

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園つてわけぞ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然つてことか」

「ふむ。流石は神童と呼ばれているだけはあるね。頭の回転はまずまずじやないか」

呼ばれていた、だけどね・・・

「・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙つてくる・・・。行けば結婚、行かなくても『約束破つたから』と結婚.....。俺の、将来は.....」

・・・ガンバレ雄二

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようつて計画が気に入らないのさ」

ボイスレコーダをここで流して、前言つた言葉を聞かせてやりたい
!!

「つまり頼みつて言うのは、

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、台の件だけじゃなく教室の改修くらいしてやるひじやないか」

なんか裏がありそうだな・・・

「わかった。ただし、こちらからも提案がある」

「なんだい? 言つてみな」

「召喚大会は形式はトーナメント制で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

「それがどうかしたいかい？」

「対戦表が決まつたら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」「ふむ・・・。いいだろう。点数の水増しどがだつたら一蹴していただけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「・・・・・ありがとうございます」

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだるうね?」

「大丈夫ですよ」

「それじゃ、任せたよ」

さて、チームを決めなきやね

「で誰が出る?」「

「私と幽香は出れないからバス」

そういうや、何人か幻想郷から来るから面倒見頼まれてたね

「じゃあ普通に考えて僕と雄二か」

「だな。やるぞ」

「ふ、任しといてよ」

ついでだし雄二の勉強も見なきやだよね

第36話 清涼祭2（後書き）

原作では雄一は自分で勉強していましたがこつちでは明久が見ます

第37話 清涼祭 わあ、ひやを選ぶー? (前書き)

ちょっと短いかも…

この話の幽香は優しいんですよ~?

第37話 清涼祭 まあ、ひらを選ぶー?

清涼祭準備3日目

「…衣装できた」

「え、そういうの着ないんじゃなかつたの?」

「売り上げのためだ、すまんが着てくれ」

「仕方ないわね」

美波と姫路さんは服を持つて更衣室に向かつた。

数分後

「着替えたわよ」

「似合つてるよ」

「…ありがと…」

「そういえば、ムツツリー。藤原と風見のは作らなかつたのか?」

「…サイズが…くつ」

ふつ、それなら…

「問題ないよ、雄二。妹紅と幽香のチャイナドレスはここにあるから

「ら

「…え?」

「ま、まで明久。私は着ないぞ?」

「せつかく作ったのに、きてくれないの?」

「う…」

「じゃあ僕も執事服きないよ」

「…そ、それは…」

いやそこで悩むのー?

「…わかつた、着てくれる
着れば良いんでしょ…」

「…明久、2人の採寸知つてるとか?」

「いや、目測」

「なん、だ…と?」

少しして2人が戻ってきた。

「着たわよ」

「どこかきついとかない?」

「いや丁度いいよ」

幽香は黒に太もも近くまでスリットがあり、妹紅のは深紅に腰までスリットがあるがズボンを穿いている（誰か絵書ける人書いて下さいと頼んでみたり）

しかし、それより皆が注目したのは…

「ま、負けた…圧倒的に。」

「妹紅ちゃん、スタイルいいですね…」

「意外と大きいだと…」

「…「ひ…黙れ…」ぎやああああ…」

妹紅の胸元であつた。あ、そりゃ…

「ムツツリーー…盗撮したら…わかつてるとか?」

「…………（ノクノク）…」

はあ、カオスだな…

「あ、そうこえはムツツリー」と試作品で「マ団子」作つたんだけど
「では食べてみるかのう」

皆が皿から団子をとつて行く。

あれ? 数が…

「嘘! ? 外はカリカリなのに、中はもつちりしてて美味しいー」
「外はガリガリしてて、中はなドロリと… グハツ! ! ! 」

「雄! ! ? 」

ま、まさか…

s.i.d e 妹紅

まさかあの団子…

「ねえ、姫路さんもしかして調理場に入つた?」
「はい! ! ちゃんと上手くなつてゐるつて証明したくて
「味見した?」
「いえ? してませんけど」

この子は…

「姫路さん… 貴女には調理場に立つ事も、入る事も禁止するわ」
「な、なんですか! ?」
「あれ見て解らないかしら?」

『雄一ー！？そこ渡つたら駄目だ！』

『明久君、治療開始しますから手伝ってください』

永琳来てたんだね

「危うく坂本君死ぬとこだったのよ？」

「…それは…」

「なにが悪いのか理解できない限りは、調理場に行かせられないわ」

「…わかりました…」

「これで学習してくれればいいんだが…」

第37話 清涼祭 わあ、ひやかを選ぶー? (後書き)

絵書いて送つてもらひえれば、はりかた調べて(または聞いて)貼ります。

誰か送つて~(笑)

番外 明久の一日（前書き）

技、武器等を考えてるシーンです

番外 明久の一日

僕は妖怪山の一角にある開いた場所にいた

「さて、 DMC4 楽しかったな・・・」

今回買ったゲームなのだがあまりにもはまってしまいこの頃寝不足である

「あ、 そりだあの武器とか技参考に新しいの技作ってみよつと」「最初は武器だね・・・『刹那』！！」

僕がそう言つと首にかかった結晶、『刹那』は僕の思いにこたえるよう形を変えていく

「お～想像通りだ」

僕の手に握られていたのは DMC4 の主人公が持っていたレッドクイーンの様な大剣だった

「うん、 グリップも大丈夫だしイクシードも付いてるね」

グリップを捻るとまるでバイクのエンジンがなるような音が鳴る。まあ違うところは僕から流れる魔力を回収するってところかな・・・

「さて・・・ならーー！」

僕はイクシードフルまで溜める。すると刀身が赤く染まった

「セヤツ！！」

トリガーを引きながら近くにあつた木に振り下ろすと、剣に溜まつていた魔力が爆発し木が吹き飛んだ

「・・・威力がわからないからこれはよく使って慣れないとだね・・・」

「次は、つと・・・あ、そう言えば徒手空手するのにグラブとか作つてなかつたな・・・」

まあ普通に腕を追う感じで指は出てたほうがいいかな？

「出来たにはできたけど・・・」

間違つても人に向けて殴れなさそつだ・・・

「よし・・・あの岩がいいかな？」

僕は近くにあつた岩に手を添え・・・

「・・・フツー！」

一寸剣

体を震わせるように動かし、気をこめて岩をたたいた

『ドガツ』

「うん、手にも全く違和感ないしこれである程度本気で殴れるね

人間の体つて脆いから靈力とか殴る時防御面に大半使っちゃうからね。技の反動の。

「で、えーっと、そろそろ槍だ」

次に作り出したのは槍。突くといつよつ斬るがあつてるねこれ

「じつ……」

槍を岩の残骸に振り下ろすと抵抗なく切り裂いた。籠めた魔力や靈力の量で切れ味が上がるつと

「えっと投擲は、つと」

僕は槍を振りかぶると槍が変形し、虹色の光をまとい始めた

「う~んよし。神槍『ロングギヌス（神をも射殺す槍）』……」

ある意味この目のおかげで間違つてないけど

僕は槍を投擲する

『ビュン……』

槍はまるで障害はないかのように物を貫いていき、何処かへと飛んで行つたかと思うと、空間が開き手元に戻ってきた。

「さて、新しい武器も作つたし、練習しようかな」

いつして今日も僕の一寸は過ぎて行つた

いや／＼短・・・

番外 武器、道具説明（前書き）

七ツ夜と刹那の説明です

番外 武器、道具説明

『七ツ夜』

志貴から貰つた仕込みナイフ。吸血鬼の攻撃を凌いでも傷一つ付かず、頑丈な物。七夜の技術の継承の証と師弟であつた証として貰つた

『刹那』

ひし形をした結晶で明久はネックレスとしてつけている。明久の意思によつて武器となりその武器は鬼が本氣で殴つたり、弾幕等を食らつても傷一つ付かない不思議な金属。

今現在種類は刀、大剣、槍、籠手、脚甲、双剣がある。

『刹那』 武器の種類

大剣・・・ DMC4のレッドクイーンをモーテルとしており、イクシード機能（ただし明久から出た魔力を溜めるという形になつていて）も搭載している。フルまで溜めると刀身が深紅に染まる

>↓37431—4680<

プレート絵

>↓37423—4680<

槍・・・ 全体的に赤色をしており、突くより斬るがメイン。投擲時変形する

>↓37430—4680<

上が通常時で下が投擲時

籠手・・・腕を守るだけではなく、魔力、靈力、氣を増幅することができ、通常の十数倍の破壊力が出せる
色は全体的に銀

> 137429 — 4680 <

脚甲・・・籠手とセット。効果は籠手と似ているが、空中に一瞬だが魔力で足場を作ることができる（明久から漏れている魔力を固化させる）

> 137422 — 4680 <

双剣・・・威力よりも手数を取っている。刀身に魔力をまとわせることが可能

> 137428 — 4680 <

グローブ・・・殴るためではなく、鋼糸を扱う。指一本から十数本出せるらしい

絵作成中

明久の持つ道具

白金の腕輪・・・明久と永琳の魔改造により点数制限解除

同時召喚

使用者の点数を二分してもう一体召喚獣を呼び出す機能を持つ。ただし主獣^{メイン}と副獣^{サブル}2体の動きを一人で制御しなければならないため、

操作には多大な集中力を要し長時間の使用は厳しいのだが明久のあり得ない思考処理によりこれをなしている。起動キーは「二重召喚

『ダブル』

ユニゾン

明久と永琳により魔改造され付いた効果。仲間を指定し（同意が必要）その召喚獣と融合する。

点数は相手の召喚獣の半分を自分の召喚獣に追加した点数でもしも相手が腕輪等が使えた場合、相手の召喚獣と同じ能力も使える。起動キーは「融合」ユニゾン』

靈糸の指輪・・・10個の指輪で靈力を込めると鋼糸を出す。博麗神社で明久が見つけ貰つた

転移の呪符・・・紫の妖力が籠つており、幻想郷と現代を行き来できる（ただし充電式

番外 武器、道具説明（後書き）

絵は出来次第更新。下手でごめんなさい・・・

第38話 清涼祭4 いりしゃこませ、お嬢様（前書き）

キャラ紹介東方編で身長修正

武器説明修正

第38話 清涼祭4 いらしゃこませ、お嬢様

「明久、台はいいでいい?」

「うん。あ、須川君その台もひょいと右」

「いいか?」

「うん、じゃあ台の並びはこれでいいかな」

台は紅魔館から借りて来ており、クロスは100円のものだが・・・

「うん、見た感じ悪くないね」

「どう?進んでる?」

「・・・雄一いる?」

「結構きれいね」

「あ、咲夜に霧島さんに秀吉のお姉さん」

「雄一は・・・いない。」

逃げたか・・・つて霧島さんはやつ!?

「吉井君、私は優子でいいわよ。呼びにくいだらう」

「じゃあ優子さんで。そう言えば咲夜ありがとね、台」

「問題ないわ。明久からの頼みつて言つたら、お嬢様大喜びで使用許可をくれましたから」

「じゃあ、レミリアにお礼いわないとだね

霧島さんが雄一を連れて来て、みんなが集まつた

「やういえば優子さんとかは召喚戦争に出るの?」

「私は代表と一緒に出るわよ」
「……優子と一緒に出る」

雄一の腕に抱きつきながら霧島さんが答える

「ウチも瑞希と出るわよ」
「はい、頑張りたいと思います。妹紅ちゃん達は出ないんですか?」
「私と幽香は用事で忙しいからバス」
「私もお嬢様達がいらっしゃるので」

(え……大丈夫なの?)

(はい、永琳さんが日光に関しては抑える薬が完成したそつなので)

永琳、やつぱす!」こね・・・

「吉井君は出るのかしら?」
「え、うん。雄一と出る予定だよ
「分かつてるとこ最大の壁ね」
「あれ?アキ達も出るんだ」
「うん。色々あつてね」

台とかの条件だし

「もしかして、賞品が目的とか・・・・・?」
「うーん。一応そういう事になるのかな」
「・・・・・誰と行くつもり?」
「え?」
「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつもりなんですか?」

一人が怖い……てか戦闘態勢入ってるし、姫路さん悪いほうでF

クラスに染まつてゐるな～

「（誰と行くんだろう・・・）」

「（確かに気になるわね）」

「（でも、明久だし固定の人とはいかないでしちゃうね・・・）」

妹紅達からも聞きたそつた雰囲気はするけど、JUJUちは純粹に興味みたいだ

「う～ん、誰かってのは決めてないけど、行くとしたら多分上白沢先生かな？」

「「「「え？」」「」」

「明久、なんで慧音なの？」

「いや・・・この頃迷惑掛けまくったからね・・・」

何回か泣かせちゃつたし・・・

「まあ、行く時は妹紅達の分のチケットも買つよ」

「（やつぱり明久ね、でもまあいいか）」「」

呆れながらも喜んでるナビ

「アキ～、JUJU」とかしら～。

「明久君、お話をしたいんですけど

お話をされるなら戦闘態勢といてください

お話をされるなら戦闘態勢といてください

「お一人方明久に手を出すというのでしたら、私が相手になりますよ？」

咲夜はナイフ（刃抜き状態）を取りだし僕の前に立つ

גָּמְןִי

「……でか十六夜さん、いーの間に移動したの？」

卷之三

能力に制限がかかってもある程度は使えるみたいだしね

咲夜たちはAクラスへ帰つていき、僕らは作業に戻つた

清涼祭當日

「お前、一、準備はできてるか？」

「おう、大丈夫だぜもこたん！！」

「も、たん言、なあああ！」

お落ち着いても」たゞ・・・妹紅「

そんなこんなで清涼祭が開始した

「すいませーん、注文いいですか？」

「少々お待ちください」

結構大繁盛ね

「あの子美人だな」

「てか・・・むねデカ・・・」

「あの赤い服の子も・・・」

「てかあのこ誰だらうめつちゃかわいいけど」

「(1)注文はこれでよろしいかのう?」

秀吉君?男の子って見られたいなら、少しほは女装に抵抗を持ちなさい・

まあ、大半女子田当てかと思つだらうけど意外と一番人気なのは・

「すいません」

「はい、なんで(1)ぞいましょうか?お嬢様」

「お、お譲り//え、えつと(1)ママ団子とウーロン茶を//」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

「は、はい//」

明久なのよね。女子の大半が明久田当てで何回か入つてきてるし

「なあ、風見。あれなんだ?」

「明久よ」

「いやそりゃなくて・・・」

「明久は一時執事の仕事をしていたんだもの。あの程度そんなに苦勞なんてしないわ」

「そ、そつなのか・・・」

「「「「（執事って・・・何やつてたんだ？あいつ）」」」」

Fクラスの心は（幽香、妹紅、明久を除く）一つになつた

「フフフ、ここが現代ですか」

「あきひさつて、此処の学校つてどこに通つてるんだよね？」

「ええ、会うのが楽しみね」

「む、むきゅう・・・・」

「もう死にかけてるけど大丈夫かしら・・・・」

そこには紫を含ませて5人が立っていた

第38話 清涼祭4 いらっしゃませ、お嬢様（後書き）

まさかの明久の選択、これにより私は自分の首を絞めるのだった！－！

明「いや、ダメでしょ」

しかし最後の4人分かる人にはもう分かるでしょう

明「次回に出るの？」

一応その予定遅くてもその次には出すようになる
では次回に

第39話 清涼祭5 1試合用と営業妨害（前書き）

一試合用です。そして妨害・・・明久執事モードでお送りします

第39話 清涼祭5 1試合用と営業妨害

「明久、そろそろ試合開始時間だぞ」

「うん? もうそんな時間か

「分かつた、じゃあ着替え・・・」

「いや着替えなくていい。ちよつどいし、宣伝するが

「OK」

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

「律子頑張ろうね

「うん」

仲いいなあの二人

「さて僕達も行こうか」

「だな、負けるわけにはいかないんだ・・・」

「雄一・・・(苦笑)」

「では召喚してください」

「――サモン! !」

僕達はサモンし構える

数学

Bクラス 岩下律子 179点
Bクラス 菊入真由美 163点

VS

Fクラス 坂本雄二 192点
Fクラス 吉井明久 479点

「 「 「え？」」」

何驚いて・・・あ、そうかAクラス戦見てる人しか僕の点数知らないんだつけ。

それより・・・

「……素手？」

武器を何も持っていないように見える。

「明久。よく見ろ」

雄二が召喚獣を動かし、拳を掲げる。

「メリケンサックを装備しているだろ？？」

「なンでだ！？」

他にそんな装備の奴なんかいなかつたぞ。武器がメリケンサックだなんて……あ、普通か

「それより、お前は下がつてんじゃねえか……」

「『じめん、服作るので勉強してなかつた』

「おー！」

実は今日、午前3時ぐらいまで幽香と妹紅のチャイナドレスを調整していた。

「ちょっとー？ 勉強してなくてあれ！？」

「どうしよう律子・・・」

「や、やるしかないわ」

「よし、明久。例の作戦で行くぞ」

「了解」

作戦開始の合図をする雄一。 そう、俺達の作戦は一人一殺。雄一を操作にならすためだ

「えっと、岩下さんだけ・・・『じめんね？』
「え？」

僕はスタイルチェンジを行い、外見はDMC4のネロで大剣を持つた。
お、いい組み合わせだ

「イクシード」

召喚獣は剣のグリップを捻り、魔力（この場合点数）を溜め、刀身が深紅に染まる

「エクスプロジェクト・ブレイクー！」

『ドガニッ！』

トリガーを引きながら振り下ろすと大爆発が起こった

岩下律子 0点

「え・・・何も出来なかつた・・・」

よし、雄一の方は・・・

「ふはははは！ 無駄無駄無駄あつ！」

うわつ・・・

「きやああああ！」

「ヒビめつー！」

菊入真由美 0点

雄一の召喚獣の拳が相手の腹にヒットし勝利した
でもなんだか弱いものいじめみたいだつたな・・・

「……勝者、坂本・吉井ペア」

先生もちよつと引いてるし

「えっと……若トさん、菊入さん」めんね?」

「いや……気にしなくていいよ」

「うん」

いい子たちだな

「明久、戻るぞ」

「分かつたよ」

「ところども、律子」

「なに?」

「なんで吉井君執事服だつたんだら?」

「さあ? でもにあつてたね//://」

「うん//://」

Fクラス

「ただいま、つてあれ?」

「あ、ちよつと良いところに来たのじや」

「なんかお密わんすくないけど……」

店はやつをよりガラリとしていた

「ちよつと迷惑な密がおつてな」

「……・ 営業妨害か」

考える」・・・

「ちよつと藤原も風見も材料調達で席をはずしててな、手に余つて

たのじや

「いつたい誰だ？」

「ひの学校の三年じゅう

あると・・・

「こんな食べ物食えるわけないだろー。」

「まづいしな！」

ふむ、あいつらか

「まったく、責任者はいないのか！」

「全く・・・」

「雄」待つて、僕が行く

「・・・わかつた」

さてと・・・

「すいません、お失礼ながらお話はお聞きしますのでお静かにして
いただけませんでしょうか

「なに」お客様に対して静かにしろだつて？

「周りのお客様の御迷惑になりますので」

「お、お前ふざけてんのか？」

「御騒ぎになるのはおやめください。でないと強制で外にお出ししま
すよ？」

「てつめーーー」

坊主頭のぼうが殴りかかってくるも

『パシッ、ぐい』

腕をきめる

「いでででーー???

「な、てめえ!!」

「はあ・・・私は忠告しましたから。失礼します」

僕は一人の胸元に手を添え

『ダンシングーー』

「「ーー.~.」」

吹き飛ばし教室から出した

そして

「皆様、お騒がせしてすみませんでした」

まだいるお客様の謝罪のお辞儀をすると

「これが不味いって・・・・・・あこいつの舌がおかしいんじゃない
のか?」

「てかあの執事すごいよな」

「うん、動かないで相手吹き飛ばしたぜ」

「あ、ゴマ団子追加お願ひ」

「分かりました。しかし謝罪の意味を込めて今こりつしゃるお客様
は2割引きさせていただきます。」

「いいのか、雄二よ？」

「ま、この人数なら大丈夫だろ。逆にこいつの行為で客が戻っていくかもしれないしな」

ふう、なんとか治まつたね・・・

「ただいま」

「戻ったわ」

「あ、幽香、妹紅、お帰り」

「さっき人が飛んでたけど・・・」

「ちょっとね」

「あやや、明久君すごいですね~」

あれ?この声は

「あれ?文?」

そこにいたのは射命丸 文だった

第39話 清涼祭5 1試合目と営業妨害（後書き）

謝罪は大切です

第40話 清涼祭6 東方勢（前書き）

おぜり様達登場

「文来てたんだね」

「はい、でも私だけじゃありませんよ?」

和もじるれ

「あ、ヤリコア達も来てたんだね」

「あやや？ ハンさん……」

卷之三

「あ～あ～ひ～た～～～～！～～～」

向こうからものすごい速さで突っ込んでくるフラン・・・
僕はそれを脇に手を入れるようにして持ち上げ止めた

」ハシナベ、アヒルが飛んで来た。

「えへへ、いろんなものがありてひよりとはしゃいじゅつた上

フランスにとってまだまだいろんなものが新鮮みたいだ

「明久、そいつら誰だ？」

ん？あそこへは知らなかつたね

「アカニシナリ」：トマトのアカニシナリ

「フランドルだよ」

卷之三

「・・・（チャキッ）」

「…………す、すいませんでした……」「…………

もしも何なしたら……

「でこの子が」

「射命丸文です」

「ああ、俺は坂本雄一だ」

「でこつちが……」

あれ？様子が……

「……グハツ」

「な、血吐いたぞ！？」

「アハハハ……」

僕は執事服から出すよつにしながら、隙間から医療セットを取りだし

「ほら、パチュリーこれを飲んで」

薬を飲ませながら力を共有した

「…………あの執事さん何処からあんなものを？」」「…………

「ホントに明久は謎だらけじゃのう」「…………

「明久、空いてる席あるわよ」

「あ、ありがとう幽香。妹紅、お茶ついで来てくれないかな？」

「わかった」

僕はパチュリーを抱きかかえ、席へと連れて行つた

「…………執事のお姫様だつこ／＼／＼／＼／＼」

何みんな顔を赤く？

「「、「めんなさいね・・・」
「気にならないで、安静にしてなよ?」
「わかつたわ」
「さて、何が」「注文なさいますか?お嬢様」「
「「「じゃあ、明久（あきひさ）（明久君）を」「
「僕は商品じゃないからね・・・」
「冗談ですよ」

「明久、そろそろ休憩入つたらどうだ?」
もつそんな時間か・・・

「じゃあ、そうするよ」「
「あ、あの吉井ぐ・・・」「
「あきひさ～一緒にまわる～?」「
「私も一緒に行くわ」「
「ん?いいよ、フラン」

はて?なんか一瞬姫路さんの声が・・・まあいいか

「着替えてくるから待つてね
「うん!...」

少年着替え中

「じゃあ行こうか

「ゴーゴーーー！」

「待ちなさいフランーーー！」

僕はフランに右手を引っ張られ、仕方ないのでぐれんように左手をレミリアとつなぐのだった

side妹紅

明久行つたな

「アキ・・・」

「吉井君・・・」

なんか殺氣立ちながら更衣室に行こうとするバカが・・・

「お~い、二人とも。あんたらの休憩はまだだよ
「でもアキが!!」

「吉井君が変なことするかも・・・」

「そんなことするわけないでしょ。いいから作業に戻りなさい

はあ、ホントこいつら明久をどんな目で見てるんだろうな・・・

「ところで気になつたのですか、幽香さん達の服だけ他の人と作り
が違いますね」

「あ~、明久が作ったからな

「あ~なるほど。たしかに明久君裁縫とかも上手ですからね~私も
服とか縫つてもらいましたし

「私もあるわね

パチュリーやつと治つたみたいだな

「えつと、どういうことですか？」

「なんていうかですね、私達服とか結構破きやすくて・・・」

「そのたびに明久が縫つてくれてたのよ」

まあ、原因は大抵弾幕勝負だけどな

「ところでさつきから気になつてのですが・・・」

「うん？なんだ？」

「いえ、さつきからお一人さん明久君に殺氣飛ばしたりと、どういうつもりなのかが気になりますね」

「べつにあればアキが・・・」

「見てる限り貴方達の独りよがりですよね？」

「ち、ちがいます！！」

「まあ、明久君が何も言つてないので私も何もしませんが・・・もし・・・」

「・・・！」

その瞬間殺気が文からあふれた・・・よかつた寄いなくて・・・

「もし明久に何かあつた場合は容赦しないんであしからず・・・」

「私からも明久にもしものことがあつた場合、私達は容赦しないわ・

・・・

「おい、二人とも。殺氣を抑えろ」

まあ、天狗は身内に対して甘いのはわかるけど

お前ら二人が暴れると制限があるとはいえる危険なんだよ・・・

「妹紅の言つとおり殺氣を抑えなさい。明久が心配するわよ

「あやや、そうでした。すみません・・・」

「いいわよ。でもあの文が感情的になるなんて久しぶりに見たわね

(ニヤニヤ)

「な／＼からかわないでくださいよ幽香さん／＼／＼

「なんでお前達、そこまで明久のために動けるんだ?」

なんであつて不思議な」と聞くな

「そりゃ、昔からの付き合いで」

「それこそいろいろな」と助けられたし」

「家族みたいに私は思つてますし」

「そして最後にみんな明久が好きだからよ」

「「「幽香（さん）！？」」「

「嘘は言つてないわよ？」

絶対幽香の奴樂しんでるな・・・

「早い話私達は明久に昔のように傷ついてほしくないのよ」

「あ、アリスさん」

「来てたのね、文にパチュリー」

「「「・・・・・」」

みんなは黙つていた・・・

いつもならネタ等に走るが（彼らは本気である）、アリスの一言を
聞いた時の反応を見て何も言えなくなつたのであつた

第40話 清涼祭6 東方勢（後書き）

おまけ

「・・・」

「あきひさ？」

「明久、気にしたらダメよ

「・・・でも・・・」

「文達が信じられないの？」

「・・・そうだね・・・」

「つてことで明久、あれを取つて！！」

「はいはい

僕達は射的をしているのであつた

第41話 清涼祭7 人形の少女（前書き）

や、やばい・・・ぎりぎり腰に・・・

第41話 清涼祭7 人形の少女

side 幽香

明久も休憩から戻り、文達は一応条件らしく帰つていった
で、そろそろ坂本が休憩が終わるころなんだけど・・・

「遅いわね・・・何処で道草食つてゐのかしら
「だね」、でも客の入りが少ないね」

そう、おかしいまでに少ない客の入り・・・

ん?

「お兄さん、すみませんです
「いや。気にするな、チビッ子」
「チビッ子じやなくて葉月ですっ」

坂本と小さな女の子の声が聞こえてきた・・・彼つて口コロコロンな
かしら

「戻つたぞ」

「あ、お姉ちゃん」

「あれ? 葉月じやないの?」
「美波ちゃんその子と知り合いなんですか?」
「知り合いも何もウチの妹よ」

ふうんまあ見た感じは似てるけど・・・雰囲気がね・・・

「ここにもいないです……」

「誰を探してるのかしら?」

「えっと、優しいお兄ちゃんです」

「う~ん」

この子ってどういう人かって伝える気ないのかしら……

「分からないわね……」

「どんな人だつたんだ?」

「えつと……あ、お姉ちゃんの人形を買う時にお金を出してくれました!」

「明久だな(ね)」

「ん?呼んだ?幽香、妹紅」

「あ、あの時の優しいお兄ちゃん」

「うん?あ、人形をほしがってた子だね」

「葉月ですか」

「葉月ちゃんね」

当たりだつたみたいね

「アキ、葉月と知り合いなの?」

「まあ、そうかな?」

「ふ~ん」

妹に嫉妬するつて……

side 明久

葉月ちゃんは美波の妹らしく人形のお金について謝られた時

「・・・戻った」

「ムツツリー二か。どうだつた?」

「・・・・」の料理がまずいつて噂が新校舎の何処から流れている

いる

「何処からかはわかる?」

「・・・（フルフル

うへん、そういう夜からわつきメールが来てた気が・・・

「お兄ちゃん。葉月」に来る途中で色々な話を聞いたよ

「葉月ちゃん。それを何処で聞いたかわかる?」

「えっと確かに色んな服を来ていて綺麗なお姉さんがいるお店

・・・え?

「・・・・・急いで行くべき」

「そうだな。それはすぐにに行くべきだな」

Fクラスの男子はみんなして走つていった

「・・・・

「バカしかいないのかしらね・・・」

「だな・・・」

「アキは行かなかつたのね」

「だつて結果見えてるし」

「え?」

「これ・・・」

僕は携帯を見せる

from十六夜 咲夜

Aクラスで貴方のところを悪口言つてゐるバカがいるんだけどヤツテ
いいかしら?

「・・・いくか」

「行きましょうか・・・懲りてない人にはちゃんと罰をあたえない
とね・・・」
「・・・ハア」

なんというか子供だよね、あの常夏コンビ（雄一がつけた）だっけ？

少年少女移動中

Aクラスに着くと雄一が立ち往生していた

「なにしてるの？雄一」「
「明久、ここはやめよう」「
「ここまで来て何言つてるのさー 早く中に入るよー」「
「頼むー。ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれー」「
「・・・シッ！」「
「ごふうあー？」「
「入るよ？」「
「は、はい」

はあ、そんなに霧島さんと会つのがいやなのかな・・・

「さうね。それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをぐぐる

「…………おかえりなさいませ、お嬢様」「わあ、綺麗……」

出迎えたのは霧島さんだった

「それじゃ、僕等も」「はい。失礼します」「お姉さん、きれ～！」
「おかえりなさいませ、お嬢様。そして旦那様」「咲夜、僕誰とも結婚してないんだけど……」

案外とこの子乗りがいいからな……

「ほら雄二入りなよ」「分かった……」「…………おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」「なるほど……」

「霧島さん大胆です……」「ウチも見習わないとね……」「いや、見習わなくていいから（わよ）」「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」「お席にご案内いたします」

ふつ、常夏コンビは……いないみたいだね

「……ではメニコーをどうぞ」「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で、あ、私もそれがいいです」「葉月もー！」

僕は
・
・
・

「僕はメロンソーダとパンケーキで」

私もそれで上

「んじゃ、俺は

「……」注文を繰り返します

「……『ふわふわシフォンケーキ』を3つ、『メロンソーダとパンケーキ』と3つ、

「あと『幻想郷専用』重婚用姫メイドとの婚姻届」が一つ

あとで
幻想郷
専用

重婚用
婚姻届
か

以上であるしいでしょ

『幻想郷専用』重婚用婚姻届つてなにさ!?

「全然よろしくねえぞつ！？」

「それでいいわ」

「ちよ二と幽香、妹紅!?」

「……では食器を『用意致します』」

女子三人の前にはフォークが、僕、幽香、妹紅の前にはフォークと

ストローとナイフと婚姻届が、雄一の前には実印と朱肉が用意された

「しょ、翔子！ ジれ本当にうちの実印だぞ！ どうやつて手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」「これ、どうしろってのさ・・・」

「とりあえず持つとけば？」

「そうね」

しかも現時点で数人名前が・・・彼女達は誰と結婚する気なんだろう・・・？

「……明久、俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所はここで良かったかな？」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん2人がおつきな声でお話してたの！」

そう話していると・・・

『おかえりなさいませ、』『主人様』

『おう。2人だ。中央付近の席は空いてるか？』

ちょうどいいタイミングできたみたいだね

『まつたく、この和風喫茶は美味くて良いな！』

『全くだ。中華料理屋は不味くてしうがねえ！』

わざと聞こえるように大声でそんなことを言い始める2人
悪評を広めたいからといってここにする必要などあるのだろうか?
これではこちらのクラスにも営業妨害となりそうだ

「……おーい、翔子おー!」

「……何?」

「あの連中がここに来たのは初めてか?」

何か一人が話しているとき、ふと後ろから肩をたたかれた

「どうしたの咲夜」

「明久、あいつ等のせいでもうちの店も迷惑になってるのよ・・・力
タヅケチヤだめ?」

「ダメだからね?」

さすがにそれは許可できないよ・・・

「つてことで明久、これを着てくれ」

「・・・・は?」

雄一の手にあつたのは・・・・・メイド服だった。

第41話 清涼祭7 人形の少女（後書き）

ただ今の悩みは原作キャラの誰を幻想入りみたいな感じにさせるか
です・・・

第42話 清涼祭8 なんか戦つてないな（前書き）

明久の女装ー！

第42話 清涼祭8 なんか戦つてないな

「……どうこうとかな？ 雄一」

さすがにいきなりメイド服をだされて、これを着れつて言われたら
引くよ

「お前が女装してあいつらに近づくんだよ」

「・・・貸しーだよ・・・咲夜、ちよつと手伝つて」

「いいわよ。更衣室はこっちよ

僕は咲夜について行つた

s.i.d.e 雄一

「結構あつけなく聞きいたなあいつ」

「明久自身も思つところがあつたんでしょ？」

まあ、拒否しても藤原辺りを出すつもりだったがな

「しかし、明久の女装って久しぶりかもな

「ん？ 前にもあつたのか？」

「ちょっとした依頼でね。あの時はきれいだつたわね」

「うん。確か踊り子だつたつけ？ 剣舞の」

明久が剣舞・・・まあAクラスのあれを見た限り有り得ない事も無いかもな

「戻つたよ」

「おう、もど・・・誰だお前?」

そこには金髪蒼眼のメイドがいた

side 明久

「鬱だ・・・」

「ははは、悪い悪い。一瞬誰かわからなくてな」

「あん時も思つたけど・・・」

「ええ、なんか女として負けた気がするわね」

言わないで幽香・・・

「大丈夫じゃ、似合つておるぞ」

秀吉・・・居たんだね

「じゃあわしは戻つておくから、後は任せたぞ」

仕方ない。やるか

「とにかく汚い部屋だつたよな」

「まあ、旧校舎自体汚いしな」

まだ続けてる。ある意味すゞいな・・・さてあー、あーこのくらい
でいいか

「お客様」

「何だ？つて、こんな子もいたんだな
結構可愛いな」

何だろう・・・気持ち悪いぞこつら

「お客様、足元を掃除しますので少々よひじこでしょうか？」
「掃除？さつさと済ませてくれよ？」

僕は雄一に会図を送り・・・

「一！この人！今私の胸を触りました！」

「は？何言つちぐぶあ！？」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、成敗するぜ」

雄一、ナイスドロップキック

「何言つてんだ！！俺らは何も」「黙れ！たつた今、こいつはこのウェイトレスの胸触つただろ？が
！俺の目は節穴ではないぞ！」

あえて言おう、節穴だ

「そうね、人のところの従業員に手を出したのだから、覚悟はできてるわよね？」

咲夜もたまつたうつぶんを晴らすためか登場
さて、このたおれている坊主には・・・あ、そうだ。

僕は隙間から瞬間接着剤を取り出し、咲夜に渡された使い捨て用ブ

ラを坊主にくつつけた

「さて。痴漢行為の取り調べのために来てもうおつかしくらっ！」

「ちつ！行くぞ夏川！！」

「！」これ、外れねえじやねえか！…畜生…！」

うわ・・・変態だ

二人は逃走した・・・とりあえず、着替えるかな・・・

僕達はAクラスで食事をした後、2回戦に行つたんだけど・・・

「不戦勝じやと？」

「ああ、なんでも、食中毒らし！」

まさか・・・いやないな。ないはずだーー！

「お兄ちゃん、葉月もあの服着たいです！ーー！」

葉月ちゃんはチャイナ服を指差す

「ごめんね、予備つていうか、服なくて・・・」

「・・・・・・・・（チクチクチクチク）」

「ムツツリーーーー？ビうしてそんなどい勢いで裁縫を！？てか、
いつ戻つたのーー？」

「・・・・・俺の嗅覚を舐めるな」

いやその場合嗅覚じゃなくて聴覚……

「……できた」

「わ、」のお兄さんす』』です……」

うわ・・・大能の無駄遣いつて『うにう』とを言ひのかな・・・

「明久……」

「ん? びひじたの幽香」

幽香が胸もとを手で覆いながら近づいてきた

「御免なさい、ちょっと服が破けちゃって……」

「「「「な、なんだと! ? 」「」「」「

「・・・・・・(スツ)」

はあ、

『シユカカカカツ』

僕は投げナイフを取り出し、Fクラスの面々の足元とムッシュリーーーのカメラに投げた

「治すから幽香こっち来て。妹紅、見張りお願い」

「わかった」

その後、第三回戦なのだが……
根本君と小山さんのチームだったのだが、雄一が取りだした『新し
い私を見て』を見た根本君が辞退。

不戦勝となつた

なんか、2、3試合で戦つてないな・・・

第43話 清涼祭9 準決勝、そして誘拐

「明久、そろそろ4回戦だ」

「もうそんな時間？」

時計を見ると午後2時過ぎ。結構時間たつたみたいだね

「あれ？アキ達もそろそろなの？」

「そうなんですか？実は私達もそろそろ出番なんですよ」

「そういえば相手はお前らだつたな」

「恨みっこなしで行こうね」

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者前にどり』

観客席ほぼ満席だな・・・

『では準備はよろしいですか？』

「はい・・・」

「「「「サモンーー」「」」」

『では開始してください』

古典

Fクラス 姫路瑞希 399点

Fクラス 島田美波 6点

V/S

Fクラス 坂本雄一 226点
Fクラス 吉井明久 597点

「な、4回戦は数学じゃ……
「実はなお前らに渡した対戦表だが……あれは俺の手作りだ」

いや、何してるのさ雄一

「騙したわね！――

「勝てばいいんだ勝てば――俺には後がないんだよ――」

・・・・雄一ドンマイ

「まあ、始めようか姫路さん
「はい」

召喚獣は腕輪の能力を発動しており、黒いロングコートに籠手と脚甲を着けていた

「いくよ！――

「負けません！――」

僕の召喚獣は姫路さんの召喚獣に蹴りかかる

それを姫路さんは大剣で防御し、僕の脚甲の踵についているブレードと鎧すらつ合になつた

「ぐつ――」

姫路さんが距離を取り大剣をふるつてきたが僕はそれをそらし・・・

「甘い・・・」

一閃走・六魚一

蹴りあげて踵落としをした。

「しとめる・・・」

ぼくが追撃で殴りかかるつとするも

「させません・・・」

大剣で防いだ・・・けど甘いよ・・・

「・・・貫け」

一檄・雷震衝一

「え?きやつ!?」

籠手が光、脈打ったかと思うと、掌底は大剣を碎き姫路さんに点（威力）の籠つた一撃を『えた

姫路瑞希 0点

ふう、雄一は・・・普通に勝つてるね・・・

『えっと、坂本君と吉井君のペアの勝利ですー。』

「ひきょうもの」

「二人ともひどいです」

「これも勝負だ」

「僕はその作戦すら聞いてないけどね・・・」

僕たちは教室に戻ると

「あ、お邪魔しているわ」

「アリス、お疲れ様」

いろいろと用意で忙しかったみたいだしね

「私は終わったけど、永琳達はまだみたいよ

「そうか・・・忙しそうだね」

「だから代わりに監督で来たから頑張つてね

「はは、かしこまりました」

さて、頑張るかな・・・

キングクリムゾン！！（久々の登場だ！！b YX作者）

「さて準決勝だね」

「行つてらつしゃい」

「がんばってね~」

「けがしないようにな?」

「うそ。じゃあ行つてくるよ」

僕はのちに思つ。」の時、妹紅と幽香に注意するひつひつとけざと。

・

「明久、この試合はとくに負けられない!…お前も氣を引き締めろ
よ」

相手は・・・

「・・・雄一、吉井。邪魔しないで」

「当たつちやつたか…」

霧島さんと優子さんだ。しかし・・・

「そつはいくか。俺はまだやりたいことがあるんだ!…」

「・・・雄一そんなに私と行くのがいやなの?」

「ああ、いよ」ちょっと黙つて「ぐふ・・・」

あ、強く殴りすぎた・・・

「まあ、いいか。秀吉?」

「なんじや?」

近くにいたみたいだね、雄一が何か作戦のために呼んだのかな?

「御免雄一の代わりににじやべって

「構わんが・・・」「ホン」

秀吉は咳払いをすると・・・

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

僕は雄一を立たせる

「お前の気持ちは嬉しいが俺にはちゃんと考えがあつて行動しているんだ！！」

「・・・・・雄一の考え方？」

お、気づいてない・・・でか秀吉アドリブだけどなんて言つんだろ？

「俺は自分の力でチケットを取つてお前を誘いたいんだ！！」

「・・・・・雄一」

「だからこゝは引いてくれ

「・・・・・わかつた」

「だ、代表！？ひ、卑怯よ」

「ごめん、さすがに2対1はまきついんだ」

てか僕は今とても吹き出しそうなんだ・・・

「まあ、僕はちゃんと戦つからそれで許して？」

「・・・・わかったわ・・・・じゅあ

「「サモン！」「」

Aクラス 木下優子 321点

VS

Fクラス 吉井明久 421点

「まあ、勉強してないしこんなもんか」

「勉強してなくてそれっておかしいでしょ・・・」

「ごめん、悪いけどお店が気になるからすぐ終わらすね?」

「え?」

僕は双剣と学ランの姿になり

「凍つけ」

—電剣・蒼翠斬—

点数を剣に籠め振りおろすと優子ちゃんの回りが凍りつき・・・

「斬! ! !

剣を切り上げると、氷でできた剣が地面から突き上げ召喚獣を貫いた

Aクラス 木下優子 0点

「「「「え?」「」」

会場が唖然とする。まあAクラスの生徒がFクラスの生徒に瞬殺されたらそつなるか

「ほんとに何もできなかつたわね・・・」

「『ごめんね?』

「いいわ、これも勝負だし。負けよ」

『し、勝者、坂本君と吉井君のFクラスペアです』

僕は雄一をたたき起し、Fクラスへと戻った

「あ、明久」

「あれ、妹紅。みんなは?」

「・・・・・雄一」

「これはどういうことだ?」

「・・・・ウェイトレスとアリス先生が連れてかれた」

「なつ!?」

「やはりか・・・」

くそ!なんとなく予想はできていたのに!止めれなかつたなんて・・・

「ごめん、明久・・・守れなかつた・・・」

「席を離れているうちにやられたわ…」

「気にしないで、妹紅、幽香。で、行き先はわかる?」

「・・・近くのカラオケ店だ」

「・・・そうか・・・」

フフフ、僕の友人に手を出すとはフザケタコトヲシテクレルジャナイカ・・・

「なんだろうか・・・さらつたやつに同情するぞ」

「・・・・・（ハクハク）」

「じゃあこいつか」

「やうだな」

「・・・・（ハク）」

「幽香たちは待つててね」

「氣をつけてな・・・」

「怪我しないようこね」

さて、お願いだアリスー無事でいてよ。そして誘拐したやつらーーー。
カク「シティロード?

第43話 清涼祭9 準決勝、そして誘拐（後書き）

授業中ノートに書いてたぜb

第44話 清涼祭10 あほらじい

僕達はあるカラオケ店の前にいる・・・

「明久、様子を見てから突っ込むぞ」

「・・・わかった」

「じゃあムツツリーーー」

「・・・（コク）」

少年移動中

『さて、どうする？ 坂本と・・・・吉井だつたか？

そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？』

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。坂本は中学 자체は、相当鳴らしていたらしいしな』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが、.....』

『気持ちちは分かるがそうもいかないだろ？ 依頼はその2人を動けなくする事なんだから』

ムツツリーーーのとうとう・・・ラジオからそんな会話が聞こえてくる

『お、お姉ちゃん・・・・・・』

『アンタ達！ いい加減葉月を離しなさいよーー!』

『そんな小さな子を人質にするなんて、恥ずかしいと思わないのか
しり』

いくら制限があるとはいえるアリスが簡単にさらわれた理由、それは葉月ちゃんを人質にされているからか・・・どうする・・・

『お姉ちゃん、だつてさ！ かわいいー！』

・・・

「明久我慢しろ。今突っ込んだらやばい」

「・・・分かつてる・・・」

『このオネーチャンたちどうする？ ヤつちやつていの？』

『だつたら俺は、「ツチの巨乳チヤンがいいなー！」』

『あつ、ズリー！ それなら俺、2番目ね！』

『じゃあ俺こつち！』

『くつ！？はなしなさい』

『ちつ！だまれっての』

『きやつ！！』

何か倒れる音とともにアリスの声が聞こえた・・・

『ドカツ』

「失礼するよ〜」

「あ、明久？」

そこには頬を抑えたアリスがいて・・・

「な、てめえ誰『ガスつ』あが・・・」

僕は突つかかってきた一人の鳩尾に一撃を入れ、

「大丈夫？アリス」

「・・・・・え？」

水月でアリスのそばに近くにしゃがみこんだ

「ええ、ちょっと呪かれただけよ」

「やがて、おもつた。」

アキ！後ろ！！

司元祐

後ろから一人が金属バットを振り下ろし、それに美波達が叫ぶが

パシツ

「な・・・」
「な、こいつ見てねえのに素手でバットを・・・」

僕は素手でバットを止め

『グシャツ』

— 2 . —

握りつぶした

「お前ら・・・・」
「な、なんだよ!」こわ
「喋るな・・・」

僕は殺氣を放ちながら（犯人のみに向けて）

「今すぐに消えろ、もし報復とかでも考えよつなら……」

「腕一本は覚悟しろよ」

「…………」「…………」「…………」

「明久押さえて。気絶してゐる」

はあ・・・

「もう終わったのか？」

「うん、ごめん雄二耐えれなかつたや」

「いや、誰も怪我してねえからいい」

氣絶していた秀吉を起こし、後処理（警察に通報）は済ませ
美波と姫路さんと葉月ちゃんは咲夜に任せて帰らせた後、僕と幽香、
妹紅、ムツツリー、秀吉、雄二
そしてアリスは教室で待機していた

「・・・まだなの？」

「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

「？ 来るつて、誰がじや？」

「ババアだ」

普通に考えてその場にいなとは言え学園長をババア呼ばわりなど
褒められた事ではない。

だが今回ることは、あの人が隠し事をしていたのが原因だ
さすがに我慢がならない。吐かせる、隠し事を

「・・・・・やれやれ、懲々来てやつたのに、随分と御挨拶だねえ、

ガキ共が

「来たかババア」

「来たのね学園長」

「さて、どういう事が説明して貰うぞ？ 学園長

「確かにそうですね」

それ相応の理由があるんだろ？ ね・・・

「俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思つが？」

「ふむ・・・・・ やれやれ、賢しい奴だとは思つていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかつたよ」

「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思つていたんだ。あの話だつたら何も俺たちに頼む必要はない。

もっと高得点を例えればそこにいる翔子や木下優子の様な高得点をたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

すると学園長はアリスと秀吉に気づき

「何でアリス先生がここにいるさね？」

「今回での被害者の一人ですよ」

「話に戻るが、あの時俺がババアに一つの提案をしたのを、覚えているか？」

「科目を決めさせろってヤツかい？ 成程ね、あれでアタシを試してつてわけかい？」

「ああ。めぼしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。

もしさうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗つてこない」

僕たちにとっては破格過ぎる条件だ。なのに、学園長は提案を呑んだ

つまり、この2人が決勝に出なければ学園長が困ると言ひつ事。

そして、学園長が困らなければならぬ連中が居る事につながる事も、その2人の周りに起きている。

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たりしてたのは、明久達がが勝ち上りては困る奴がいるってことか？」

「そういうことだよ、妹紅」

「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が、姫路たちを連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」

事実警察沙汰になつたのだ

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかつたのか・・・・。
すまなかつたね」

「な、ババアが謝つただと？」

「雄一、話を折らない」

「アンタ達だつたら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど田論見が完全に潰されて、焦つたんだろうね」

「さて、ここまであつた以上話して貰つぞ？あんたが俺達を選んだ真の目的を」

「はあ・・・アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね・・・・。」

学園長の話いわく、白金の腕輪は欠陥品で出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすらしく、

優勝の可能性を持つ“低得点者”が必要だつたらしい

「とりあえず、召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねえ。もう片方の同時召喚用は、現状だとBクラス程度で暴走する可能性がある」

それを聞いて僕は

「あほらしい」
「な、明久？」
「確かにそうだな」
「何を言つて・・・」

学園長が何か言おうとするが

「だつて、貴女の身勝手なプライドで、生徒と先生が危険な田にあつたのよ？」
「その理由がこんなのはなんて、あほらしいわ・・・」
被害者にまで言われたら終わりだな・・・

「まあ、今回のこととは多分教頭が関わつてると思つ」
「やはりそつだつたかい・・・近隣の私立校に出入りしてたなんて話を聞いたが、最早間違いないさね」

そこまでつかんでて放置してたんかい...

「まあ・・・それなりの罰は受けでもらつとして」
「（明久が黒い（わね））」「
「騙していた事はすまなかつたね。だが、目的は既に達成はされてるんだ。このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

また手出しあしたら……

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もつ帰ろ」

「そうだな。家に帰つてやる事もあるし……それに明日も早いしな」

「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「2人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせでもらうよ」

「はい」

学園長が戻った後

「さて、俺達も帰るか

「そうだね。アリス

「なにかしら?」

「今日うちに泊まつていきなよ

「…………え?」「

何驚いてるんだ?

「いや、咲夜にも言つてるけどさすがに心配だからね

「じゃあ、私と慧音も泊る~」

「私も行こうかしら」

「うん。じゃあ今日は腕を振るわないとね

「ふふ、じゃあ泊らせていただくわ」

この後、僕の家には幽香、妹紅、咲夜、慧音、永琳、アリスと集ま

つ
た。

遊んだ後就寝。朝は

「・・・・・」

・・・何も言つまへ・・・

第44話 清涼祭10 あまむらじい（後書き）

何があつたかご想像に・・・

第45話 清涼祭11 あんたに用はない（前書き）

決勝戦で「Jギー」まする

第45話 清涼祭11 あなたに用はない

「ああ、今日が一日田稼ぐぞ……」

「…………おおおおおおおお……」

朝、幽香たちと行くと襲われかけたが幽香たちが殲滅したFFF団。復活早いね？

「ちょっと決勝始まつたらおこしに来てくれないかな？」

「どうしたんだ？」

「補給テストのために朝早くから勉強しててね」

「俺もだ、じやあ屋上で寝ているから」

雄二に関しては田にクマが……それに何かと言ひながら朝霧島さんと来てたし、やっぱ心配だつたんだね……さて寝るかな……

side 幽香

「やっぱり、2人一緒に寝るんでしょうが？」

「間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……」

「どんな想像しているのよ」

「お前等の想像力が恐ろしい」

なんでそんなのに繋げよつとするのかしら……

「それ以前に多分明久なら保健室だぞ」

「「え？なんですか（ですか）？」」

「そうね、あそこならゆっくり休めるし永琳が・・・ってあなた達何処に行くの」

「アキのところよーーー！」

「そうですーーー！」

はあ、悪いけど文の言つ通りね・・・

「許可はできませんよ」

「「か、上白沢先生・・・」」

「八意先生は吉井君の専属医師なんです。もしも吉井君の休憩を邪魔にしこようものなら・・・」

「切れるな

「切れるわね」

「「う、うう・・・」」

「ほり、早く。お客様もいるんだから」

「「はー・・・」」

ホントに大丈夫かしら・・・

s i d e 明久

「失礼します」

「あら明久君。どうしたの？」

名前呼び「」とは誰もいないのか

「ちょっと休憩にね」

「あ、ならその前にここに座つて

「え？あ、はい」

僕は永琳の目の前の椅子に座ると

「ちょっと、眼を見せてね・・・」

「うん」

「・・・」

「・・・」

「うん、強化はされてるけど、問題はないわね」

「そうですか」

「じゃあ服脱いで」

「・・・え？」

「あ、上着よ？」

「ですよね」

僕は上を脱ぐと永琳は少し黙り胸元を見る

「やつぱり・・・この傷は消えないわね」

「まあ治つてはいるんですけどね」

僕の左胸付近には大きな破裂痕の様なものがある

「私でも治せないなんてね」

「気にしてませんからいいですよ？」

「そう・・・もう大丈夫よ。寝るのならそのベットを使いなさい」

「分かったよ」

「私が寝てるベットだから」

「おねがい、からかわないで・・・」
「ふふ、じゃあおやすみなさい」

僕はベットにもぐりこみ眠りについた

キング（ry）

さてよく寝たし、もうそろそろかな・・・

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！

これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

始まつたね。てか放送は先生じゃなくて放送部の人かな？

『出場選手の入場です！』

「いじうか」

「だな」

『2年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・坂本雄一君です！皆様拍手でお迎えください！』

うわ、すごいお客・・・

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、

改める必要があるかもしません!』

うん、これなら姫路さんのことも大丈夫だろ? ね

相手は・・・

『対するは3年Aクラス所属・常村勇作君と、同じくFクラス所属・夏川俊平君です』

まがりなりにもここまで来れるということは点数はいいはずだ
あんなことしなくてもいいはずなのにね・・・まあ、そんなことは
関係ない

『では召喚してください』

「 「 「 「 サモン! 」 」 」

日本史

Aクラス	常村勇作	209点
Aクラス	夏川俊平	197点

『さすがAクラスですね。やはり点数が高い』

「どうした?俺たちの点数見て腰が引けたか?」

「Fクラスじゃお目にかかるいような点数だからな。無理もない
な」

誇らしげに『ティスプレイを示す一人。反論はしない。確かに誇つても良いくらいの点数だ
でも・・・

「ホラ、観客の皆様に見せてみろよ。お前らの貧相な点数をよ

「夏川。あまり苛めるなよ。どうせ直ぐに晒されるんだぜ?」

「お前らあほだろ

「なに?」

「はあそっちの点数にはあんまり興味ないんだよね

「な、何言って・・・」

「ただ、あんた等は他人に迷惑をかけすぎた・・・」

僕達の点数が表示される

日本史

Fクラス 坂本雄一 215点

VS

Fクラス 吉井明久

「覚悟はできてるよね?」

1187点

「「「「「「」・・・・はあー?」」」」」

「明久その点数なんだ?」

「頑張りすぎちゃった(テヘッ)」

『な、なんということでしょう・・・1000点オーバーって・・・
学園初じゃないですか!?』

「気しないで始めようか

「そ、うだな」

「スタイルチェンジ！」

僕の召喚獣は姿を変え・・・おつ

「うわ・・・大当たり」・・・

「？」

そこに立っていたのは戦闘服（マンガ真用譚用姫6巻表紙の志貴の格好）に七ツ夜。

「どうあえず雄一、下がつてて」

「あ、ああ・・・」

「な、なめてんのか！！」

えつと夏川先輩だけ?召喚獣が突っ込んでくるも

「…殺す」

117分割

「え？」

夏川俊平
0点

僕の召喚獣は一瞬にして相手を17個に解体した

「な、夏川！？くそ！！」

さすがに相方がやられたから様子見か・・・

「・・・・・」

僕は・・・ナイフをポケットにしまい、片手で顔を隠すようにして立つた

「な、てめえ！！」

「・・・・・」

「ふざけんじやねえぞ！－」

怒り心頭で突っ込んできたけどダメだね・・・

「・・・遅い・・・」

一極死一

僕は、即座にナイフを取り出しながら相手の腕を斬り飛ばし、反し手で足を斬り飛ばす

「あんたに用はない、じゃあな」

一無空一

そして相手に向かつてナイフを振り下ろし・・・突き刺した

常村勇作 0点

「な・・・」

『え、えっと・・・ものすごい瞬殺劇により、

優勝は明久君、雄一

君ペアです』

「最後俺なんもしなかつたな

「まあ、いいじゃん

こうして僕達の優勝が決まった

第45話 清涼祭11 あんたに用はない（後書き）

最後の技はmugenよつです

第46話 清涼祭12 僕はあなたを許さない（前書き）

ただ今頑張つて東方プレー中
今決定することですが
弾幕ゲームは非想天使用つていつか接近戦ありで、負けを宣告する
か、戦闘不可で勝ち、てな感じです

第46話 清涼祭1-2 僕はあなたを許さない

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了します。各生徒は速やかに撤収作業を行つてください』

「…………おわつたああああああああ…………」
「終わつたね…………」
「さすがに疲れたわね…………」
「もうだね…………」
「…………（姫路と島田を止めるの…………）」

幽香と妹紅は思つた。明久が客に対応するたびにこの二人が殺氣立ち……特に姫路さん、あんたやめたくないんだよね？

「やう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

僕はふと今回の問題の一いつこにて聞へと……

「後夜祭の後で話をしこいと申つておつたの。結論はその時じ
やな」
「まあ、そうだよね」
「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」
「私も着替えよ」
「私もそつするわ」
「…………な、なんで…？」
「どうしてつて言われても…………恥ずかしいから決まるでしょー」

うん、そうだよね

「明久、この服どうしたらいい?」

「?貰つていいよ」

「明久つてコスプレをるのが好きなのね」

「なんでそうなるの!?」

「おい明久、遊んでないで学園長室に行くぞ」

「学園長室じやと? 2人とも学園長に何か用でもあるのか?」

「ちょっとした取引の精算だ。ここが忙しくて行けなかつたからな。遅くなつたが今から行こうと思つ」

一応、取引だから、報告しないとね

「秀吉とムツリーも一緒に行くか?」

「・・・・・・・・・・(口クロク)」

「せうじゅの。では行くとするかの」

少年移動中

よし、帰つたら永琳と改造するか

「で、問題についでだが・・・」

「まつて雄一・・・」

「どりした?」

「の氣配は・・・

「ちつ・・・あの教頭まだあきらめてなかつたのか・・・」

「やられたか!」

少しどよこえれつもの余話やばい・・・

「とりあえず、まずは放送室を抑えるが!」

「抑えたのはいいけど教頭はどう?」

その時屋上のスピーカーの配線が一つの部屋に・・・
あの部屋は!・!

「やられるとか!・・・『刹那』!・・・」

僕は周りに誰もいないのを確認し、刹那を籠手に変え窓を飛び出す

「ふつ・・・」

脚甲はその特性により僕からあふれていた魔力を足場にし、僕は屋上より高く飛んだ

「今日は崩しはこりない

左手に魔力と靈力を溜めていく。すると2つの力は混じり合い、輪郭をもち、龍の腕のよみになる

「突き崩せ！――」

――魔靈・激龍爪――

その拳撃は、スピーカーを破壊し、その下の教頭室まで貫いた

「な、なあ……」

「う、ん手加減したつもりなんだけどな……」

「うん？ あそこにはいるのは……

「こんなにちは、竹原先生」

「よ、吉井……な、なんだ今のは……」

「まあいいじゃないですか、それより……」

僕は教頭に近づき

「今回のことについてもそうだが、もし僕の大切な人たちに手を出してみる……」

『ドンツ――』

僕は教頭のすぐ隣の壁を殴りつけた。壁はまるでクッキーのようにな
碎け

「俺はあんたを許さない・・・！」

・・・・あら氣絶してるや

さてレコード壊したし帰るかな・・・

「明久、これははどういうことかな・・・？」

「・・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・」

こうして僕は慧音に頭突き + 説教を食らった
ちなみに教頭室は紫が直してくれましたとさ

どうも、吉井明久です。

ただ今慧音の説教が終わり打ち上げをしているのですが・・・

「「あゆう〜・・・・」」

まず姫路さんと美波は誰が入れたのか解らないお酒を飲み、酔つて
僕に近づこうとしたが

「あら、結構安ものでもおいしいわね」

幽香によつて撃墜

FFF団、幽香たちにより殲滅（永琳、アリス、慧音も参加）

で・・・

「」の状況どうじょうつか・・・

まあ早い話で言つと、お酒を持ち込んだのは永琳で・・・

「・・・スウ・・・」

アリスは酔つて寝ており（で言つより時間的に寝ている）
慧音は・・・後ろから抱きつぶにして氣絶している

「どんだけ強い酒持つてきたの・・・」

「ん？ 鬼の酒よ？」

「明久、ほらジユース」

「ありがとう」

僕はお酒を控えています

「でもまさか明久教頭室を破壊するとわね」

「僕だつて失敗する時は失敗するよ」

「まあそこらへんの修正は賢者がしてくれてるんで大丈夫でしょう

「さ・・・月見酒でもしましょうか」

「僕はジユースだけね」

「・・・貴方とするから意味があるのよ」「

こうして清涼祭は終了を迎えた・・・

おまけ

「そうだ、明久チケット一枚くれない？」

「いいけどなんで？」

「霧島さんにおげるのよ」

「いじよ」

「ありがと〜」

第46話 清涼祭12 僕はあなたを許さない（後書き）

え？ 雄一はどう行った？ 霧島さんが連れていき、ムツツリーは付いて行きました

幻想入り？ 势ですが、雄一、ムツツリー、秀吉、姫路、美波の5人で決定しました

PV20万越え短編 ハジメテノトモダチ（前書き）

まず言おう、題名じや誰かわかりませんね
ちょっとした設定崩壊が多くありますがどうぞ

そう、すべてどうでもよかつた

自我を持つた時に私、博麗靈夢が最初に思つたのはその一言

妖怪とか、人間とかそこまで興味はない

努力もやるだけ無駄、報われるはずがない

ただ博麗の巫女だから此処の結界を管理し、妖怪を退治するだけ

そう・・・どんなに頑張つたってこの定めからは抜け出せない

努力したって無駄なのだ

奇跡なんてあるわけもない、そう思つていた・・・

だがしかし、それも間違いだと今ではちょっとと思つ

だつて、その奇跡を起こし、努力でこの幻想郷のルールを変えた

頭は良いのにバカで、どうしようもない『兄』のよつな人がいるの
だから

出会いは単純だった

いつものように修行をさぼって、お茶を飲んでいると

「やつとたゞり着いた・・・てか妖怪多すぎだよ・・・」

まさかここまで来るモノ好きな人間がいるとはね・・・
見た目的に私よりちょっと上かしら・・・
まあ興味ないけど

「うん？ああ人がいたんだね」

「さつきからいた」

「となり、いい？」

「好きにすれば」

「じゃあそつする」

・・・

「・・・・・」

「・・・・・」

静寂、そう表現すればいいだろつか・・・
静か、だがしかし意外と不快ではない雰囲気だった・・・

「そう言えば、君名前なんて言つの？」

「・・・・・『靈夢』」

「靈夢か〜」

誰もつかむことができない私に、まるで普通の「」とのように触れて
くる人

「・・・・貴方は？」

「え？」

「名前」

だからなのかもしれない、『私』が初めて少しだけ興味を示したのは

「あ、名前ね。明久、吉井明久だよ」

「・・・明久」

「うん」

これが初めての彼との会合だった

それからというも、数日」とだが明久はここに来るようになつた修行をさぼつてるとばれると、修行してゐるか見に來るため、明久が來たときだけ私はしぶしぶ修行をした。

だが不快感はなく、明久もそれにつき合つてくれたりしたためなぜだか普通に修行していた

安定しなかつた能力が安定したと言つた時、まるで自分のことのように喜んでいた

妖怪が衰退してしまい、妖怪から決闘ルール制定の要望を受けた時は一緒に考えて

『スペルカードルール』を作つた

その後、魔理沙とも出会い、3人でいることが多くなつた

そして・・・赤い霧の異変・・・

明久は私達を底い凶弾に倒れた・・・

「お願い、明久!! 目を覚まして!!」

その時初めて涙を流した・・・まあその後何事もなかつたようにあ
いつは起きてきたけど・・・

その後も一緒に行動をし、異変を解決していった

そのたび、明久はやさしすぎると実感した

そして他の子と仲良くするたびに、ちょっと、ほんとにちょっとだ
が不快感を覚えた

そして月に異変

私達を庇つて傷ついた明久を見て怒りに飲みこまれ負けかけるも、

明久はその月人の使う神々の力に勝利した

明久は、私の否定した努力をし、奇跡を起こし、運命も変え、幻想
郷すら変えてしまった。

でも・・・

もう一5となるが・・・お茶をすすりながら現代で、学校なる物に
通う明久を思い浮かべる

ちょうど文がその光景の写真を取っていたので貰つたけど・・・

「結構・・・・似合つてるわね・・・」

執事服を着た明久が写っていた

彼は変わらず、明久であり

私の『初めての友達』であり

「・・・・・いつ帰つてくるのかな・・・」

まだよくわからないけど、不思議な気持ちにさせる

今は『兄』のような想い人

PV20万越え短編 ハジメテノトモダチ（後書き）

明久が靈夢にあつたのは幽香の会合後の修行中の時です
そして靈夢はまだ自覚していません

如月グランドパーク編1雄一の朝と明久の誘い（前書き）

原作崩壊・・・いい時代になつたものだ

如月グランドパーク編1雄一の朝と明久の誘い

s.i.d.e 雄一

休日の朝。俺が目を覚ますと、

「…………雄一、おはよう」

目の前に翔子がいた・・・

「…………今日はいい天氣」

「ん?ああ、そうみたいだな」

カーテンを開けると強い光に目を細める、そして再びと幼なじみの姿を見る

今日は休日だからか、さすがにいつもの制服姿ではなかつた寝ぼけているのかもしない。眠気を振り払うように頭を大きく振つて、翔子に向き直る

「あらためて、おはよう。翔子」

「…………うん。おはよう雄一」

「よいしょ、つと」

そういうえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ?

今日は「イツと何かの約束をしていたつけ?

寝起きのためか本調子ではないが頭で記憶をさかのぼる。ダメだ。全く覚えがない。なら約束ではないだろ?。だとすると・・・・・・

ほかの理由を考えて、一つの結論にたどり着く。やつか、やつこ

ことか

「憑じて翔子。俺の携帯とつてくれ

「・・・・・電話でもあるの?」

「ああ、やうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号を押す
コイツがここにいること。それは・・・

「ああもしもし?警察ですか?」

不法侵入しかない

『ガチャヅチ』

「おふくろー・どうこうとだつー・

「あら雄一。おはよー!」

キッチンに駆け込むと、おふくろは洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた

「おはよー!やねえー・どうして翔子が俺の部屋にいるんだ!

おかげで俺は警察のオッサンに一次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちまつただろうが!」

幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきた、と告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝ぼけていたとはい

え、一生の不覚だ

「・・・え？」

俺の言葉をうけて、おふくろが何度も大きな瞳を瞬かせる

「翔子ちゃんが・・・・・・？」

おふくろが頬に手を当けて困ったような顔をしている
この態度だと、もしや翔子単独の行動か？おふくろの手引きじゃな
かつたのか？
もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは悪かつたかもしれ
ない

「ああ、いや、怒鳴つて悪かつた。俺はてっきりおふくろがアイツ
を勝手に俺の部屋に上げたものだと」

「もう、翔子ちゃんつてば奥手ねえ。折角お膳立てしてあげたのに
何もしないでいるなんて勿体な・・・あら雄二、びつてお母さん
の顔を驚掴みにするのかしら？」

「やっぱり、アンタのせいが・・・」

この母親には一度きつかり常識を教えてやるべきだろ？

「・・・・・雄二。お義母さんを虧めちゃダメ」

「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけ
ないんだ」

遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔していく
なんとなく、翔子の言つ『お母さん』の発言が普通と違うような気
がするが、今は気にしてはいけない。というかシッコんではいけな

い氣がある

「…………言ひ方」とを聞かないし、この本をお義母さんと一緒に
読む

「ま、待てっ！それは女子の読むものじゃない！早くこいつに寄越
すんだ！」

翔子が取り出したのはA4サイズの冊子。

くつ、よりにもよつてあの本か！ムツツリーですか？念らせた至高
の1冊が見つかるなんて最悪の事態だ！

つていうかどうやって見つけ出したんだ！？一緒に暮らしているお
ふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ！？

「あら翔子ちゃん。それは雄一が歴史の資料集の表紙をかぶせて、
机の2番目の引き出しの2重底の下に隠してある秘密の本じゃない
？」

「わ、わかった。おふくろは開放しよう

言われた通りアイアンクローラーを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。
てかおふくろにもバレていたのか

「やれやれ……。んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「……約束」

「約束？今日俺となにか約束をしていたか？」

「……うん」

いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子。
どうやら何かのチケットのようだ。えへっと……

「あら。如月グランデパークのオープンチケット？しかもプレミア

ムつて書いてあるから特別なチケットなんぢゃないの？凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入つたわね～」

「・・・風見が・・・友達がくれた」

「・・・・・・・・雄二、行こう？」

いやだと言いたいが・・・言つても聞かんだろうし・・・絶対裏に風見とかがいるだろうしな・・・

「仕方ない・・・まあいいだろう」

だが、この程度の困難に屈する俺ではない！なんとかして脱出をしなければ俺の人生が・・・

s i d e 明久

「あ、そうだ慧音」

重要なこと忘れてた

「なんだ？」

「休みに如月グランドパークに行かない？」

「・・・・・・え？」

「ほら、優勝賞品でチケット貰つたからわ」

「いや・・・妹紅達は？」

「私はバス。用事あるから」

そう、何だか用事があるらしく慧音と一人で行こうとした

「もしかしてなんか用事でもあつた？」

「え、いや、ない！い、行く！！」

「うん、じゃあ今度の休みね」

「わかつた／＼／＼」

よかつたうれしそうで

s.i.d.e 妹紅

「今より会議を始めるわ」

今ここにいるのは私、幽香、アリス、咲夜、永琳である

「今回みんなを呼んだのはほかでもない・・・」

「明久がお礼として慧音を誘つたの」

「だから私達は邪魔しないようするつもりだつたんだが・・・」「あの二人ね・・・」

アリスの言葉に私はうなずく

「しかも同日に霧島さんも誘つたみたいで、彼女達とバカ集団がいるのは確実」

「妹紅、質問していいかしら」

「なんだ？咲夜」

「あの子たちホントに明久のこと好きなの？」

「確かにそうね・・・」

「私にはまるでお気に入りのおもちゃ程度にしか見てないよう見えたのだけど・・・」

「永琳の言いたいこともわかるけど、一応好きらしい・・・」

私達は黙りこむ

「一応私達は『相手は明久が』ところことで同意してゐるけど・・・」
「出来るなら彼女達は・・・」
「まあその話は置いといて。今回の話は明久と慧音の護衛よ」
「秀吉の手を借りて手伝いとして混ざりながら護衛する、って感じだな」
「あのクラスで味方つて秀吉君しかいないのね・・・」
「まあ、そう言つことだから」
「当口、頑張りましょう」
「『おお～』」「『おお～』」「『おお～』」

「うして時間は一刻と過ぎて行く

如月グランドパーク編一雄一の朝と明久の誘い（後書き）

前半は大半原作コピペになっちゃいますね・・・

如月グランドパーク編2（前書き）

今回はメインは雄一視点です

如月グランドパーク編2

s.i.d.e 雄一

「…………俺は…………無力だ……」「

電車とバスで2時間ほどかけ、俺と翔子は如月グランドパークの前にいた

「こ、これは仕方がなかつたんだ！翔子一人だけならまだしも、おふくろまで面白がつて結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！あの妙な雰囲気から逃れるために出かけてしまつた俺を誰が責められよう

「…………やつとついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。

「…………ふむ。そんな姿を見ると連れてきた甲斐もあるかもしないな。

うん、そういうことにしよう。

「よし。それじゃ、翔子」

「…………うん」

「帰るわ」

「…………ダメ。絶対に入る」

翔子は腕を組んできた、どうこうつむりだ？

「…………恋人同士は皆こうしてる」

「あれ？雄一。雄一たちも来てたんだね」

「？坂本か」

この声は・・・明久と・・・

「上白沢先生？」

「どうかしたか？」

「いや・・・喋り方が・・・」

「これが素だ。学園では教師だからな」

「そうですか。じゃあ明久、俺達は先に行つてる。」

「・・・中でまた会えたら、よろしく」

俺と翔子はそれだけ行つて、入場口のほうへ向かう。
プレオーブンという限定的な期間であるため、特に待つ事もなく入り口の方へ行けた

s i d e 明久

僕は今日、慧音とグランドパークまで一緒に遊びに行くため待ち合わせをしていた

幽香いわくこれが普通だそうだ。まあ確かに女性は用意が時間がかかるっていうしね・・・

「すまない、またせたな」

「いや待つてないよ慧音」

慧音はいつもの帽子に白いワンピースを着て、上にブレザーつ正在のかなあれ？まあ服を羽織っていた

「似合つてゐね」

「そ、そうか。ありがとう//」

「じゃあもうそろそろ電車来るし行こうか」「うん／＼／＼

「…………吉井君が、今向かい始めました」

s i d e 妹紅

「よろしくな、秀吉」

「かまわんよ、といひでお主はよかつたのか?」

?

「いや、明久の……」

「あゝ私は別に」

「私もそうね。誘いたいときは誘ひし」

「そうか……」

今ここにこるのは私と幽香だけ。ほかは密に交じって待機してもらつてゐる

「雄二達が来たみたいだな」

「ではスタートじゃ」

一応のメインはこっちだしな……頑張るか

s i d e 雄一

「こりつしゃいマセ！如月グランドパークへよつこー！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた

顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが

「本日はプレオーブンなのデスが、チケットはお持ちですか？」「……はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。

翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる

「…………そのチケット、使えないの…………？」

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちよつとお待ちください

サーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに向けてどこかに電話をし始めた。

「私だ。例の連中が来た。声が違うからこりつちだ。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏な会話は

この係員、急に田の色が変わりやがつたぞ。まさか例のジンクスを作

るための工作員か？

・・・・・ん？明久以外にも来ているヤツらがいるのか？

「・・・・ウエディングシフト?」

翔子が首をかしげている。

如月グランドパークの企みを知らない「オイツにはよくわからない単語だらうな。つてか知らないでいて欲しい

「気にしないデぐだサーイ。コッチの話テース」

「アンタ、さつき流暢に日本語話してなかつたか?」

「オーウ。二ホンゴむつかしくてワカリまセーン」

取り繕つたように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい。

「とにかく、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放つておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで、向ひのやううとじていることはよくわかつた。

だが、そんなものに乗る気はないー・そつしないと、俺の人生がつ!

「そんなコト言わづ!」、お世話をさせてくだサーイ。トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りテース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐つたザリガニを送りマース」

「やめろつーそんな」とされたら我が家は食中毒で大変なことになつてしまつー」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろ？。
なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め・・・・！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「・・・・記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお一人の愛のメモリーを残しマース
・・・・・雄一と、お似合い・・・・・・・・・・・」

翔子は似非外国人の言葉に頬を赤らめていた。

「お待たせしました。カメラです」

帽子をかぶつてるがこいつ・・・

「藤原、何してやがる」

「私は藤原ではありません」

「彼女はココのスタッフのエリザベス・フジナガ（二十五歳）通称
もこたんでース。あなたの言うフジワラさんではありますーン」「
黙れ！年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな！しかもどう考え
てもその名前で通称もこたんはないだろー！」

「ちつ、ばれたか」

「何が目的だ・・・」

「大丈夫。メインは明久の護衛だ」

そう言って藤原は戻つていった。あいつはそこまでかかわる気はないみたいだな・・・

「カメラもキマシタし、ソコノきみウツシテください」

花壇を整備してたやつに声をかける・・・

藤原がいたって事は他のヤツらもいるな。なら・・・

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ

「・・・・・? ? ?」

きょとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。下着が見えるか見えないかといつぎりぎりの高さまでスカートを持ち上がった

「・・・・・！」

カメラを持った従業員はすぐさま反応した。つてことは

「ムツツリーーーもいたんだな」

「・・・俺はムツツリーーーじやない」

「・・・・・雄二、えつち

翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた

「なつ！？ち、違うぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「・・・・・それはそれで、困る」

翔子は腕に抱きついてくる。この頃暴力ではなくひつひつ行動だから対応に困る／＼

「でハ、写真を撮りマース

「ちょっと待て！？」

「はい、チーズ」

近くでフラッショウが焚かれ、ピピッという電子音が聞こえてきた

「スグに印刷しマース。そのまま待つていてくださいサイ」

「……わかった。このまま待ってる」

ちょっとして

「　　はい、どうづ

ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。翔子は嬉しそうに写真を受け取った

「…………ありがとう。…………雄一、見て。私たちの思い出」

翔子が俺に写真を見せてくれる。

「……なんだ、この写真は」

写っているのは俺と腕を組んで写っている翔子。そして

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その2人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』といふ文字。

未来を祝福する天使が飛び回っている。この写真をみると本当に結婚してしまうみたいじゃないか！

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正氣か！？」「ノンを飾られたら俺はもつ言へ逃れが出来ないじゃないか！」

そつ言こあつてると

『ああっ！』真撮影してん！アタシらも撮つてもらおーよー。『オレたちの結婚の記念に、か？ そうだな。おい系員。オレたちも[写つてやんよ]

いかにもチンピラのようなカップルがやつてきた。

「すいません。こちらは特別企画でスので……」

似非野郎が断るつとする。ビツヤリの写真撮影は例のウエーティングシフトとやらの一環で、俺たちだけが対象なのだろう

『ああっ！？ いいじゃねーか！ オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

『きやーつ。リヨータ、かつこーつ！』

男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。

絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もビツかと思

うが

『だいたいよお、あんなダッセえジャリビもよりもオレたちを[写]した方がココの評判的にも良くねえ？』

『そつよつ！ あんなアタマの悪そうなオトコよりもリヨータの方が

100倍カッコイイんだからあー』

『…

とりあえずチソピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げる
とするか。

「・・・・・」

「つておい翔子。どこに行くんだ」

急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める。

「・・・・・あの2人、雄一のことを悪く言つたから
「あのなあ・・・その程度のことでイチイチ立べじら立てていたら
キリがないぞ?」

正直あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入
れておくだけでも不愉快だ。

まあ、翔子怒つてくれた事に悪い気持ちはしなかつたがな

「行くぞ、翔子」

「・・・・・雄一がそう言つのなら

翔子もその光景は嫌だつたようで、促すと泣きついてきた

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「・・・・・折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて妙な雰囲気になら
ないようなアトラクションを探す。

すると、そんな俺たちにヒヨコヒヨコと着ぐるみが近寄ってきた。
確か表紙に載っていたキャラクターだ

『お兄さんたち、フリーが面白いアトラクションを紹介してあげる
よ?』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。

ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。

「じゃあ、フリーとやら。お前のオススメを教えてもらえるか？」
『あ。う、うんっ。フリーのオススメはねつ、向こうに見えるお化け屋敷だよ』

フリーとかいう狐の手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

「そうか、ありがと」
『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおじて歩き出す。すると慌てたように俺の腕をつかんできた

『ままで待つて下さーい！ どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？』
「どうしてもクソもあるか。お前もあの似非外国人の仲間だろう？ だったら、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だ。わざわざそんなところに行く気はない」
『や、そんなの困りますー！ お願いですからお化け屋敷に行つてくださいー』

「断る」

そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！

断固として否定し、俺は自由を謳歌するんだ！…………今更だが、なんか聞き覚えのある声だ。

気のせいか、クラスメイトの優等生に思えてならない。こいつも確認しておくか。

「そういうえば、明久が上白沢先生と一緒にここに来ていたぞ」

『ええっ、明久君が！？ それはどこで見たんですか！？』

本当にここからは、揃いも揃つて……。

「おい姫路。アルバイトか？」

『そんな事より、明久君をどこで見たんですか！教えてください！』

姫路からはいつも以上の強い殺気が感じられる。

まさか姫路までここまで墮ちるとはさすがFクラスといふべきか・・・

・・・・

少し明久に同情するな

そんな姫路の対応をしていると、姫路の方から携帯の音が鳴る。

『もしもし、美波ちゃんですか。・・・・・ 明久君が！？ ・・・・・ はい、分かりました！すぐ行きます！』

こいつ等はまともに仕事を行う気はないのか！？ 姫路は電話を切るとすぐにこの場から消え去った。

・・・・・ あいつ、確かに運動苦手なんじゃなかつたのか？

「まつ明久に関しては風見達がいるだろ？」「大丈夫だろ」「ハイ、すいませーん。お待たせしまシタ。チヨツと撮影二手間取つてシマこましタ」

そういうふじでいるとい、さうに面倒なヤツが現れた。さつきの似非野郎だ。

もう追いついてきたのか。ん？撮影？

「なんだ？さつきのバカツブルでも撮影したのか？」

「イエ。アノあと、モウ一組みのプレミアムチケットの方タチがキテ、そちラの方々ヲ撮影しまシた」

「は？何だと。俺達以外に来ているのか？いつたい誰が・・・」

あ、明久か

「お話はソレで終わりですか？では坂本雄一サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「前後の文に脈絡がないからな。それにイヤだと言つているだろ？が」

そんな危険地帯に自ら踏み込む気はない。

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろ？

なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・・・・！

結果的に入ったのだが・・・いきなり「俺は姫路のほうが好きだな、胸大きいし」という放送が流れ、さすがに翔子も切れたのか追いかけっこになった

確かに別意味でスリルあるな・・・

如月グランドパーク編2（後書き）

とりあえず、他ユーザー様書き方似てたらすみません

如月グランドパーク編3

あれはマスコットですか？いえ、鬼です（前書き）

明久編
です

如月グランドパーク編3 あれはマスコットですか？いえ、鬼です

雄一と別れた後

「さてどこ行こうか・・・」

「といつても私も初めてだからな・・・」

「なんだよね~」

うん・・・今度から暇なときはみんな連れて、たまに遊びに行こう

「オーウ、そこのかップルさん?写真なんかどうですか?」

(写真か・・・良いかもね(カップルさんのところは聞いてません))

「慧音、ついでだし写真撮つてもりおうよ

「・・・カップル//」

「慧音?」

「え、だ、大丈夫だ」

「どうしたんだる?」

「でハ、撮りマース。お一人さんチカヅイテくださいネー」

「ほら慧音」

「・・・よし・・・」

すると慧音は腕に抱きついてきた

「け、慧音//」

「ほら、前を見ろ／＼／＼
「はい、チーズ」

撮った写真にはちょっと驚いている僕と、その腕に抱きつきながら赤くなっている慧音が写っていた

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてください」

外国人の男はどこかにいつてしまつ。あれを印刷するのか・・・恥ずかしいかな／＼／＼
というか、もしあれが姫路さんや美波が見たら、・・・僕はその場で死ぬかも知れないな。

「お待たせしまシタ サービスで加工も入れておきまシタ

どれどれと僕達は写真を覗きこむ。

その写真に写っているのは先ほど説明した状態の2人とその2人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字、それに未来を祝福する天使が飛び回っている
そうだった・・・このチケットつて・・・

「この写真とアト、ウエディングドレス、タキシードを着てでの撮影をおこなう事にスマシタ。それとこの写真をパークの写真館に飾つても良いデスか?」

あ、微妙に違かったみたいだね・・・って

「やめてください。それとそのフレーム・・・」
「かまわないが、ただそのフレーム外してくれ」
「慧音!？」

「OK、分かりました。ありがとうございます。それでは、後ほどウェディング体験の方に移りタイト思うので、後でスタッフを向かわせマス」

かわせマス

「慧音、いいの？」

「まあ、思い出程度にはな」

まあ、やつ言つならいいか・・・

『トトロ』

「うん?
「なんだ?」

向こうから・・・なにあれ・・・?

化け物が現れた

「吉井君・・・・」

「アキ・・・」

「」の声・・・姫路さんに美波?」

「アーリーの件は、どうなった？」

「なんで先生と腕組んでるのか・・・説明してくれないかしら」

あ、まだ組んだままだつた

「さあ、お話を『ガシツ』え?」

すると後ろから一人の肩を腕が捕まえ

『お客様に迷惑かけちゃダメだよ』

ボイスチェンジャー使つてゐるのかな?マスコットキャラのノインが現れ

『ほら行くよ?』

「ちょっと待つてください!まだお話が・・・」

「そりやーお仕置きが・・・」

二人を引きずつて行つた

「・・・・まあ、行こうか

「・・・だな」

s.i.d.e 妹紅

ホントあの一人どうこうつもりだらうな・・・

『こちら咲夜、一人を捕獲したわ』

「ありがとう・・・助かった」

さて明久達は・・・お化け屋敷か・・・でも慧音大丈夫かな・・・

『こちら幽香、さつきの慧音結構だいたんだつたわね』

「そうだね。久々に一人だからうれしいんだろう」

『こちらアリス、お化けやしきに来たから仕掛けをしながら警護するわ』

「頼んだ」

ふう・・・雄一達は食事中・・・その後ウエディングシフトか

『こちら咲夜。ごめんなさい、上司の人に引き渡したら逃げられたわ』

「わかつた・・・永琳」

「何かしら？」

「麻酔薬作つて。二人見つけたらそれ使うから」

「わかつたわ」

ホント、何考てるんだか、あの一人・・・

side明久

ノインが一人を連れて行つたあと僕達はお化け屋敷にいるんだけど・
・

「う、うう・・・」

「慧音、怖いなら非常口で出る?」

「だ、大丈夫だ・・・」

そうだつた・・・慧音こういうの苦手だつたんだ。さつきからずつと背中にしがみついてる

「ひやつ！？」

「結構リアルだね・・・」

「うわつ！？」

「お、びっくりした

「えぐつ・・・」

「つて、慧音！？泣きださないで」

すると、上から

『ボトツ』

「…………え？」

生首の作り物が落ちてきた

「…………きゅうううう…………」

「あつ…………仕方ないな」

僕は氣絶した慧音を背負い、外に向かうのだった

如月グランドパーク編3 あれはマスコットですか? いや、鬼です(後書き)

ホントこの頃冷えてきたな . . .

如月グランドパーク編4 写真（前書き）

時間がまばらですのでおきをつけ

如月グランドパーク編4 写真

s.i.d.e 雄一

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「「チラでランチをお楽しみ下さい」

そう言つて似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。

そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。

この雰囲気、レストランといつより

「・・・・・クイズ会場?」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、TVでよく見るクイズ会場のよつたな雰囲気になっていた。

「いらっしゃいませ。坂本雄一様、翔子様」

スタッフが現れ、俺たちを席に案内する。

・・・・・「イツも見覚えのある面だな、オイ。

「秀吉。スタッフの真似事か?」

「秀吉?なんのことでしょうか?」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。

こいつ、役者モードになつてやがるな。こうなるとさう簡単に化けの皮は剥がせない。

「違うと云つなら、確認させてもらひます」

携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。スタッフは携帯を取るも、俺のは呼び出し中・・・

用意周到だな・・・そこまでやるか

「はい・・・すみません急用が入つたので失礼します」

そして『ザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

『皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントに参 加いただき、誠にありがとうございます!』

会場に大きくアナウンスの声が響き渡つた。この声は秀吉か

『なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いで始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです!』

「ふふつー。」

『そこで、当如月グループとしてはそんなお一人を応援する為の催しを企画させて頂きました!』

題して、【如月グランドパークウェディング体験】プレゼントクイズ!』

な、なんだと・・・

『本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエーティングプランを体験して頂けるというものです！

もちろん、ご本人様の希望によつてはそのまま入籍ということでも問題ありませんが』

「大問題だバカ野郎！」

『それでは、坂本雄一さん＆翔子さん！前方のステージへとお進み下さい』

『丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けた。

「・・・・・ウエーティング体験・・・・・頑張る・・・・・」

「落ち着け翔子。そういうたものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだだっ！腕が決まつて！行く！行くから放してくれつ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上に上がる。

そこには縛られた姫路と風見がいた。（ちなみにその後ろに島田も・・・）

s i d e 明久

時間は少し戻つて

慧音が気絶から復活すると

「ああ、此処にいましたね

「えっと・・・」

「ウエディング体験の用意ができましたのでお呼びに

「あ、わかりました」

僕達はスタッフさんに案内してもらい分かれた

「ふう、結構この服つて堅苦しいな・・・」

タキシードを着ながら僕はぼやく

「すいません、お待たせしました」

「あ、大丈夫ですよ」

女性スタッフからいきなり話しかけられて驚いた・・・

「ほり、お相手さんもお待ちですか」

「いや・・・しかしだな・・・」

「もう、愛そう尽かれちゃこますよ」

「うう、わかった」

そこには純白のドレスに身を包んだ慧音が立っていた

「・・・」

「ど、どうだ?」

「うん、似合つてゐるよ」

「そ、そつか／＼／＼／＼

やつぱ女性にとつてドレスを着るつて夢なのかな？

「では写真撮りますよ～」

「どうじょつかな・・・

『彼方達此処にいたのね！』

『はなしてください！！吉井君が』

『そうよアキガ！』

『永琳！』

『わかったわ』

？何か聞こえた気が・・・まあいいか

「ほつと」

「なつ！？」

「あら」

僕は慧音をお姫様だっこした

「あ、明久！？何を・・・」

「さっきの仕返しと思つ出づくつだよ」

「では、チーズ」

「写真は後でお渡ししますね」

その後写真を受け取り、僕達はスタッフの言つていた会場に向かった

如月グランドパーク編5 クイズ?何それわかるわけねーだろー! (前書き)

はい、クイズの部分を書き忘れ書けたバカです

如月グランドパーク編5 クイズ?何それわかるわけねーだろー!-

『それでは【如月グランドパークウェーブティング】プレゼントクイズを始めます!』

俺と翔子の間に大きなボタンが一つ設置されている。コレをおじてから解答するところオーソドックスなシステムのようだ。

正解したらプレゼント、こうじたまは、間違え続けたら無効になるのだろう。

それなら俺が間違え続けるとするか・・・

『では、第一問!』

ボタンに手を伸ばす用意をし、問題を待つ。さて、どんな問題が来るんだ?

『坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか?』

・・・・・おかしい。問題文の意味がわからない。

『ピンポーン!』

し、しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを!だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて

『はいっ!一答えをびりん!』

「・・・・毎日が記念日」

「やめてくれ翔子!恥ずかしさのあまり死んでしまうぞ!」

『お見事！正解です！』

しかも正解！？秀吉を睨みつける。

すると、秀吉は観客に見えない角度で、俺に向かって片目を瞑つてきた。

さては・・・・出来レースかっ！

そこまでして俺たちにウエーティング体験とやらを見せたいのか！？

それ以前に風見！！笑うな！！

いいだろ？。それならば俺は間違えて見せよう！

『第一問！お二人の結婚式はどういうで挙げられるでしょうか？』

『ピンポーン！』

ボタンを押し、マイクに口を寄せた。
不正解を出すなんて、造作もない！

『はい！答えをどうぞ！』

「鯖の味噌煮！」

『正解です！』

「なにいつー？」

場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか！？

『お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名
【鯖の味噌煮】で行われる予定です！』

「待てーーー絶対その別名はこの場で命名しただろー強引にも程があるぞー！」

『第三問ーお2人の出会いはどこでしようか？』

ダメだ、聞いてねえ・・・・・・だが、向こいつのやり口はわかった。今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、間違った解答を

「・・・・・・させない」

『ガチャツ』

「待てーーーその手錠どこから出したーーー？」

『ピンポーンー』

『はい、解答をどうぞー！』

「・・・・・小学校」

『正解です！お2人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るといつ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！』

くそーー手が動かせねえーー

問題を聞いてから動き出すよつでは遅すぎるよつだ。

翔子の妨害が間に合わないタイミングで解答する必要がある。

『第四問に参りますー！』

『ピンポーンー!』

問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、妨害が入る前に解答を済ませる…どんな問題が来るかはわからんが、【わかりません】と解答したら100%間違いになるはず!

俺は顎でボタンを押し・・・

雄一「わかりま・・・」

《正解です! それでは最終問題です!》

「うおっ!? 俺の解答を無視したぞ! ? 問題を無視した仕返しか!? もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになつたその時

『ちょっとおかしくない? アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ?』

不愉快な口調の救いの神が現れた。その場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

『あの、お客様。イベントの中ですので、どうか』

『ああっ!? グダグダとうるせーんだよ! オレたちはオキヤクサマだぞコルア!』

どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか。

『アタシらもウーティング体験つてやッ、やつてみたいんだけど

?』

で、
です
が、
・
・
・
・

『ゴチャヤゴチャ抜かすなつてんだコルア！オレたちもクイズに参加してやるつて言つてんだボケがつ！』

「へんへん！ しゃあ よーよ！ アタシらかあの一人に問題
出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝
ちってコトでー。』

慌てるスタッフたちをよそに、そのカツブルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひつたくる。これはチャンスだ。この連中が相手なら間違えができる。
あとは翔子の妨害を邪魔しておけば・・・・！

• • • • • • • • • ?

解答者席の陰で翔子の手を握る。これでボタンは押せない。
あとは向こうの問題に間違えるだけだ！

『じゃあ、問題だ』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言つ。

ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！

『オテ、答えるよ。わからぬえのか?』

確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、ヨーロッパ

その首都を答えるなんて不可能だ。

『・・・・・坂本雄一さん、翔子さん。おめでとうございます。

【如月グランドパークウェディング体験】をプレゼントいたします』

『おこ待てよー!』つら笑えられなかつただろー!? オレたちの勝ちじゃねえか「ルア!』

『マジありえなくない!ー!』の司会バカなんじやないの!ー!』

バカップルが、あと驕り立てる中、ステージの幕が下りてくれる。

Fクラス以上のバカがいるとは世界って広いもんだな・・・・。

キングクリムゾンー!

『それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です! 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えくださいー!』

「坂本雄一さん、お願ひします」

舞台袖でスタッフが耳打ちしてきた。
コイツをブチのめして逃げてやろうか。

「抵抗したら、海栗とタワシの活け作りを雄一の実家に送るぞ!」

くつ。そんな物を送られたら、
あの母親はきっと全部海栗だと勘違いしてタワシにも手を出しち
まつ……!

「やれやれ・・・・・・。まあ、あくまでもただの体験だしな。適

当に付を合つてやと終わらせるか・・・・・

油断を誘つため、スタッフに聞こえるよつがやく

「さう、どうぞ」

「あいよ」

小さな階段を昇る。そのままステージに上ると、その光景に一瞬眩暈がした。

雄一「おおい・・・・・・。なんだよこのヤツト・・・・・・・
数え切れないスポットライトにライブステージのよつな観客席。
スマートの設備はあるかバルーンや花火の用意までしてあるよつこ
見える。

向こうにある電飾なんていくらかかつてるか見当もつかん。

『それでは新郎のプロフィールの紹介を

』

ん?俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。
目的のシーン以外の部分もきちんとしているよつだ。ちつきのクイ
ズもそうだが、
どうやって調べたんだ? (答:幽香が翔子に聞きました b.y.作者

『めんどくさいので省略します』

風見・・・・・めえ・・・

『では、いよいよ新婦の』登場です!』

脱出はもう少し待つとしよう。折角來たんだ。
翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。

そんなことを考えながら待つていると、目が暗がりになれるよりも早く、スポットライトが点された

『本イベントの主役、霧島翔子さんです!』

言葉を失つた
・・・あれは・・・・誰だ?

卷之三

静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰のものともわからぬい台詞。

雄

۱۰۸

۱۷۰

動搖して変な口調でしゃべった

・・・・嬉しい・・・・

「・・・ずつ」

だつたから・・・・。

私一人だけじや、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・・・・

L

幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。

それは罪悪感と責任感からくる勘違いなはずなの』

「…………だから…………本当に嬉しく…………。他の誰でもなく、雄一と一緒に『』してござられることが…………」

でも……俺は……

『あーあ、つまんなーーー』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。

『マジつまんないこのイベントある。人のノロケなんぞいつでもいいからあ、早く演出とか見せてくれない?』

『だよなー。お前らのことなんてビリでもいこひての』

空氣読まないバカどもだな……

『つてか、お嫁さんが夢です、つて。オマエいくつだよ?なに?キヤラ作り?このスタッフの脚本?バカみてえ。ぶつけやけキモいんだよー。』

『純愛』でもやつてんの?そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドおー。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない?ギャグにしか思えないんだケドお』

『そつか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持てるヤツなんてい「黙りなセー」……なんだ?ーてめえー!』
『黙れつて言つてるのよ肩が……』

そこにはこつもの笑顔はない……無表情の風見が立っていた

如月グランドパーク編5 クイズ?何それわかるわけねーだろー! (後書き)

分割でつさ。幽香が切れた理由は幽香も同じようなモノつてのもありますか・・・この作品の幽香にとつて思いとは強ければ強いほどきれいだという扱いでそれを侮辱されたからです

如月グランドパーク編6 僕はお前の夢を絶対に笑わない（前書き）

私的にこのシーンは結構好きだ
サブタイトル編集

如月グランドパーク編6 僕はお前の夢を絶対に笑わない

s i d e 明久

『は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですか？』

秀吉が叫んでいるがそれよりも幽香だ！！

あれは完璧に切れてる。幽香にとつて想いとは強ければ強いほど花のようにつれいだと前言つていた。

それを侮辱されたのだから切れるのも仕方ないけど・・・

「慧音、此処で待つてて」

「ああ、幽香を頼んだ」

僕は動きだした

「貴方達に霧島さんの想いを笑えるほどの想いがあるのかしら？霧島さんはね、この時をずっと待つてたのよ？あっちの馬鹿な新郎に心の中ですっと積もってた想いを打ち明ける口を・・・何年もかけて育つていった、その大切な想いを・・・」

くつ！間に合うか？

幽香はゆっくりと2人に近づいて行く・・・

「バカにしたんだから覚悟出来るんでしょうね・・・」

そして幽香は一人に向かつて拳を振り下ろした

『バシッ！！！！』

「え・・・？」

「ふう、間に合つたか・・・」

「な・・・明久？」

僕は当たる少し前に幽香の腕を掴んで止めた

「邪魔しないで明久！！私は・・・」

「幽香気持ちはわかるけど、暴力に走っちゃダメだよ・・・」

「そ、そうだ！お、俺たちはお客様・・・」

「おい・・・少し・・・黙つてろ・・・」

「ひつ！？」

僕はそれだけ言つて幽香を連れて行つた

《霧島さん？霧島翔子さんつー皆さん、花嫁を捜して下さーー！》

スタッフがドタバタと駆け出す。

「坂本、霧島さん探さないと・・・」

島田さんがそう言つと

「悪いが、バスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな

「え？ ちよ、ちよっと、坂本・・・・・！」

「そ、そんな・・・・・」

「はあ・・・・・」

「明久？」

「ほつといて問題ないと思つよ」

「な、アキまで！」

「どうこういじだ明久？」

慧音達も聞いてくれけど……わかり切つてるじゃん

「あの雄一が本氣で霧島さんを無視するわけないでしょ？」

僕はみんなに言い放つた

s.i.d.e 雄一

明久は気づいてたっぽいよな……ありがとな、明久

『・・・・・・・クソオ、あのガキども・・・・・』

『リヨータ、大丈夫だつて』

『ああ、そうだな』

それじゃ、ひとつと用を済ませるか。

ゆっくりと歩み寄り、背後から顔をかける

「なあ、アンタら」

「ああ？ あんだけ？」

『リヨータ。コイツ、さつきのオトコじゃない？』

『みてえだな。んでその新郎サマがオレたちになんか用か、あア！？』

ほんと、まだ明久とかのほうが強いな

「いや。大したよつじやないんだが・・・」

借り物上着を脱ぎ、タイを緩める
翔子の想いをバカにしたんだ・・・

「うふうとや」までシワあ貸せやあ・・・・・・・・・・・・

殴らねえと氣がすまねえ！――！――！

「よつ。遅かつたな翔子」

木によつかかつて待つていると翔子が俯きがちにやつてきた

「・・・雄一・・・どうして・・・」

「此処だと思つてな」

そつ、此処は昔翔子に嘘を教えてしまつた場所・・・

「さて。それじゃ、帰るとすつか

明久から受け取つておいた翔子の忘れていた鞄を抱き直して、駅に向かつて歩き出す

「・・・雄一」

「何だ?」

「・・・・・私の夢、変・・・・・・・・?」

「・・・・・」

やつぱり氣にしてたのか・・・

「翔子・・・この際だから言つておく

これは言つとかなければならぬ

「お前の俺に対する思いは勘違いだ」

「・・・・・・・・・・・・」

「だが・・・俺は・・・・・・・・俺はお前の夢を絶対に笑わない。お前の夢は、大きく胸を貼れる、誰にも負けない立派なものだ。まあ、相手を間違えていなければの話だけどな?」

そつ言いながら、ブール付ける

「まあせつかくの体験だつたんだ貰つとけ」

「雄一・・・・」

「そうだ。それと・・・・・・弁当、貰かつたぞ」

「・・・・・・・・」

「帰るぞ、遅くなると勘違いされそうだからな

「雄一・・・・」

翔子の大きな声・・・久々に聞いたな

「何だ?」「・・・私・・・・」

「やつぱり何も間違つていなかつた！」

そつ言つて・・・翔子は微笑んだ・・・

side 明久

はあ・・・昨日はあの後美波と姫路さんに追いかけられるは散々だ
つた・・・

「よ、明久」

「あ、雄一おはよう」

「昨日はありがとな」

「気にしないで」

「あ、そうだこれ」

雄一が一やつつきながらチケットを渡していく

「映画のペアチケットだ。『誰か』と一緒に行くとい
うん・・・ありがとう」

なんか企んでるのか？

「あ、アキつ！ そういえば、ウチ週末に映画を観たいとおもつて
いたんだけど・・・」

「あ、明久君つ！ 私も丁度観たい映画があつたんですけどー。
「へえ？ どうして2人ともそんなに殺気だつてるのー？」

くつ・・・」うなつたら

「ゆ、幽香、妹紅」

「ん？ なにかしら？」

「ん？ なに？」

「今度一緒に映画見に行こう」

「え？」

「アキ」

「吉井君？」

意外と選択しミスったかも

如月グランドパーク編6　俺はお前の夢を絶対に笑わない（後書き）

最後はやつぱりこるよね。ちょっとテレビのまつをアレンジ？です

PV25万越え記念短編 女装マジック（前書き）

OVAのあれです
大半会話文です

PV25万越え記念短編 女装コンテスト

「文月学園主催、女装コンテスト」「さて始まりました文月学園らしいこの企画、時期はいつなのか？目的は何か？場所はどこなのか？」
「そういった細かいところはすべて無視して進めて行きましょう」「解説を務めますのは、私新野すみれと」
「保健医、八意永琳と」「学年主任、高橋洋子です」「――よろしくお願ひします」

特別版

「今回は女装コンテストですが初めにこの方です」「明久に手を出す奴は許さない。2年Fクラス男装少女、通称もこたんこと藤原妹紅さんです」

すると会場中央から女子制服を着た妹紅が現れた

「いや～普通に似合つてますよね」「まあ、顔は整つてますし普通にかわいいでしちゃうね」「しかし、一番の注目は・・・胸でしょうね」「ちなみに藤原さんのバストはCカップですよ」「今さらりと八意先生個人情報を吐かれましたね～」「藤原さんは暴れそうになつてますけど、吉井君に抱がれていきましたね」「吉井君の前では形無しですからね～」「藤原さんのたれパンダ状態眺めながら行きましょ～」

「それではエントリーナンバー1番、卑怯、変態、女装趣味と三拍子そろつた外道！」

2・B代表根本恭一さんです」

「いや～これは思った以上に汚い絵ですね～初っ端から誰得～な企画か分からなくなつてきました」

「そんなことを言つてはいけませんよ、新野さん。

彼の変態としてのプライドを傷つけてしまつては可哀そうです」

「変態としてのプライドなんでものはむしろズタズタにされるべきだと思いますが気にしないでおきましょ～」

「むしろ抹消するべきだと思います」

「ちょっと八意先生が危険な発言をしましたが無視しましょ～」

『ガタソッシュ』

「なお審査員は点数をつける代わりに、出場者を強制的に退場させる権限を持ちます」

審査員 木下優子 風見幽香

「審査員がこれ以上見るに堪えないと思つたらボタンを押すわけですね」

「そしてあまりにひどい場合は私が追加を押します」

「さらりと問題発言がありますがそれなります」

part2

「Hントリーナンバー2番、Fクラス代表坂本雄一さんです」

『ガタソニ』

「それはいきなり厳しい評価、ターンすらさせて貰えませんでしたね」

「坂本君は中央・・・つまり」

「はい、それ以上は言わせませんよ?」

「八意先生が高橋先生を氣絶させてるのは無視して次いきましょう」

part3

「さてエントリーナンバー二番、本田は撮る側ではなく撮られる側、ムツツリ商会の若き経営者、土屋康太ことムツツリー一さんです」

「これはレベルが高い、普通にかわいいです」

「土屋君は背も低いですしあまり喋りませんからね」

「なんだか高橋先生が気絶していますが無視して、普通に渡り切りましたね」

part4

「続いてエントリーナンバー4番、学年きつてのバカと言われたかと思うと1000点以上という驚異的な点数を出した観察処分者」と吉井明久さんです」

恰好としてはメイド服にロングスカート金髪蒼眼である

「なんていうか女性として負けた気分になりますね~というよりあの細い腕でどうやって壁走りとかしてるのでしょうか」

「ちなみに吉井君は蹴りでコンクリートを碎くくらいの筋力がありますね」

「ちょっとした恐怖情報ですね。あら~立ち止まりましたね」

『――「ツ』

「――

「やばいですね・・・すごい破壊力でした――――審査員も魅了されでます――」

「たしかに――――見慣れててもあればきついですね――――」

「なんかすごい発言がありましたが無視しましょう――――」

partファイナル

「それでは最後のお一人、エントリーナンバー5番、本命中の本命と言われ」

『バンツ――ガタンツ』

「――――・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、それではこれを持ちまして文翔学園女装コンテストを終了します。
ではまたの機会にお会いしましょう。さよなら～」
「失礼します」

ジャンジャン

うん、結構ムズイな

プール編 準備（前書き）

水着なんでわからないな・・・

プール編 準備

ある放課後

「吉井、此処にいたか」

「西村先生、どうしたんですか?」

「実は・・・」

「プール掃除?」

「そうそう、一人じゃさすがにきつくてね」

「べつに構わねえが、きつくねえか?」

「・・・重労働」

確かにそうだけど

「褒美という程じゃないけど掃除した後プールを自由に使っても良いって」

「ほう」

「秀吉達も来ない?」

「楽しそうじやし行くかのう」

「・・・他には?」

「そうだね~咲夜達は後で誘つとして、幽香、妹紅、ちよづじよか
つた」

あるとちゅうびよべ幽香と妹紅が帰ってきた

「ん? なに、 明久?」

「実はね・・・」

少年説明中

「つてことなんだけど来る?」

「行きたいけど・・・」

「そうね・・・私達水着がないわね」

「それなら買いに行けばいいし、今週末する予定だよ」

「わかったわ」

「慧音誘つていい?」

「うん、 誘つ予定だつたし」

「OK」

「んじや後は・・・島田、姫路」

雄二が一人に声をかける

「どうしたの坂本? 何か用?」

「呼びましたか、坂本君?」

「2人とも今週末は暇か? 学校のプールを貸し切りで使えるんだが
どうだ?」

「「え・・・」

?どうしたんだ?

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・
?プールって言うと、やっぱり水着だし・・・」

「そ、そうですよね。水着ですよね・・・その、えっと・・・」

なんかあるのかな？

「で、どうするんだ2人とも？」

「い、行くわ！ その、イロイロと準備をして・・・」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

行くみたいだね

「よし、あとは翔子を誘うだけだな」

「へえ、雄一から誘うなんて意外だね」

『ポン』

「もしもこれで誘わなかつたらどうなるか・・・わかるだろ？」

「・・・うん、『めん』」

その後、咲夜と永琳を誘いに行くと行くと即答され、全員分の水着の買い物に手伝わされた

まあ、確かに荷物持ちはほしいよね

プール編 準備（後書き）

外伝も考えながら～書く～

プール編2 着替えそして傷跡（前書き）

もう一回言います。明久は秀吉を男と認識しています

プール編2 着替えそして傷跡

そしてその週末。

「おはよー。絶好のプール日和だね」「おはようじゅんや明久、良い天気じゅな」「おはようじゅります明久君、今日は良い一日になりますね」「おはようみんな」

「あ、上白沢先生と八意先生も来たんですね」「ああ、ちょうど休みだったからな」「先生、口調……」「これが素だ。気にするな」

確かに知らないと驚くよね

「あ、ムツツリー……」「……（カチヤカチヤ）」「撮つたらコワスヨ？」「……（泣々）」「ていうか撮れないでしょ」「確かにな……」「まあ、あれじやあね……」「……問題ない」「……輸血の準備は万全」

最初から鼻血の予防を諦めてるあたりどうかと思つたけど……

「準備と並べば、秀吉は新品の水着を買つとか言つたよね? 記れ
ずに買つて来たの?」

「つむ。無論じや」

「ちなみに買つて来た水着じやが・・・」

「・・・・!・(くわつー)」

「・・・トランクスタイルじや」

「バカなあああああつ!!」

なつー! ムツシコー! が叫んだ! ?

「無視していいまじょつか」

「せうだね」

「せうね」

ふう・・・

『タタタタタタッ』

「お兄ちやん、おはようドウ! 」「おひと・・・」

フランもせうだがちつてこそはなとで突つ込んでくるぞだらつか

「わう葉用つてば、アキがビックリしてるでしょ?」

「葉用ちやんか、久しづりだね」

「バカなお兄ちやんは冷たいですつ。酷いですつ。ビックリ葉用は
呼んでくれないんですか?」

「あ、うん。」めんね葉用ちやん

「呼んだら呼んだで暴れそつなバカがいるけどな」

「そうね」

幽香、妹紅・・・

「明久・・・おかしいと思つのは私だけかしら・・・」

「咲夜・・・言わないで・・・」

虚しくなるから・・・

ん・・・雄二が鍵取つてきたみたいだね

「おはよっ雄二、霧島さん」

「おひ。きちんと遅れずに来たよっだな」

「・・・皆おはよっ」

「んじや、早速着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行つてくれ。

着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれ。

姫路さんと美波、幽香と妹紅、慧音と永琳、咲夜は霧島さんに。僕とマッシローーと秀吉と葉月ちゃんは雄二に。

「・・・ん? いらっしゃり、葉月ちゃんは向こうでしょ? 霧島さんについて行かないダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ほり、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田ー? わしは男じゃぞ! おままでそんな田でワシを見るように! へへ」

ドンマイだよ秀吉・・・

「なら、秀吉と誰か一緒に着替えればいいだろ?」

「そうだね・・・じゃあ行こうか秀吉」

「な、アキ!・・・」

「吉井君!・?」

「・・・・・はいはい、いくよ~」「・・・・・

「あ、アハハ」

そこで皆と別れ着替えに向かつた

更衣室で

「残念だつたね、秀吉」

「」の頃皆がわしを女子として見てゐるのう・・・

普通はわかるのにね

「・・・・・? 明久・・・・」

「ん? どうしたの?」

「その傷・・・・」

秀吉が言つてゐるのは左胸の傷かな?

「昔事故でね

「そうか・・・・」

「さつ、みんな待つてゐるだらうじに行こうか?」「じゃな

僕達はプールに向かうのだった

ね
ま
け

秀吉

「なんじや？」

「その水着……女用たよ？」

17

プール編2 着替えそして傷跡（後書き）

傷に関しては外伝で書いてあります

プール編3 水着、そして鼻血（前書き）

水着の知識はないですがなんとか説明入れました

プール編3 水着、そして鼻血

「やつぱり女子はまだ着替え終わっていないみたいだね」
「…………（「クリ）」

「ま、女性が準備に時間がかかるってのは、当然だからな」

「気が利いてる雄一なんて……（「ユ

「で、秀吉はどうしたんだ？」

「それは……」

少年説明中

「確かにそれは……といいで明久、やつぱそれ着けてるんだな」

結晶を見て雄一が言ひ

「大切だからね」

「後、やつぱ立つなその傷」

「あはは」

『タタタタタ』

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

「葉月ちゃん？」

なんか胸が……でかムツツリーーが死掛けてるよ……

「…………弁護士を呼んで欲しい」

「アハハ・・・

「こ、こらああつ？！お姉ちゃんのソレ、勝手に持つて行っちゃあダメでしょっ？！返しなさい葉月つー？」

「ん？ 今美波が返しなさいって言つていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パツ……」

「この一撃に！」

「そんなことしたら・・・

「あ、妹紅」

上は赤いビキニ、短パンの様な水着を着ていた

「うん、やっぱ赤とかが似合つね

「ありがとう・・・／＼／＼／＼

あれ？ 美波どうし・・・

「負けた・・・」

「・・・・・・（ドサッ）」

「えつと輸血道具は・・・」

「な、翔子。なんで目を隠す

「・・・他の人の見ちゃだめ」

黒いビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた格好の霧島さんが雄一を田隠していた

「霧島さん、坂本の目を隠したら水着の感想が聞けないわよ？」

「・・・・・それは失敗だった」

幽香が突っ込むと、霧島さんが手を離した

ちなみに幽香は、黒の布を縛るタイプのビキニだ

「デカイ・・・」

美波が怖いな・・・

「すみません！ 背中の紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって・・・！」

「姫路さん！ 急いだらこりますよ」

咲夜と姫路さんも来たみたいだね（咲夜は青っぽいスポーツブラタ
イプ）

「W o r a u f f u r e i n e m S t a n d a r d h a t
G o t t j e n e u n t e r s c h i e d e n , d i e
h a d e n ,
u n d j e n e . D i e n i c h t h a b e n - ? W
a s w a r f u r m i c h u n g e n u g e n d - !
「神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！？ウ
チに何が足りないっていうのよ！」

僕は美波の言いたいことを訳し

「ドイツ語で言つたらみんな分かんないから日本語で言おうね・・・

「わしそれをすぐに訳したお主がすごいこと思ひやぞ」

後は慧音と永琳か・・・

「お待たせしたわね」

「すまん遅れた」

「あ、来たみたい……」

「…………」「」

「姫さんスタイルいいですね……」

「…………」「」

「やつぱす!」いわね……」

「うん……」「」

「そうね……」「」

慧音は水色のビキニに腰に布を巻いたようにしている。（アニメの

姫路がつけているタイプの水色）

永琳は赤と青の胸元と背中が大きく露出した水着だ

「どうしたのかしら?」「」

「どうかしたか?」「」

「うん……気にしたら負けだよ」「」

「で、明久君」「」

「なに? 永琳」「」

「どうかしら?」「」

「うん、皆似合つてるよ」「」

「…………」「」

赤くなつてるけど……幽香に妹紅。なんで美波と姫路さん押さえ
てるんだろう……

「明久、傷……」「」

「隠す意味とかないからね、気にしないで慧音」「」

さて、僕は死にかけてるムツツリーーーを診るか

プール編3 水着、そして鼻血（後書き）

絵募集中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2653z/>

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月25日12時45分発行